都市戦記
妖魔アルディーン2

井上ほのか



悪の栄える犯罪都市ネオ・ナリタ。元気者の真夜子のもとで暮らす、天才少年・涼のなかには、伝説の妖魔が潜んでいる。その名は、アルディーン。誰も制御できなかったすさまじい呪力で、涼は今夜も、〝悪〟に立ち向かう。

ところが、思わぬ相手が目の前に。香港の女頭目・梨花夫人！　妖艶な美貌と毒をふくむ色香は、男たちを狂わせる。涼も、うつろな目じゃ、陰で笑う本当の敵の毒牙は見えない！　目を覚ませ、闘え、涼！　愛する者のために！

X95-9

講談社X文庫

都市戦記・妖魔アルディーン2

井上ほのか



目次

プロローグ——10
第一章　霧の夜——香港からの魔手——22
第二章　ザ・タワー——75
第三章　錬金術師ファレル——124
第四章　フェスティバルが近づく——175
第五章　霧——220
エピローグ——294
あとがき——300

アルディーン2」登場人物



涼・雨宮(闇の皇子)
妖魔アルディーンにとり憑かれた天才少年。

真夜子
涼の同居人。気の強い新聞記者一年生。

トマス・ナルダン
事業家。ネオ・ナリタの改造計画をもつ。

「赤鍋亭」のマスター
涼のバイト先のレストランの主人。

「都市戦記・妖魔おもな



↑威・梨花（イー・リイホア）（スコルピオン）
香港（ホンコン）の妖花（ようか）。美貌（びぼう）と色香（いろか）で涼に妖しく迫る。

↑ナイトハンド（ナサニエル・ゴードン）
ネオ・ナリタのもう一人の黒衣の主。冷徹。

→ファレル
梨花夫人いわく口の軽い小悪党。

←三日月真吾（みかづきしんご）
ネオ・ナリタ警察の警部。女好きの好漢。

イラストレーション／瀬口恵子（せぐちけいこ）

都市戦記・妖魔(ようま)アルディーン2

世界設定――ネオ・ナリタについて

このストーリーの舞台となるネオ・ナリタという街は、近未来の都市だと思ってください。〝いつか〟……〝ありうるかもしれない〟、そんな街です。

市としては港と空港があり、郊外にあるアカデミアが重要な存在といえるでしょうか……。

過去一世紀のあいだに、さまざまな悪条件が重なって、悪名高い犯罪都市となってしまっています。

特に、市中央にある〝旧市街〟と呼ばれる場所の状態はひどく、殺人も強盗も日常茶飯事のように起こるスラムです。

ここに住む人々の生活は貧しく、最新の設備はみなかぎられた金持ちか警察のもので、ふつうの家庭にはラジオすらめったにないようです。

……約七〇年ほど前、この街にひとつの邪教の教団が存在していました。

『七賢人教団』と呼ばれていた彼らは、荒れはてた街・旧市街に巣くい、さまざまな呪法や祈祷によって、一時はネオ・ナリタ全市をおびやかすほどの勢力を得てい

ましたが、『闇の皇子』または『アルディーン』と呼ばれたもっとも大きな力の源は、ある時を境にして、彼らの手から失われてしまったようなのです。

――恐るべき妖魔のパワー、アルディーン。

七賢人のコントロールを離れた妖しい力は、それから長いあいだ、この街に住む人々の恐怖の的となってきました。

形もなく、正体もさだかでないこの妖魔は、通常7年から17年の周期をもってネオ・ナリタに現れ、かならず誰かにとり憑くのです。

とり憑かれた宿主はその魂まで魔物に変わり、恐ろしい殺人鬼となるのが常でした。凄まじい妖力を身につけていても、心は獣同然になり、警察や人々の手で狩られていく……それまでに、はたして何人の犠牲者が出るのか？

しかし、ネオ・ナリタにかかったこの呪いが、ついに解ける日がおとずれました。連邦歴211年、ある一人の少年が旧市街に現れて、闇の皇子の妖力と完全に合体したのです。

彼はアルディーンの力を得ても、人としての強い心を少しも失いませんでした。

彼の名は、涼・雨宮……まだわずかに16歳です。

プロローグ

犯罪都市、ネオ・ナリタ。今夜も街に銃声がとどろく……。

「ちくしょう、こうなったら貴様も道づれだァ!!」

鋭い目をした強盗が、警官を1人盾にとって、怒鳴っている。ここはネオ・ナリタ。

……魔力と恐怖でこの街を支配していた邪教の七賢人が崩壊してから、数か月たった。恐るべき超能力の持ち主だった教団の主、デュークはもういないが、街の状況はこのとおり平和にはほど遠い。

七賢人の手にあったネオ・ナリタの無法地帯、いわゆる旧市街の王座をねらい、いくつもの犯罪組織がいっせいに街に乗りこんできたからだ。

旧市街で発生する犯罪も、同時に増えてしまった。

強盗・恐喝・内輪もめ殺人……昨日もナリタ署は、港からコンクリートづめのギャングの死体を引きあげたばかりである。

「アーア、あのドジ、捕まりやがったよ……」

遠まきに包囲しているパトカーの後ろで、ナリタ署の三日月警部がうんざりしたように首を振った。三日月真吾、独身。まだ若いが警部である……陽気でハンサムな大男で、品位などかけらも持ちあわせていないが、ネオ・ナリタでは、もてるタイプだ。

仕事は頭より身体でやる。張り込みとデートが重なると、さぼりはしないが現場に彼女を連れこむこともあった。

ほかの街でならまぎれもない不謹慎警官だが、ネオ・ナリタではこれが理想の刑事かもしれない……なぜなら彼は生き残っている。

ナリタ署の任務といえば、凶悪な犯罪者ばかりが相手で、毎日が危険なデスマッチのくりかえしになるが、彼はつねに生き残り、部下たちもうまく生かして帰した……。

さて、

「警部！　どうします……突入ですか⁉」

人質をとられて警察側は急に不利になってしまったが、すでに10人近くに重軽傷を負わせた凶悪犯だ。このまま、見逃すわけにはいかない。新米刑事の声にあせりが混ざっている。

「警部ッ、もう時間がありません！」

「……しかし、どうしてこう次から次へと事件が起きるのかね？　ひょっとして、おれは一生こうやって悪党どもを包囲しているのかなァ」

人生ってなんだろう……そう言って新米刑事の上司は遠い目をした。

「そ……そんなこと言っている場合じゃ」

〝あいつら明日にしてくれれば、おれ非番だったのに〟とんでもない言葉をつぶやいて、あくびをする三日月警部。

「警部!!」

ついカッとなった若い刑事を無視して、真吾警部はナゾのようなことを言う。

「このくらい派手な騒ぎになれば、そろそろあいつが出てくると思ったんだがな……」

〝え？　何のことです？〟その肩をポンとたたいて、

「そういえばお前、新人か……どこから来たんだっけ？」

――それなら知らないのも無理はない。

真吾警部が思ったとき、逃走する車のエンジンがかかった。

「しまった、のんびりしすぎたぜッ！」

飛びあがると、即座に指揮を始める……さすがに立ち直りはきわめて早い。

〝運転席にいるものはパトカーの配置を変えろ！　やつらを通りから出すな!!〟

しかし、敵も死に物狂いである。めちゃくちゃな体当たりで、追いすがるパトカーを建物の壁にたたきつけ、フルスピードで逃げにかかる。

後部座席に人質の姿が見えるので、後ろからの狙撃は、どうしても鈍りがちになる。

狭い通りのあちこちから、戦場のような火の手があがる。

「くっそう、あの悪党ども!!」
何回目かのターンで、ほぼ完璧に追っ手の車をつぶすことに成功した逃走車は、エンジンの回転音を高めた。くやしがる真吾警部の目に、勝ち誇ったような犯人たちの顔が車の窓ごしにチラリとうつった。
そのとき、
「待てッ、いかせないぞ！」
どこか上のほうから、高い少年の声がひびいた。
見あげると、ビルの3階の外壁に誰かいる！　月明かりに照らされた、くっきりとした黒衣の影……ビルの窓わくに足をかけて、楽々と立っているようだ。
その影は肩から何か、銃のようなものをおろすと、逃走する車の行く手を狙って撃った。ビルとビルのあいだに、いきなり鋼鉄のネットが張りわたされる。
時速90キロでつっこんだ車が、派手な音をたてて横転した。
黒い人影はその高さからヒラリと飛びおりてきた。
「け、警部ッ、あれは……あれはなんですかッ!?」
仰天して指さす新米の刑事に、三日月は軽い調子で〝まあ見ていろって〟と答えて目を光らせた。
……突然、あらわれた人影は全身黒ずくめ、黒の短いケープを肩からさげて路上に立って

いる。まだ小柄で、あきらかに少年だが、名状しがたい妖気がどこかしらただようのだ。
顔は黒のゴーグルで隠されて見えない。
「名前だけは先に教えてやるからな。あれがネオ・ナリタの妖力、アルディーンだ」
――竜と魔女とのあいだに生まれた、六番目の魔が闇の皇子である。
彼は少年の姿に似るが、力は妖魔をもしのぎ、
その牙でたやすく魔物たちを引き裂く。
彼の名をアルディーンという……。

魔の教団が支配していたこの都市、ネオ・ナリタの数ある不吉な逸話のなかで、特に恐れられていたのが、妖力〝闇の皇子〟の伝説であった。
それはいにしえに邪教・七賢人教団が呪殺のために呼びおこした強大な霊力であるとも言われるが、正確なところは三日月警部にはわからない。
ただ、たしかなのは、その力がある時期を境に七賢人のコントロールから離れ、ネオ・ナリタ旧市街で荒れ狂うようになってしまったことだ。
7年か……17年ごとに、それは旧市街の誰かにとり憑く。そして、とり憑かれた人間はそのパワーの強大さに耐えきれずに発狂し、精神の底まで妖魔と化して暴れまくる。



彼は人間ばなれした力と、不気味な能力を身につけるが、心は獣と同じになる。
そして、アルディーンのための生け贄を……血を求めて無差別に殺しつづけるのだ。
それは不幸な宿主となってしまった人間が殺されるまで、やまないはずであった……。
「ところが今回の宿主になったあいつは違ったんだな」
〝あいつはどうやらアルディーンに負けずおとらずの化け物だったらしい〟
これまで誰にも受けきれなかった〝闇の皇子〟の妖力を、ついに支配できる宿主が現れたのだ。
17年めの呪いとともに、闇の皇子が憑いた相手は、どうやら人並みはずれた知力と精神力の持ち主だったらしい。今までの例とは逆に、彼自身の強い意志がアルディーンをコントロールするようになった。ネオ・ナリタの妖力は、その性格を変えた。
――七賢人との見込みのない戦いに勝てたのも、あいつのおかげさ。
心の中でだけつぶやいた三日月警部は、路上に立っているアルディーンの姿を見やった。
「おせっかいな奴でな。こういう場所によくちょっかいを出してくるんだ」
でもなぜです？　という問いには、
「知るか、あいつはたぶん血が好きなんだろう」
うそではないが、人聞きの悪いことを言う……横倒しの車の中から、犯人たちがそろそろ出てきた。

「野郎ッ……やりやがったな!!」

かなり頭に血がのぼっている犯人の一人が、黒衣の少年に向かってライフルを乱射した。

――アッ、ひどい!!

若い刑事が顔色を青くしたが、三日月は平気な顔で見ている。

「あいつにむけて撃つところをみると、奴らも他所から来た組織の下っぱだな。ネオ・ナリタに来てから、まだ日が浅いや……」

その声でおそる視線を戻すと、少年は血まみれで路上に倒れているどころか、笑いながらスタスタ近よっていく。

ギョッとした顔の犯人が続けて何発か撃つが、銃弾は彼のまわりでことごとくはね返されていってしまう。

「け、警部、あれはいったい……」

あれがあいつの得意ワザさ……あっさりと言われて、若い刑事は気絶しそうな表情になる。もっと驚いたのは犯人たちだっただろう。

しかもヒューン……という口笛に似た奇妙な音が彼の周囲で鳴ったな、と思うと後ろで逃げようとしていた一人のコートが、かまいたちにあったようにズタズタに切れた。深くはない傷だが、男はその場で失神した。

のびてしまった彼のまわりに、ちょっとした血だまりができつつある。

「なぜ、あんなことができるんですッ!?」

〝銃を捨てて投降しなさい〟

妙に金属的なひびきの混ざる声が一歩一歩近づく。

黒衣の手がさしのべられると、相手は恐怖でしびれたようにライフルをわたした。

ゴーグルの下の顔が、一瞬、笑顔すら見せようとしたのだが、

「……さがれ！　人質の頭がふっとぶぞ！」

一味の指揮者だったらしい男が、人質のひたいにピッタリ銃口を当てながら叫んだ。

闇の皇子はとっさに口もとを引きしめると、ゴーグルの下の瞳を赤く輝かせた。

「ウ……ウワァ!!」

自分の手が意志に反してねじまげられていくのに男は絶叫した。銃を持った利き手は指一本動かせない、しかもみるみるうちに銃口は自分に向けられていくのだ。

地獄に燃える火のような妖魔の瞳。

「さあいいぞ、撃ちたければいつでも撃つがいい……撃ってみるかい？」

……ようやく全員に手錠がかけられると、三日月警部は離れた場所から黒衣の少年に向けて軽く手を振ってみせた。感謝のつもりである。

暗がりで、アルディーンはにっこりと笑ったように見えた。

そしてすぐ、軽やかに上へ身を躍らせ、ビルとビルのあいだを伝って消えてしまった。

……呆然と見送った新米刑事は、数秒後、ようやく我に返って三日月警部に追いすがった。むちゃくちゃな話の多いこの街の体験のなかでも、これは、けたはずれだ！

「誰ですか、あれは！　いったい何者ですかッ？」

三日月警部は軽く肩をすくめ、

「知らないよ。あいつは言ったことがないし、おれも聞かない」

――だがアルディーンには何度も助けられたんだ。

〝ネオ・ナリタで勤務していくつもりなら、あいつにも慣れることだな〟

彼は息をのんでうなずいてから、

「でもあれは……彼、昼間はどこにいるんでしょう」

三日月警部がふと上を向くと、ニヤリと笑い、

「さあな……昼はきっと棺桶の中ででも寝ているんじゃないか？」

その同じ事件を、さっきから一部始終見ていた冷たい目があった。

現場のごくそばのビルの上階。〝こちらからは見える〟タイプの窓ガラスを通して、最初からずっと見ていたのだ。

……最後の一人に手錠がかけられたところで、男が振りかえった。

「あれがこれから、あなたさまの敵になります」
化け物め……という声が返事をした。男は特に反対もせずにうなずき、
「たった今、ごらんになったように銃弾はききません。また、運よく傷を負わせることができても〝アルディーン〟の回復力はすさまじいので、通常の弾丸では、どうやらほとんど効果がないようです……」
――ふつうのスナイパーでは、しとめられない。
「バズーカか……それとも罠にでもおびきよせて焼き殺すか……」
「それも、よほどうまい罠でないといけません。頭もよいのです」
忠実な部下の言葉に、やっかいなという表情をした。
男はまたもうなずき、
「やっかいな相手です。しかしネオ・ナリタで非合法な仕事をするなら、遅かれ早かれ倒さねばならない相手なのです」
ふたたび彼らが窓の外に目をやったそのとき、百万に一つの偶然が起こった。
身軽に建物の外壁を飛んでビルの屋上をめざしていた闇の皇子が、ちょうどその窓の外まで来ていた。真下の階からは旗竿が出ている……その紐が突風で吹きあげられた一瞬、アルディーンのゴーグルに触れてはねとばしたのだ。
部屋のこちら側にも同時に緊張が走った。

彼らの目の前で、少年はアッというような表情をして、あわててゴーグルをつかんだ。
——これがアルディーンの素顔！
低い声で部下に写真を撮るように命令してから、ジッと焼けつくような視線をあてる。
驚いたのは、まるで少女のように優しい顔だちだったのだ。
瞳にまぎれもない知性の光をたたえている……妖しさと清純さの不思議にとけあった顔。
見られているとは知らない彼は、しばしのあいだその場所で呼吸を整えているようすだったが、やがて窓のふちを蹴って上に消えてしまった。
長いあいだたってから、ようやく窓から目を離すと、
「写真は？」
撮れました、という返事にホッと吐息をついた。あの漆黒の髪、ガラス細工のような姿。
——そう、あれがネオ・ナリタの闇の皇子……。
もう一度、タメ息をついてから、こころなしか夢みるような声でつぶやいた。
「……美しい子ね」
部下の男は冷静に問いかけた。
「計画を変更なさいますか、奥様？」
……窓辺の影はゆっくりとうなずいた。

第一章　霧の夜——香港からの魔手

ネオ・ナリタの夜の妖魔・闇の皇子が、昼はどこにいるのか……これについて三日月警部の考えは、徹底的に的をはずしている。

昼のアルディーンが見たければ、旧市街の一角にある食堂をたずねるべきなのだ。

悪名高いネオ・ナリタ旧市街は、市のほぼ中心に広がっている。

迷路のようなスラムが数地区にわたって続き、殺人・強盗などの重罪犯でも逃げこめば簡単にはつかまらない。

そして、もとからこの街で生まれた人々は、みな豊かではないのだ……。

さて、「赤鍋亭」というカンバンがかかっているその店は、スラムの店らしく小さくてボロいけれども、〝安くてうまい〟ことにはちょっと自信がある。……とはマスターの談。

店のドアを開けて、元気よく走りでてきた男の子の姿がある。

小柄な子で、びっくりするほどかわいい顔をしている。年齢は16歳だが、おとなしいのでスラム街ではやや甘く見られてしまうようだ。名前は涼と呼ばれている……〝赤鍋亭の涼

ちゃん〟と聞けば、たぶんすぐわかるはずだ。
よく笑い、（はずかしながら）よく泣く。素直な瞳はよく見ると、とても賢そうだ。
自分から誰かと争いを始めることは、まずない……本当は誰とでも友達になりたいのだから。
おつかいのカゴを抱えて走っていく。ちゃんと日当たりのいい道を選んでダッシュ！　もうすぐ12時で、お昼の客がたてこんでくるから急がないといけない。
なかばは人間の少年であり、なかばは妖魔のアルディーン。
――彼こそが、闇の皇子の昼の姿である。

さて、赤鍋亭では今、ちょっとした問題をかかえていた。
じつは涼にまつわる悩みである。
店の中にはいって、マスターと一人の少女が話しているのを聞いてみるといい……。
「……とにかく困っちゃったよ、真夜ちゃん」
タメ息をつくマスターは、力なく布巾でカウンターをこすった。
〝なにがどうしたってのよ!?〟赤いジャンパーを着た少女がせっかちに先をうながす。
この子は真夜子。涼とは旧市街のはずれ、おなじ廃品置き場の倉庫に住みついている。

親はない、赤ん坊のときに旧市街の一角に捨てられていたのだ。16になるまで、スラムで生きてきた……乱暴者で気は強いが、優しいところもないわけではない。

よそ者の涼を拾って、自分のすみかに住まわせてやり、食堂の仕事まで世話してくれたのは彼女だった。

——だって弱っちい、たよりないチビでさ！　ほうっておいたら絶対、ノタレ死ぬと思ったんだもの！

拾われた涼のほうは、今では心からこの少女を慕っていた。しかし今回の彼の悩みは、もとはといえば、彼女が原因を運んできたものだった。

つい先日、真夜子は長年の夢だった新聞記者になった。そして、はじめての給料日。初任給の記念に居候にも何か買ってやりたいと思った彼女は、一枚のエプロンに決めたのだ。白いエプロンで、胸にフリルとスミレの刺繍がついている……はじめて見たとき、涼はすこし首をかしげた。

〝これ、女ものだと思うけど……？〟

〝いいのよ、あたしが選んだんだからッ。ほら似合うじゃない！　あんたってこんな感じよ!!　ね、これなら店でも使えるし、絶対いいわよねッ〟

せっかく真夜子がくれたものだし、使わないとなぐると言われたので、次の日から涼は新しいエプロンで店に立つことにした。

フリルとスミレさえ気にしなければ、真っ白だし新品だし……後ろまで生地がたっぷりあって、紐を前で結ぶようになっているところなどは、なかなかプロっぽい感じがしていい、などと涼も考えていたのだが、

「ところが、今思えばそれで目をつけられちゃったんだなあ……」

「赤鍋亭」の客は旧市街の住人ばかりである。そして最近、昼は圧倒的に工場で働く人間がふえていた。

「ナサニエル・ゴードンさんの工場でしょう?」

マスターはうなずいた。

邪教の七賢人教団が解体したあと、まっさきに再開したその工場は、旧市街をまともにしたいと願う人々にとっては大きな希望だった。

残念ながら現在のところ、工場はほとんど利益を生んでいないようすである……工場のあるあたりは治安も悪く、しばしば事故も起きていた。

ふつうの事業主だったらとっくに嫌気がさして引きあげてしまうところだが、ここの持ち主である香港の富豪、ナサニエル・ゴードン氏はなぜか違っていて、非常に辛抱強く経営を続けていているのがありがたい。

「……どうしてかしらね? あの人も噂ほど悪い人じゃないのかもしれないわ」

香港に居をかまえる大富豪ゴードン氏は、とかく噂のある謎めいた人物だ。

車椅子で、めったに人前に姿を見せない。若くしてなぜあれほどの財力を得ているのかはっきりしていなかったので、香港暗黒街の黒幕ではないかとも言われていた……。

「でもネオ・ナリタに関するかぎり、あの人は恩人だわ……まあ、今のところね」

油断なく真夜子はつけくわえる。〝いまに牙を出すかもしれないけどさ?〟

ともあれ、今、旧市街の多くの男がそこで職につけていた。

給料もまあ悪くない。

「毎日大勢さまで来てくれるし、支払いもちゃんとしているし……」

給料日にはおごってステーキの注文（赤鍋亭ではいちばん高いメニュー）などもしてくれる大事なお客たちなのだが、マスターの顔は明るくない。

新しいエプロンをきっかけに、ある若い工員のグループが涼に目をつけてしまったのだ。

「特にでっかい若い男でさァ、仲間のボスみたいなんだが、そいつが涼ちゃんをいろいろからかうんだよ」

その日、定食の皿を六つも両腕にのせて、いつもどおりに涼が彼らのテーブルにいった。

〝はい、おまたせしました！〟

そしてカウンターに戻ろうと背を向けた瞬間、その工員は何を思いついたのかニヤリと笑うと、手をのばして涼のエプロンのすそを、スカートめくりの要領でパアッとめくったのである。

エッと思わず叫んだ涼が、びっくりした表情でクルリとまわるのを見て、テーブルをバンバンたたき笑いころげている。

〝なにするんですか!?〟さすがに涼がきっとなって振りむくと、若い工員はニヤニヤ笑いながら、

〝あらら、お姫さまが怒っちゃったよ!!〟すると今度はテーブルにいた全員が声をあわせて笑いだしたものだ。〝かわいいよなァ!〟

からかわれていることがわかった涼は、真っ赤になって怒りで口もきけない……。

「それからは毎日そうなんだよ」

この店はマスターと涼の二人きりだから、昼は目のまわるような忙しさである。涼は注文取り兼皿洗い兼ウェイターとして奮闘し、呼ばれればいくしかない……で、いけばかならず被害にあう。

「涼ちゃんなら料理の腕もうまいから、カウンターのほうをまかせて、僕がいこうとも思うんだけど、この腰がねェ……」

どんなに用心していても、一人が注文で涼の気をそらして、そのすきに一人が手をのばすのだ。〝やめてください!〟と涼がまじめに怒れば怒るほど、うれしくてたまらないらしい。声をあわせて笑う。

「まったくもう……ほかに娯楽はないのかね!?」

いまや涼は、そのテーブルの気に入りのおもちゃである。
「我慢する子だから、ずっとこらえていたけどねェ……」
嫌がっているのは、見ればわかるのだ。
べつになぐられたりするわけではない。本当はスカートでもないのだから、めくられてもなんでもない……はずなのだが、ただやたらに腹が立つのだ!!
暴力の嫌いな涼は、頭を使った。
——ようするに、だよ……これがあるからいけないんだね!
〝スカート〟がなければ、めくることもできない。よしッ、と手を打った涼は、次の日にはエプロンをつけずにそのテーブルにいった。
ところが、この日彼らもまた用意をしてきていたのだ。
〝おい、来たぞ押さえろ!〟
〝ワア、何するんですか! やめてください!!〟
いきなり捕まったと思ったら、取りかこまれて押さえられた。頭の上でなにやら大勢の手が、やけに手際よく動いている。そして自由になったときには……マスターが思いだしてプッと吹きだした。
「……髪をカールにされて、リボンまでつけているんだよ!」
リボンと花……髪はきれいにカールしている。

〝それがまたよく似合っちゃったんだ……〟沈痛な表情に戻ってマスターが嘆く。
なにしろ自分も一緒になって笑ってしまったのだ。このときはまさに店じゅうが涼を指さして笑いつづけた。あまりにもかわいかった。
このとき、涼の心の内側が、誰にも見えなかったのはさいわいである。
もし見えたら、それこそ恐怖で心臓があぶない。
闇の皇子の全身の血が、怒りで煮えたぎっていたのだ。
――よくも、よくも……この僕にリボンを!!
くやしい、こんな侮辱は許せない!!　ハッと気づくと真昼なのにアルディーンが表に現れかけている。
――いけない、瞳が変わる!
赤く変わりはじめた目を隠すために顔をおおい、一目散で店の裏口から飛びだしていった涼……。
「きっと泣いていたんだと思うよ」
実際には涼が飛びだした瞬間、裏口の空きびんの山がビシビシ音をたててくだけちった。
――落ちつかなくっちゃ、鎮まらなくっちゃ……。
もう大丈夫だ、と思えるまで涼は店内に戻れなかった。あの男を見てもひき肉にしないという自信ができるまでは、そこに隠れていた。

……マスターは深刻なタメ息をつく。

「とにかくまいっているんだよ、真夜ちゃん。ほかはいい客だけど……あれじゃ涼ちゃんがかわいそうだ。だがもう来ないでくれって言うのも、あの男が相手となるとねェ……」

工場でも一、二を争う強そうな若者だから、マスターはかなり気弱である。

ガラがいいとはおせじにも言えない連中だから、お礼まいりをされるのも怖かった。

タメ息ばかりのマスターの横で、真夜子が赤毛のポニーテールをはなはだ挑戦的に強く振った。大きい目がピカピカ光っている。

「いいわよ、マスター！　マスターは何もすることないわ……見てなさいよ、あたしが決着つけてやるから!!」

「ちょっと……真夜ちゃん？」

これから出社しなくちゃならないけど、お昼にはかならず戻ってくるわ！　と言いすて、青い顔のマスターを残して真夜子は出ていってしまった。

やがて12時になった。

赤鍋亭にはいつものようにいっぱい客がいる……例の工員たちもテーブルについていた。

〝今日こそ言うぞ〟マスターがやや緊張した顔になって、そちらへ向かおうとしたとき。

表のドアを足で蹴って入ってきた少女――どこからか急に西部劇の雰囲気がただよってきたのはなぜだろう？――ツカツカと店内をかきわけてきた彼女は、めざすテーブルの前まで来ると、いちばん大きい男と恐れげもなく向かいあった。

「なんだよ」

「あんたね？　うちの涼をいじめたのはッ……」

言うなりミニスカートをはいた足で、まだ皿がのっていたテーブルを蹴りあげた。

彼らの皿が宙を舞う。男たちは顔を赤くしていっせいに立ちあがった。

「……こいつッ、やったな！」

「やったがどうしたのよ!?　かかってきやがれ!!」

そのあとはもう……たいへんな騒ぎである。真夜子が男の顔に先制攻撃でパンチをくりだす。相手ははじめこそ手かげんするつもりでいたのだが、

「ちくしょう、こいつ強えッ！」

なぐる、蹴る、ひっかく、噛みつく……ありとあらゆる手をつかって山猫のように闘う。

椅子があれば椅子でどつく。皿は投げる。

あなどれない敵だとすぐに悟って、それからは男たちも、つい本気になってしまった。

「おもしれェ、やれやれ！」

「真夜ちゃん……頼むよ、店をこわさないでくれってば！　拝むからッ！」

マスターが声をからして叫んでも、誰もきかない……いつのまにか店じゅうがまきこまれている。〝真夜子……ねえ真夜子ッ、やめてよ！〟

涼は目を丸くしてとめに入るのだが、そばによることすらできない。

「エイッ……涼にチョッカイ出すとこうよッ！　わかったか!?」

真夜子が思いきり男のむこうずねを蹴りあげる。カッとなった男のパンチが真夜子の顔面に入る。〝ウッ〟一瞬のち、折れた歯を吐きだして、真夜子が叫んだ。

「まだまだッ!!」

そのとき、カウンターの上からひときわ大声で怒鳴る声がした。

「……もうやめろって言っているのがわからないのかッ!?」

おとなしい涼にそんな声が出せるとは誰も思わなかった……次に、とっくみあっている全員の頭からホースで水がかかった。

いっきに火が消えたようになった店内。カウンターから飛びおりてきた涼は、目をつりあげて工場の男に叫んだ。

「男のくせに女をなぐる奴……最低だ！」

さらに今度は目に涙さえためて、真夜子に向きなおった。声も興奮でふるえている。

「真夜子も真夜子だよ！　お……女の子なのに、ケンカをして！　顔に傷なんかできてもいいっていうのかいッ？　やめてって言ったのに、どうして聞いてもくれないの!?」



シーンとした店内は、涼以外みんな恥じ入ったような顔をしている。
「嫌いだよ！　みんな最低だ!!」
涼は、今度こそ本当に泣きながら表に飛びだしていってしまった。

……走るだけ走ると、ようやく涼は立ちどまった。
気がつくと橋のそばまできていた……旧市街をぬけて湾にそそぐ、ちいさな、あまりきれいでない川である。
橋によりかかって、タメ息をついた。
――アア、なんてみっともないところを見せてしまったんだろう……。
なにげなく小石を拾い、水に投げる。水面にうつる自分の顔は、
――もう嫌だ！　どうしてこう女の子みたいなんだ？
近ごろ、自分の姿がやけに気になりはじめていた。もっと背が高くてもいいと、そのたびに思う。
もっと背が高くて、男っぽいごつい見かけになりたい。たとえば、ナリタ署の三日月警部のように……あの工員のようでもいい。からかわれたり、リボンをつけられたりするようなこんな顔は自分で見ても頼りなげだ。

――だから真夜子が僕のためにケンカなんかすることになるんだよ！
僕のために……涼はまたタメ息をついた。
――もし、自分がアルディーンだとわかれば、どうだろうか？
この僕こそネオ・ナリタの闇の皇子だと知れれば、あの工員なんかもう自分に指一本ふれられなくなるに決まっている。
昼のあいだは、ひたかくしにするアルディーンの力である。でも本当ならあんな男など、「そうさ、あんな奴、いつでものしてやれるのに！」
〝闇の皇子〟であることは、まだ真夜子にも打ちあけていなかった。
そのほうがいいのだと思っていた。だが、こんなときはどうしてもその可能性を考えずにはいられない。
――アルディーンだとわかれば、真夜子は変わるだろうか？
イエス、そしてノーだと思っていた。
妖魔とはいえ、アルディーンは真夜子のヒーローである。〝力こそすべて〟いかにもネオ・ナリタらしい真夜子の考えでは、男はやはり強くなければいけないらしい。
〝アルディーンは最高よ！　ほんと、かっこいいわ!!〟
闇の皇子だと知れても真夜子には嫌われないだろう、きっと……それどころか、あの憧れの目でいつも見てもらえるとしたら？

――ウーン、それは最高に誘惑的だけど……。

……だが、涼にはもっと強いためらいが残っていた。

この少年は本名を涼・雨宮といって、ほんのわずか前までは、この時代の最高学府であるアカデミアの生徒だった。世界に五つしかないアカデミアのうちの、アカデミア・ネオ・ナリタ。涼はそこで16歳の首席生徒だった。

わずか16歳の天才少年。誰もが目をみはり、賛辞を贈ってくれた。

〝見事なうえにも見事だ、涼・雨宮！〟多くのシミュレーションで涼が達成した成績は、アカデミアはじまって以来の記録と言われた。

両親がなく、9歳から学院で育ってきた涼は、言われるがまま自分の能力を高めることに専念してきたが、すこしだけいつも何かがつらかった。

アカデミアの教官たちは、いつも涼の能力だけを見ていたのだ。

最高学府で受けた知識と、天性の頭脳・情報処理能力。

それ以外のものは、なくていいものだったのだ。

……涼にとっても、知識や能力は重要と思われた。他人が見せる該博な知識やはなばなしい能力は、いつでも素直な賛嘆の的になったが、それと同じように思いやりや、優しくしてくれる人を、涼は愛した。

自分にはひどく大切に思われる、愛情や優しさを表現すると、アカデミアではいつも苦笑

かおだやかな忠告が返ってきた。

〝涼、君はそんなことに関わらなくてもいい。君にはもっと大事なことがあるだろう？〟

誰も口に出して言うはずはなかったが、泣くことも笑うこともできる生きた涼など、必要ではないのだ。敏感な少年は、たえず心のどこかでそれを感じとっていた。

何がつらいのかもよくわからぬままに、彼はいつも悲しそうな目をしていた……。

――どうしてあんなに寂しかったのか、僕にはわからなかった。だんだん、口もきけない機械になりそうだったのはなぜか、僕にはわからなかったんだ……。

この街に来て、はじめてわかった。

旧市街で真夜子に会って、はじめて自分がどんなに一人だったか、はっきりと知ったのだ。

アカデミアの特別機がとある事故で旧市街に墜落したことで、涼の運命は大きく変わった。九死に一生を得て、倒れていた彼を最初に見つけたのが真夜子だった。

――真夜子は僕をいくところのないただの孤児だと思って、面倒を見てくれたんだ！

そのときのことは忘れられない。優しくしてくれた、愛してくれた。ただの役立たずの涼を……。

――だから僕は、とうとうアカデミアへは帰らなかった。

白亜の恵まれた世界を捨てても、このスラムで真夜子と暮らすほうがよかった。

アルディーンの力を得たのは、この街と運命をともにする涼のさだめと思っていた。だけど……ふと、その横顔がくもるのだ。

〝闇の皇子の正体を知れば、真夜子は変わるのだろうか？〟

かつてアカデミアで人々がしたように、今度は真夜子もアルディーンの妖力の輝きだけを見るようになるのだろうか？

涼にはまだ自信がもてなかった。

――まだダメだ、言っちゃいけない……。

闇の皇子だと打ちあければ、真夜子はもう僕なんか見なくなるだろう。無敵を秘めた妖魔の力……ネオ・ナリタでそれがどんな誘惑か、涼にさえわかっていた。誰の目もきっと眩んでしまう。

――ダメだ。まだ言えないんだ！

タメ息をついて、もうひとつ小石を川に投げこんだ涼を、追ってきた真夜子が見つけた。

「涼ッ……やっと見つけた！」

「真夜子！」

あわてて振りかえると、真夜子はどこかムッとした表情で、めずらしくモジモジしている。右左と場所を替えては、涼の顔を盗み見て、

――なによこいつ、やっぱりしょんぼりしているわ……泣いてたのかしら？

〝男だったら強くなきゃクズよねッ〟いつだってそう断言する真夜子だから、気弱な泣き虫など見るのも嫌なはずなのだが、なぜか、この涼だけは別になっていた。

こいつがアカデミアの生徒だと知ったときには驚いたが、泣いて旧市街にいたがるのにはもっとびっくりさせられた。

〝あんた正気!?　ここは旧市街なのよ!〟

貧乏人ばかりで、いいものは一つもないこの街だ。まだましな暮らしの人々はみんな離れた郊外に逃げて、スラムの住人をばい菌のように思っている。

アカデミアに戻るだけで最高の未来が待っていたのに、こいつどういうわけ!?

――やっぱ頭が弱いわよね？　まあ、本人がいいと言うのだからいいけどさ……。

女の子みたいなかわいい顔で、やたらに気が優しくて、泣かされてもすぐお天気が変わる。

ひどい目にあっても3日とおぼえていられないのだから、やはりどこかおつむが悪いとしか思えないのだ。

〝ニコニコの涼！　あんた、くやしいってことがないの!?〟

そうは言っても真夜子には、もうこの居候なしの毎日は想像できなかった。

弱虫でも嫌いになれない。それどころか、ときどきは彼の前に出るのが恥ずかしいような気持ちにさせられた……たとえば、今みたいに。

「あのね、涼……あたしが悪かったわよ」
やっとの思いで、口のなかでだけモゴモゴと言う。すると相手は、心配そうな目をして、
「真夜子、歯はどうなっているの？　痛くない？」
ああ、これ……と、真夜子は欠けた前歯でニヤッとした。
「これは平気！　だってあたし、ここの3本の歯はみんなさし歯なのよ、知らなかった？」
「ど……どうして？」
涼の問いに、真夜子は自慢そうに〝だってあたし、前にみんなケンカで折っちゃったんだもの！〟と言ってのけた。
10歳まで、このあたり一帯のストリートファイトのチャンピオンだったそうだ。
ウッ、と言った涼は、なぜかひたいを押さえている。
「……こんどのお給料が入ったら入れ直すわよ」
平気な顔でそんなことを言う……涼はとうとう笑いだしたようだ。
「ああ真夜子……真夜子ったら、すごく強かったんだねッ！」
当然、という顔でえばっている少女は、
「フフン、やっと泣くのをやめたようね。ごほうびに、ホラ……キスしてあげる」
ドキッとした涼の期待とはうらはらに、真夜子は軽くひたいにキスをして手を離した。
〝真夜子、いったい僕のことをどう思っているのかなあ？〟

ただのキスか恋人のキスか？　涼にとってそれは大問題である。いつか……と、彼は思うのだ。

――いつか僕が背も高くなって、誰にも負けない男らしくなれたら……そうしたら真夜子に打ちあけよう。アルディーンの力を。

ほかの誰でもないただの涼として、真夜子には見つめてほしかった。

恐れられることも、あがめられることも望みではないのだ。望むことはただ一つ。

――大好きな真夜子。僕を見て……そして好きになって！

声には出さず、涼が心でささやいていた。アカデミアの天才児でなく、闇の皇子としてでもなく、こんなにも君を愛することのできる僕として、僕を愛してほしい。

そのときは、きっと。

「とにかく、今度からお店でケンカはしないわ！」

「できれば外でもやめてほしいんだけど……」

そう言う涼を、生意気とこづいてから、真夜子はふと自分でも不思議に思った。

――それにしても、こいつってあたしの弟分かしら？　それとも恋人かしら？

時には情けない奴、弟としか思えないけれど、時には……。

どっちかしら……例によって長くは悩まなかった。

「お店まで競争しようよ！」

日あたりのよい、いい天気なのだ。ポニーテールを一振りすると、真夜子は走りだした。
「ホラッ……負けたほうがソーダ一杯おごるのよ！」

……ところで、この事件にはちょっとした続きがある。
数日後、赤鍋亭の近くの街角で、涼と待ちあわせをしていた真夜子が、先日の工員たちに出くわしてしまった。あの日以来、彼らは食堂には来なくなっていたが、
「あッ……このあいだの山猫!!」
その日は、グループの中に、たちのよくないチンピラが一人、まざっていた。
「なあ、みんな、この前こいつのせいでひどい目にあったんだろう？　おわびもないそれっきりなんて、そりゃあウソだよなァ？」
「やめろよ、女の子だぜ」
「なんだ、このまま泣き寝いりか!?　情けないぞ、お前ら！　まさか女が怖いなんて言わないでくれよなァ？」
金になるとでも見たのだろうか……しきりに仲間をけしかけるのだ。
「……なによ、またやるっていうの？」
真夜子がグッとこぶしをにぎって、相手をにらみ返したとき、遠くから駆けてきた涼がそ

の光景に気づいた。

――アッ、真夜子に手を出すなッ！

顔色を変えて飛びこもうとした涼はしかし、先を越されてしまった。

「おい、女の子に何しているんだ！」

通りすがりの若い男が、チンピラの肩をつかんで強く引きもどしたのだ。

〝なんだと⁉〟黙らせようとしてなぐりかかった彼は、あっさりと投げ飛ばされ、見ていた一人がハッと叫んだ。

「おい、よせ！　そいつはゴードンズ・ガードのネフじゃないか⁉」

「ゴードンズ・ガードのネフ？」

一瞬、目に見えて動揺が走った。

〝ゴードンズ・ガード〟――それは旧市街でも、ごく最近になって知られだしたグループ名である。ナサニエル・ゴードンの工場で働く若者の中から、自発的につくられた自警団といったらいいか……。

ネオ・ナリタの街はもともと荒っぽく、工場にやとわれた男らの中には、性悪な連中もやはり混ざっていた。

彼らは治安が悪いのをよいことに、店や街角でしばしば面倒を起こしている。

困ったことだ……旧市街の人々が思いはじめたころ、ネフ・ブラウンという一人の工員

が、自分の仲間を集めてグループを作ったのだ。
彼らは規則を作ってグループで動き、街で悪さをする工員を見つけたらその店からつまみだし、ケンカを続ける輩は引きはがした。人数はまだ多くないが、リーダーのネフを中心に団結し、たいがいそろいのシャツかバッジをつけていた……。
「……こいつがネフだって？」
「ああ、そのとおり。さっきからずっと見ていたぞ、女の子一人に何をしているんだ？」
用があればかわりに聞くぞ……彼はたった一人で前に進みでた。たった一人だが、後ろにはゴードンズ・ガードがついている。
「ちくしょう、相手が悪いやッ」
……チンピラもふくめて、全員逃げるように去っていった。
明るい目をした若者は、真夜子を振りかえった。年齢は二十二、三……背丈はふつうだが、どこか生き生きした力強い感じが内側から光っている。
「どこもケガはないね？」
「あ……はい、ありがとうございました！」
「……真夜子ッ、大丈夫!?」
「あら涼、あんた来たの」
ようやく駆けつけた涼に真夜子はそんなことを言って、しかも、

「やあ、彼氏が来たら安心だな」
というネフ・ブラウンにはキッパリと、
「こーんなの、ただの居候です！　ええ、弱いったらない奴なんです！」
と、答えてくれた。
――すってき、あれがネフ・ブラウンなのね！
大人の貫禄に、真夜子はすっかり感動したらしい。
真夜子、もういこうよ……ネフのいたあたりをいつまでもウロウロしている真夜子の手を、涼がやや強引に引っぱっている。
「そうだ、あたしったら！　写真を撮って、インタビューもしておくんだったわ!!」
自分は今、真夜子のなかで弟以下だ……涼はくやし涙をのんだものだ。

さて、満月の夜が来た。
ネオ・ナリタの雪村市長は、闇の皇子の助けを求めていた。
とある事故現場で、ぼんやりと血だまりなど見ていたアルディーンを、三日月警部が見つけて〝すぐ市長のオフィスに来てくれ！〟と言った。
めずらしく緊張した顔だ……ただならぬ事態にちがいない。いってみると市庁のオフィス

には、雪村市長のほかにナリタ署の署長がいて、張りつめた空気でアルディーンを待っていた。

「ありがとう、よく来てくれた」

まず立って礼を言った雪村市長は、まだ40代だが髪はすでに銀に近い見事な白髪に変わっている。ネオ・ナリタを愛し、街の再生にかけるその努力をアルディーンは信頼していた。

なにごとが起きたのですか？　アルディーンの問いに市長はややためらいを見せ、遠慮のない真吾警部のほうが、わきから答えていた。

「やばいことになっちまったんだ、アルディーン……人さらいだ。それも市の有力者の子弟が6人、ごっそりやられちまったんだよ」

誘拐事件!?　闇の皇子が顔を向けると、市長たちもうなずいた。

「それで……犯人からの要求は？」

「要求はすでにあった。犯人についてもわかっている……」

署長がくやしげに説明するところによれば、

「……香港からきたプロの誘拐集団の仕業なのだ。首領はスコルピオン（さそり）と呼ばれる奴で、あちらではずっと荒かせぎしていたのだが、最近になってネオ・ナリタにうつって来たらしい……香港警察から注意も来ていたのに。この事件は私の手落ちだ」

「署長、すぎたことはもうしかたがない。それより重要なのは、さらわれた子弟たちを無事

に取り戻すことだ」

市長がきっぱりと言う。そしてアルディーンに向かって、

「要求はまず、一人につき5万G。つまり人質6名で30万Gを支払えと連絡があった」

30万G！　涼にはややめまいがする大金だが、

「一人をのぞいて、どの家族も支払うといってきている」

「その一人が問題なんだ、あのクソじじい！」

〝こら、三日月〟署長がいちおうたしなめたが、内心は同意見でいるらしい。

市の有力な議員で、どはずれて頭の堅いその父親は、

〝犯罪者の言いなりになってどうする⁉　力で解決できるじゃないか‼　奴らにネオ・ナリタは違うと教えてやるのだ！〟

取引の場所は指定されてわかっているのだから、武装した警察隊に突入させようというのだ。

「そんなことをすれば人質は絶対に死ぬんだって！　自分の子供が入っているというのに、あのじじいめ……」

どう説得しても、彼は武力行使を主張し、しまいにはナリタ署はスコルピオンの一味だとまで言いだす始末だった。

「ぶっとぶぜ、まったく……百歩ゆずって、あのじじいの息子の生命はお空にやっていいに

しても、あとの5人までまきぞえにはできない」

闇の皇子が苦笑した。

電灯をつけていない薄暗い部屋である……光を嫌うのかもしれないアルディーンのために、わざと消させてあったのだ。

市長がデスクの上にアタッシュケースを取りだして言った。

「ここにその30万Gがある」

取引の期限は本来なら明日……だが、ナリタ署は裏取引を決断した。

どうにかスコルピオンに連絡をとり、今夜じゅうに身代金の受け渡しを早めてもらうことにしたのだ。5人の人質の家族から、それぞれ5万G。残りの金額は、市の特別費から緊急に出してきた。

「君も知っていようが〝力は正義なり〟という言葉は、ネオ・ナリタでは、ひどく魅力のある危険な言葉なんだ。あの議員は、運動して短いあいだにかなりの賛同者を作ってしまった……彼らは人を集め、明日になれば、指定の屋敷を包囲して、攻撃を開始する計画らしい」

そうすれば、人質の生命は万に一つの望みもなくなる。

「香港から来た記録によればスコルピオンはしたたかな悪党だが、手口はプロだそうだ。要求がちゃんとかなえられるかぎり、人質は無傷で返しているようだ」

〝だから、いっさいの責任は私と署長が取る！〟
「人質はみな若いのだ……我々だって、できれば犯罪者と取引などしたくはない！　しかし、人命は何にもまして優先されるべきことだ」
「僕もそう思います」
暗闇でアルディーンがうなずくのを見て、市長がふと思った。
――このような者が闇の皇子の宿主となったのは、なんという運命の不思議さだろう！
「……それで僕はどうすればいいのですか？」
雪村市長は、一度吐息をついた。
「まだ伝えていないことがあるのだ、アルディーン……スコルピオンは身代金の運び手として、〝闇の皇子〟を指定してきたのだよ。この条件は金額の30万Gとともに絶対で、別の者とはけっして取引しないという」
「それはいったい……？」
「わからない、それが条件なのだ」
ふつうの犯罪者なら、闇の皇子の登場は向こうから避けるのが本当だ。だが、ネオ・ナリタで悪事をおこなうなら、いずれ避けられなく邪魔になる相手である……。
――悪賢いスコルピオンは、早くもそれに気づいたのだ。
市長はかすかに首を振った。こんな少年を危険におもむかせるのは、何より嫌だった。だ

が、彼にはほかにどうしようもないのだ。

「アルディーン……君が今までにしてくれた、さまざまな手助けを本当に感謝しているんだ。その君に、私はどう言って頼めばいいのかわからない。スコルピオンはきっと罠を張って君を待っているはずだ」

——おそらくは死の罠を。

人質をどう盾にとるかもわからない。そのとき、この少年は……。

「そうだ、君には断る十分な権利がある……」

雪村市長の苦しい表情を、長く見ているつもりは涼にはなかった。

暗がりのなかで少年のシルエットが動いた。そのしなやかさは人間というより蛇のものだ。

市長の手の中でアタッシュケースが、はねあがるように動いたと思うと、その手の中へ飛びこんでいった。

人か魔か……赤い瞳が光っている。静かに後ろへしりぞくと、その姿はまるで暗闇にとけるようだ。

「……僕のことなら心配は入りません。大丈夫、人質はきっと取り戻してきますよ」

「頼んだぞ、アルディーン……気をつけてくれ」

闇の皇子は、わざとまがまがしい笑い声をあげると消えてしまった。

……指定の場所というのは、旧市街のはずれ。まだ約束の時刻より早かった。
東のはずれあたりにある一軒の屋敷だ。あたりには霧が出はじめている……近ごろネオ・ナリタでは多いことだった。
古びた邸宅で……持ち主はとっくの昔にネオ・ナリタを捨て、出ていってしまったはずである。美しかったイタリア式庭園も、今は荒れ果てているのだ。
霧と暗闇にとけるように身を隠しながら、アルディーンは庭の中に入っていった。樹のこずえから、しばらくあたりのようすをうかがう……。
——たしかに大勢の人間がいる気配がする。
1階の窓からは、カーテンを通してあかりまで見えている。
——なかなか大胆だね、スコルピオン。
アタッシュケースの重みを右手に感じながら、涼がひそかな微笑を浮かべる。
人質の安全がまず第一、でもできるなら……手柄をたてたい気持ちだけは、彼にも完全には抑えきれない。
もしできるなら、人質だけではなく身代金も無傷で市長の手に返したいのだ。
暗闇で涼が笑う。

——スコルピオン、どんな手で闇の皇子を狙うかい？　はたして君の思うとおりにいくかな……この事件も、僕の生命も。

自分の妖力を確かめるように、涼はそこに風を呼んだ。

……アルディーンと一体化している涼だけが、はっきりと知るいくつかの事柄がある。

たとえば、闇の皇子の本性はネオ・ナリタの風とみていた。

涼に使えるアルディーンの妖力の一つ、念動力でさえ、じつは大気に対してもっとも強くはたらいた。時にカミソリのように鋭く、時にたたきつけるように激しく。風は涼の命令を自在にきく。力のみなぎるその感覚は、時には妖しい愉びですらある……。

夜風が一瞬、霧をなぎはらったそのときである。

まるで白いヴェールの中から現れたように、ひとりの女性が庭園に現れたのだ。

水仙の刺繍がされた水色の袍（チャイナドレス）を着て、黒鳥の羽のような髪を見なれぬ美しいかたちに結いあげていた。白い手に銀の香炉をさげていて、香の甘いかおりがここまでただよってくる……。

——よくない気配の男が数人、後ろからずっとついてきていた。

アルディーンが息をひそめて見守るなか、彼女は涸れた噴水のそばに用意された香卓の前でひざまずくと、あらたに香をたき、夜空をあおいで静かに祈りはじめた。

男たちは無言のまま、それを見ている。

いくどか彼女は頭をたれ、香卓の鈴を鳴らした。たおやかな美しい姿は旧市街ではとうてい見られないだろう……清らかな女らしさに、涼は思わず見とれた。

やがて星がうつり、一心に祈っていた女性は立ちあがって、もときた小路を屋敷のほうへ去っていった。男たちの一人が香卓を持ち、一人が彼女の腕をとっていく……。

〝今のはいったい誰だろう？〟

かなり時間がたってからようやく、大きく息をついて樹上の影が身体を動かした。

――きれいな人……誰だろうか？

白鷺の精のような美女。くちびるだけが紅かった。

オフィスで聞かされた人質の中に、あんな女性は入っていなかった。

スコルピオンの部下であろう男たちが、連れてきて連れさったように見えたのだ。

何者だろう⁉　スコルピオンとどういう関係にあるのか……男たちの扱いからみて、たんなる人質とは思えなかった。あるいは姉妹か、それとも恋人か……涼の胸がかすかに痛んだ。

――あんなに美しい人が……。

〝もしかすると、どこからかさらわれてきて、あまりの美しさに帰してもらえなくなったのかもしれない〟ふと、そんなことも考えた。

そして、ふたたび、霧がたちこめてきたなかを、少年は敵の待つ屋敷へと向かう。

……正面の扉を開けると、もうそこに男が1人待っていた。

「こちらへ」

それ以外は無言で進むのについていくと、いくつもいくつものドアを抜ける。

気味が悪い……やがて、最後の一枚のドアを開けると、うってかわったようなきらびやかな室内だった。

明るく、見あげるとシャンデリアがチロチロと澄んだ音をたてて揺れている。

だが、いならぶ無言の男たち……アルディーンはいちべつして、彼らが特に変わった武器を携帯してはいないことを確認した。落とし穴の類はどうだろうか？

――ないようにみえる、でも……。

精巧にかくされたトラップならば、自分にはわからないかもしれない。重い部屋の空気を息苦しく感じた瞬間。

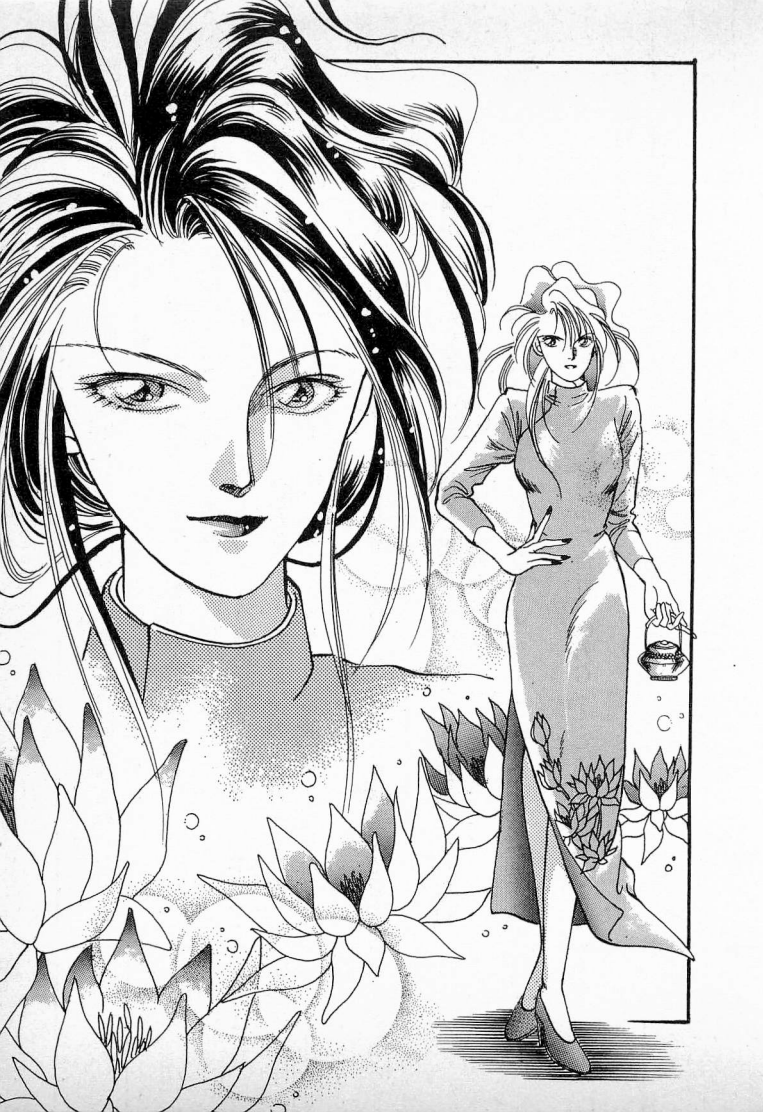
反対の扉があいて、人影が部屋に入ってきた。水色の袍。真珠の髪飾り。

――この女性は、さっきの……？

男たちがなぜかいっせいに立ちあがった。彼女はその中央にスラリと立つと、

「待ちかねていたわ、闇の皇子。ようこそ、私がスコルピオン」

……部屋じゅうの部下たちをしたがえて、世にもうるわしく笑った。



ここで気絶したら一世一代の恥だ……それだけを考えて、涼は耐えぬいた。
「あ……あなたが、つまり……」
「そう、私がスコルピオン……知っている人は梨花夫人とも呼ぶわ」
――〝恋人〟なんかじゃない、首領そのものなんだ！
その場所にそのとき3人の涼がいた……一人は冷静に〝そうか。ぶっとぶ、っていうのはこういう意味なんだな〟と思い、一人はなぜかそこから全速力で逃げだしたがっていた。最後の一人があやつり人形のように、アタッシュケースを前に差しだした。
「これを……どうぞ」
梨花夫人はケースのふたをあけ、中の金額を確かめるとにっこり微笑んで言った。
「足りないわ」
その視線が、なぜか札束ではなく自分に集中しているような気がしてならない。
「そ、そんなバカな！　30万Gたしかにあるはずですッ！」
うろたえる声に、彼女はうれしそうに〝ええ、あるわ。でも、これでは足りないのよ〟と言った。
「一人につき10万Gに変更したの。だから合計で60万G……ここには半分しかないわ」
「待ってください、梨花夫人！」
涼はとっさに青くなった。

「それは、あなたにとってもバカげた考えですよ！　ここにある30万Gは……これ以上の金額が家族に出せるわけはない。よしんば出せたにしても、今夜はもう絶対に無理だ！」
「明日になれば、武装隊が来るはずだわね」
梨花夫人は、なおうれしそうである。
それがわかっていながら……涼は腹を立てた。
「スコルピオン！　あなたが香港でどれほどの悪事に成功してきたかは知らないが、ネオ・ナリタの武装力を甘くみてはいけない……明日の朝になれば、ここは戦場に近くなる」
この一味の人数では、絶対に勝ちめはない。
「……つまらない欲を出さずに、これで取引をするのが身のためだ」
さあ人質を返してもらおう……闇の皇子が冷たい声で、そうせまった。
黒衣の少年。ネオ・ナリタの人型の蛇。時刻はもう深夜に近い……涼はアルディーンの力が、その部屋で荒れるにまかせた。
鏡が割れる。シャンデリアの飾りが、音をたてて飛び散るのだ。不審な動きをみせた部下の数人が、カミソリのような風に頬を切られた。
梨花夫人の瞳が奇妙に輝く。
――すごい力ね！　すばらしいわ!!
〝わかったわ、アルディーン。取引をしましょう〟

その声に、内心ではホッと息をついていた。

まだこの美しい女性が、罪もない人質の血をむだに流して楽しむような残忍な性格の持ち主だとは思いたくなかったからだ。

静かになった室内……梨花夫人が鈴を振るような声で言った。

「……一人につき10万Gこの線はゆずれないわ。でもね、あなたの言うこともわかるの。だからこうしましょう、足りない半分の額には別の条件をつけるわ」

——また別の条件をつける……というのか。

「そうよ、30万Gはそれでないことにしてあげましょう。今夜、一晩……あなたが私の言うことをきいてくれたら」

大音響とともに、天井のシャンデリアが床に激突して粉々になった。

「ど、どういうことです!?」

梨花は艶然と笑って少年の首に手をまわすと、〝もちろんこういうことよ！〟。

ギョッとして見返すと、うっとりと目をとじて頬をすりよせてくる。

「美しいアルディーン……あなたを愛してしまったの」

〝ちょっと待ってください、梨花!?〟闇の皇子らしからぬ悲鳴をあげて、アルディーンは彼女の腕から飛んで逃げた。

なんなの、アルディーン？　梨花夫人は甘い声で近づいてくる……。

「ひ……人がホラ、見ていますからッ」
我ながらおろかなことを口走ったものだ……涼は瞬間、舌をかみきりたいと願った。
〝まあ、そんなこと〟梨花は笑って、
——いいわ、意外に恥ずかしがりやなのね。でも、そんなのなんでもないこと。
片手で部下たちを下がらせると、
「さあ、望みどおり二人きりになったわ。アルディーン」
冗談ではない。涼はジリジリとあとずさった。
「梨花夫人……おわかりでないようだ。僕は妖魔ですよ」
「朝の光はよくないのかしら？」
「いや……そうじゃなくて！」
アルディーンの抗議の声を、梨花はほぼ完全に無視した。
「愛しい人……それなら夜明けの最初の光が射すまでには、かならず返してあげるから。だから朝までは、この私の言うなりになってもらうわ、そうすれば……」
そうすれば、彼女には自信があるのだ。
〝夜明けまでには、闇の皇子は私の虜〟
心臓がわくわくと高鳴るようだ。
——恋にかけてはこの梨花は、100人の女にもまさる自信があるのだもの。

今夜じゅうに、この少年を身も心も私のものにしてみせる。夜明けまでには闇の皇子は、梨花夫人の足元にひざまずいて愛を誓うようになるだろう。

——あのすばらしい妖力も、この美しい姿もみんな梨花のもの！

冷たい腕にさわると、驚いたように身を引く……ビリビリ緊張した気配が手にとるようだ。

まだとてもとても若いのだわ……だがそれもこのさい魅力の一つだった。スコルピオンのまなざしに妖艶さが深まる。年上の美女の妖しい視線。

……獲物として見られていることにようやく気づいた涼の背筋が、思わずゾッとなった。

——いらっしゃい、あなたはもう私のものになるしかないのよ。

いつのまにか、ソファーのそばに追いつめられていた。

「やめてください！　はなしてください!!　僕は本気で嫌なんですッ！」

美女の瞳がやや冷たい光をおびた。

「……どうして？」

——僕には好きな真夜子がいるんだ!!

言う前に、はやくも察したようである。

——そうなの……そういうわけで私をこばむのね！

そればかりが理由ではないが、涼はとにかくうなずいた。相手は氷の笑みを浮かべて、

「忘れているのは気の毒だけど、あと30万Gか、さもなくば〝あなた〟なのよ……」
顔色がサッと青ざめた。
「……人質の生命がどうなってもいいというのなら、お帰りなさい」
「そんな……スコルピオン、あなたはッ」
〝梨花と呼んでちょうだい〟やや苦しげな間があって、少年の声が言うとおりにした。
「梨花、お願いです……」
どうか……くちびるをかんでうつむくアルディーンの髪に、楽しげな梨花の手がふれる。
「なんてきれいな髪かしら……」
振りはらう力のないのをいいことに、美しい白蛇のようにからみついてくる。甘いにおいで、頭の芯がくらみそうになったアルディーンが、とうとう悲鳴をあげた。
「い……嫌だッ、離せったら、離せッ!!」
〝助けて、誰か来てッ!〟
そのとき、庭に続く窓のほうから、ひどく落ちついた声がした。
「……なんてざまだ、アルディーン」
……その声にはたしかに聞きおぼえがあった。
――ナイトハンド!!
間違いなく、薄いカーテンの向こうから背の高い仮面の男が入ってきた。

威圧的なほどたくましい体軀を、黒衣と踵につくほど長い黒のマントにつつんでいる。かつては七賢人との戦いで、その極められた強さと容赦のない殺戮でおそれられた男。ネオ・ナリタにとっては、もう一人の夜の狩人ナイトハンドだった。

〝ひさしぶりだな、アルディーン〟

彼は仮面の下で血も凍るような笑みを見せてから、おもむろに肩のレーザーをおろした。

「そして、お前もだな、威梨花。ここで私に会うとは思わなかったようだな？　守りも貴様にしては手薄だったぞ……」

振りかえると、梨花夫人は羅刹の形相に変わっていて、

「ちくしょう……なんて執念ぶかい奴」

〝お前のために、香港を捨ててまできたのに！〟

ナイトハンドはあっさりと肩をすくめた。

「それで私は香港から追ってきたのだ。お前のような犯罪者は、どこであれ生かしておくわけにはいかないからな」

そのまま無造作に、レーザーの照準をあわせる。

「最後の祈りをするなら今だぞ、梨花……」

――え……ナイトハンド、ちょっと待って！

闇の皇子が思わずとめに入った。

〝心配するな、人質は全員解放したから。こいつの手口はいつもワンパターンなんだ、人質はたいがい似た場所に隠してある……〟梨花がこぶしを握って、クッとうめいた。
「さあ、どけ、アルディーン！　この女は香港では警察の上層部にまで食いこんでいて、なかなか手出しができなかったのだ。しかし、今日こそは息の根をとめてやる」
〝ナイトハンド、それでも私的な処刑はよくない！　ナリタ署にわたそう！〟
ナイトハンドは聞く耳をもたない。
「ダメだ、ナイトハンドッ、人殺しは……よくないよッ」
鋼鉄の腕にぶらさがるようにして、銃をさげさせようとしている涼。
もみあう二人にソファーから声がかかった。梨花夫人だ。
すっかり落ちついた顔で微笑みながら、一枚の写真をかざしている。〝これをごらん〟
「アッ、それはッ！」
アルディーンが指さして悲鳴をあげる。黒衣のままゴーグルのない自分の顔写真だ！
――なぜ……どうしてそんなものが!!
このまえの夜、偶然に撮られたものだとは知るよしもない。
「……闇の皇子の素顔の写真。星は私の味方だわね、ナイトハンド……お前がこの私に指一本でもふれれば、すぐさまこの写真を街じゅうにばらまくよ！」
〝それだけはやめてッッ〟思わず梨花の前面に強力なバリアを張ってしまった。

ナイトハンドが猛獣のようなうなり声をあげて、梨花をにらみつける。
「この毒蛇め!!」
「なんとでもお言い、けだものが」
〝やめてください梨花、これ以上彼を怒らせないで!〟
もう、どうしたらいいのか……ようやっとナイトハンドがレーザーの照準をはずした。
「よし……アルディーン、今度だけだ。お前に免じて、こいつを撃つのを見あわせる。だが今度だけだぞ! そして梨花、貴様は二度と香港へは戻らせん、ネオ・ナリタでも悪事は許さん。次に一度でも何かしてみろ!
そのときはな、こいつにはかわいそうだが、もう貴様を許しはせん……」
ナイトハンドの殺気にもめげず、梨花は石の心すらとろかすような微笑を浮かべた。
それが何より彼の気にさわったようだ。
〝いいか梨花、駐車違反一つでも、きっと生命をもらうからな!!〟
怒鳴っている彼を、アルディーンが引きずるようにしてその場から逃げだした。

……約半時間後。彼らは、とあるビルの屋上にいた。
背の高い影と小柄な影……月だけが二人を照らす。あたりはとても静かだった。

「本当に、ひさしぶりだね」

アタッシュケースを手にした小柄なほうの影が、なつかしそうな声でもう一人に話しかける。背の高いほうも、黙って一度うなずいてみせた。

「香港での噂もきいていたよ……」

このもう一人の黒衣の人物について説明をしておこう。

ナイトハンド。

彼はアルディーンとは違い、まったくの人間である。その黒いウェアと仮面は、素性をかくすためと同時に、強力な防弾スーツとして彼の身を守っている。

その正体はといえば若き富豪のナサニエル・ゴードンであるが、ナイトハンドとしての顔のほうが、おそらく彼の素顔であろう。

ひとたび敵と向かえば、おそろしい武闘家であり血も凍るような残忍性をみせたが、そのやり方は人間のものだ。武器、剣技、格闘技……人類には、たがいに殺しあってきた長い歴史がある。ナイトハンドはその中でも、ひときわ輝く暗黒の星だ。

……アルディーンとナイトハンドは、七賢人との戦いのなかでおたがいを知った。

闇の皇子と違って、そのころナイトハンドはけっして敵に情けはかけなかった。邪教の使徒たちにとって彼に出会うことは、すなわち死を意味したものだ。

〝この街のことなど私にはどうでもいい、殺せるだけ奴らを殺してやりたいのだ！〟

——そのはずだ。彼は七賢人に両親を目の前で殺されているのだから。

最後の決戦の前夜になって、アルディーンはその過去を知ったものだ。

幼い子供の前で、惨殺された若い夫婦。

その子は7年後、ふたたびネオ・ナリタに戻ってきた。表むきには莫大な財産を持つ青年富豪ゴードン氏として、しかし夜は……。

死闘のなかでも明日を夢みていたアルディーンとは違う。ナイトハンドは復讐鬼だった。

……七賢人との最後の戦いで、ナイトハンドは身も心も深い傷を負った。

——香港に戻るというときには、僕もずいぶん心配していたんだけど……。

さいわい、香港では暗黒街の組織が次々と、黒衣の男のためにつぶされているという話が、しばらくして風のたよりに入ってきた。

七賢人が倒れてからも、悪を憎むという強い衝動は変えられなかったようだ。

元気でやっているのだな、と思い、またその手段が（前ほどは）冷酷でなくなったようなのを聞いて、ひそかに喜んでいたアルディーンであったのだが、

〝梨花、最後の折りをすませるがいい〟

ダメだ……と、涼は首を振った。

——彼、ぜんぜん変わっていないや！

無言だったナイトハンドは、ここでようやく涼に顔を向けると、おどすように指を1本あ

げ〝少し用心がなさすぎるぞ〟と言った。
あの魔女、威梨花については自分のほうがよく知っている。実際、アルディーンでは奴の悪徳の意味さえ本当にはわかるまい。こいつはまだ子供なのだ。
だが無垢ならば無垢なだけ、ああいう魔女にはいい餌食になる。あのまま放っておけば、ひとたまりもない……いいようにズタズタにされるのがわかっていた。
「見苦しいまねをさらして、私がいなければどうなっていたと思う？」
厳しい声に相手もさすがにおもはゆそうで、何かすこし言い訳をした。
「ありがとう、でも……」
闇の皇子はすこし言いよどんだ。
たとえ、何であれ人殺し……それも女性を殺すのには、アルディーンは反対である。
「……それもあんなきれいな人なのに、よくかわいそうだと思わないよね」
うっかりしたつぶやきが聞かれてしまったらしい。
〝なに⁉〟ナイトハンドが仮面の下で目をカッと見ひらくと、静かな雰囲気がたちまちふっとんだ。いきなりツカツカとよってくると、頭から怒鳴りつけた。
「まだわからないのか、貴様は⁉　よく聞け……女なんかみんな悪魔だ！」
迫力につい悲鳴をあげる涼。
「……ナイトハンド、わかっている⁉　君、今、顔すっごく怖いよ‼」

「顔なんか怖くたっていいんだ！」

——そこまで怖いのは問題あるよ!!

〝それ以上、続けるなら悪いけど僕、泣くからねッ〟ようやく、つかんでいた襟首を離してもらった。荒い息を抑えている背中を、気味わるそうに見守る。

ふたたび振りかえった彼は、妙なひきつる笑いを浮かべていた。

「フッフッフ、そうかアルディーン、お前は知らなかったのだからな。あの威梨花というのがどんな女か……聞かせてやろう、あいつはな」

〝知っていれば、そんな甘い話は金輪際できなくなる〟

うれしそうに声を低めて、ナイトハンドが話すことによれば……。

——香港警察からの文書には、いささかの手落ちがあったらしい。

スコルピオンと呼ばれるその首領は、女であり、しかも（見たとおり）絶世の美女だった。威梨花というのがその本名で、

「生まれはマカオの貧民窟らしいが、9歳のとき、売られて香港にきたのだ……」

売られた先は、財閥葉家。

名だたる豪商で、会長の葉師文が一代でその財をなしたうえに、息子3人がそれぞれ結束も固く、財団を守っていた。

「……葉子光は海運、葉子宝は不動産、葉子軒はホテルグループを引きついで、それぞれ立

派にやっていたんだ」

葉家の三兄弟、といえば飛ぶ鳥を落とす勢いだったという。

「ところが、梨花がここに売られてきてからというもの、父親と三兄弟のあいだであの女を取りあって血みどろの争い沙汰になってしまったんだな！」

目を丸くしている涼の前で、ナイトハンドはますますうれしそうに葉一家の没落について話した。

わずか9歳で不和の種をまいた美少女は、続く数年のあいだに、美しくなるばかり。

鉄の結束を誇っていた彼らは、一転して火のように憎しみあった。

「……骨肉の争いは何年も続いて、結局長男の葉子光が父親と弟たちの屍をのりこえて女を手にしたのだが、そのころには葉家の力はかなり衰えていて、昔の勢いは、もうなかった。それでいよいよ彼が女を新娘として自分の船に乗せ、世界一周のクルージングに出ようとしたときに、海賊に襲われたんだ」

マラッカ海峡を根城にしていた狼大という海賊の一味が、その船を襲った。

それまでも、通りかかった客船が何度も襲撃されていたことは事実だったが、用心深い彼らは、追っ手の厳しい大手の船を狙うことはないはずだった。

「実際には、もう葉家にそれほどの力は残っていなかったんだが、なぜ奴らがそれにいちはやく気づいていたと思う？」

「まさか……」
「梨花が手引きしたんだ」
「まさかッ！」
狼大とその一味は、たいした抵抗もなしに豪華客船を乗っとると、金目のものすべてと花嫁を連れて、ゆうゆう引きあげていった。
〝あの魔女めは年齢を隠すクセがあるのでよくわからないが、葉家の滅亡のときに14か5、すくなくとも今のお前より若かったのは確実で、ひょっとすると10歳だったかもしれん〟
「……それから梨花は狼大の相棒として、あのへんの海域を荒らしまわったあげく、狼大が海上警察との撃ちあいで死んだあとは、部下を全部引きつぎスコルピオンと名乗って香港で悪事のし放題だ」
貧血を起こしかけている相手の顔色を見て、満足そうにうなずくナイトハンド。
「もうすこし聞かせてやろうな？」
「僕、なんだかあまり聞きたくは……」
「あの女は香港では誘拐だけじゃなく、人身売買も手がけていた……」
〝人身売買〟かつて七賢人も人体実験のモルモット用として、人狩りをしていたことを思いだしたが、
「バカめ！　あの女がやっているのはそんな穏やかな代物じゃない。美男美女を金持ち連中

に売りつける、昔ながらのとんでもない方だ！」

人体実験のどこが穏やかなのか、涼にもよくわからなかったが……。

「いいか、あいつが売っていた〝商品〟のうち、女は昔の奴と同じく、人買いに身売りしてきた娘たちだったが……」

ナイトハンドはここでニヤリと笑った。

「男はみんな、梨花のもと恋人だった」

「ど……どういうこと？」

〝だから決まっているじゃないか。あの女は気にいった若い男を誘惑して、さんざん遊びまわったあげくに、飽きたら値段をつけて売ってしまうのだ〟

いずれもまだ若くえりすぐりの美青年で、才能も豊かな秀才ぞろい……。

「そういうのが好きなのだな。顔だけじゃなく、能力もないと嫌らしい。行方不明になった若き天才たちの何人が、あいつのルートで売られていったかお前には想像もつくまい？」

それからナイトハンドは次々に〝被害者〟の名をあげていった。涼も知っているある数学者の名前が出たあたりで、目が真ん丸になっている……。

「たしかに男をたぶらかすことにかけて、異常な才能を持っているのだ。これが、と驚くような立派な男たちでさえ、何人もあいつの毒牙で骨ぬきにされてしまった……」

ここでまたしても鬼のような形相になると、〝これでも貴様、まだあの女に同情するの

か!?〟と叫んだものだ。

アタッシュケースで身をかばうようにして、ジリジリと後ろにさがる涼。

ナイトハンドは手をのばすと、闇の皇子の頬をピタピタたたき、意地悪そうな笑顔になって、〝私はお前がかわいそうに思えばこそ、教えてやっているのだぞ〟と言う。

「それとも何か？　お前もあの女の色香にまよって道を踏みはずし、最後はモロッコにでも売りとばされたいのかッ？」

目を大きく見開いて、必死に首を振るアルディーン。

ナイトハンドは、一人でうなずきながら、

「そうだろう、そうだろう……これでよくわかったな？　女なんか、そもそもみんな悪魔だ！　だが、そのなかでも威梨花は最低の大魔道だ！」

底光りのする目つきは、どちらが悪魔だかわからない。

涼はこっそりタメ息をついた。

――ナイトハンドの女性不信も理由のないことじゃないけれど……。

美しく卑劣だった沙羅・アッシャー。

ナイトハンドがたぶん初めて愛した女性は、顔こそけがれない天使のようだったが、心は冷酷で裏切りも平気でする娘だった。あの美少女と出会い、何も知らずに愛してしまったのは、彼にとって不幸なことだったと思う。

――ナサニエル・ゴードンとしての財産を目当てに彼に近づき、卑怯な手管まで使って心を捕らえたあとで、自分の命惜しさで彼を敵の手に売りわたしたんだ。

おかげさまでナイトハンドは、いまやあらゆる女性を不信と軽蔑の目で見ている。特に、梨花のような輩は、はげしい憎悪の的らしい。

「ああいう女には、なによりもレーザーがいい。それがなければ、ライフルでもなんでも、とにかく眉間に手早く撃ってやることだ！　今度、会ったら絶対にそうしろ、な！」

しかたなく涼は、〝銃があればね〟と、つくり笑いをした。

――お前、銃がないのか⁉

信じられない表情で、ナイトハンドが見つめる。

「そのベルトにさげているのは何なんだ？」

これはワイヤーガンだから、と聞いてあきれはてた。

「そんなもので人が撃てるか！」

撃つために持っているわけではない……と聞き、頭が煮えそうになる。

――こいつは……悪党だらけのこんな街で、銃もろくに持たずにウロウロしていたのか⁉

武装してない人間を見ると、イライラする性格である。

〝明日、屋敷に来い。てきとうな銃を貸してやる〟

アルディーンはありがた迷惑なようすでためらっている。

「いいから、必ず来い。こないと許さないぞ！」

勝手に言いすてて、ナイトハンドは霧の海に去っていった。

やや呆然（ぼうぜん）とした姿で黒衣の少年が一人、屋上に残されていたが、すぐにこれも飛鳥（ひちょう）のように身をひるがえすと、夜空のどこかに消えてしまった。

第二章　ザ・タワー

その翌日。言われたとおり屋敷をたずねた涼を迎えたのは、執事のウォルフだった。旧市街の少年らしいジャンパーとジーンズ。執事がうやうやしく迎える客としては、かなり風変わりだっただろうか？

風変わりといえば、この屋敷の主ゴードン氏もそうとう変わり者だという噂だが……。ナサニエル・ゴードンの屋敷は旧市街の北のはずれにあり、高い厳重な塀で囲まれている。屋敷の広さから考えれば、使用人の数は驚くほど少なく、そのなかでも主人の身のまわりに近づける者は、さらにわずかだった。

白髪の執事、ウォルフはその数少ない一人であり、主人のために屋敷のすべてを忠実にとりしきっていた。

じつは、この執事こそ青年富豪ゴードンの謎を解く一つのカギである。

白髪の執事である。うまく目だたぬようしているが、よく見ればカミソリのような鋭い知性を奥に隠していた。時折、身分にありえぬ威厳を感じさせる横顔も変だ。

……なぜなら彼はその昔、実際に強大な権力を手にしていた。ウォルフガング・エルクハートというのがその旧の名前である。

7年前、ナイトハンドの両親が殺される原因をつくったのは、彼であった。

当時、ネオ・ナリタで絶対の権勢を得ていた老人と七賢人との抗争にナイトハンドの両親がまきこまれた……このことに彼は、ずっと強い責任を感じている。

医師だった若い夫婦が生命を捨てて老人をかばい、自分は生き残ってしまった。

ただ一人残された忘れ形見のナサニエルは、その日から彼にとって、つねに変わらず何よりも大切な者となったのだ。

野心と傲慢と冷血と、誰も愛したことなどない強欲な老人が……。

血の絆はなくとも、我が子と同じように愛していた。

エルクハート財団をひそかに解体して、あらたな富の形をつくりあげ、すべてを譲りわたして心から満足した。

惨殺の光景を瞳に焼きつけられた子供が、みずからの意志で復讐者ナイトハンドに我が身を作りかえていったときには、命にかえてもあの子を守りたいと祈ったものだ。

血みどろの嵐がすぎたあとで、祈りはどうにかかなえられていた。

残された傷は深かったが、〝それでもナサニエルは生きていた！〟

「アルディーン、旦那様が今あるのは、あなたのおかげです……」

執事らしさもすっかり板についたウォルフが、奥への道すがらにそう言うと、
「どうしてです？　僕は助けられたのに」
少年は真顔で笑う。
アルディーンの言葉もウソではない。だが、ウォルフ老人は穏やかに首を振った。
魔都の呪いを受けながら、愛するもののために闘っていた彼の姿が、地獄の淵であの子にこちらを振りかえらせたのだ。最後に何が人を救うのか……長く生きてきた彼のほうがよく知っている。
今、このウォルフの悩みはたったひとつだった。〝あの子はいつになったら仮面を置いてくれるのだろう？〟
七賢人への復讐は終わったのに、ナサニエルは今日も黒衣をまとい、戦いに出ていく。悪を憎む心もいいが、それだけでは困る……早い話、ナサニエルが現世の快楽にいっこう興味を示さないのにまいっていた。〝莫大な財産を持ちながら！〟
無駄に捨ててしまった7年間を取り戻そうともしないで、ナイトハンドは、厳しい生活をくずさない。富豪ナサニエル・ゴードンとしては、義務のように財産を管理している。必要だと思うのは武器だけのようだ。
青年富豪らしく、馬かヨットにでも趣味を持てばいいのだが！　プレイボーイになってくれればさらによい……このままでは、万が一のとき財産を継がせる相手もいないのだ。

〝お前が相続すればいい、もともとはお前のものだ！〟

この件について口に出すと、かならず嫌な顔をするか、聞かないふりをした。しつこく食いさがって、思いきったことをされるのも困る……だが、あきらめるつもりはさらさらなかった。なんとしても妻がいるのだ。そして跡継ぎも。

あんな冒険を続けて、ナサニエルの身にもし何か起これば……考えるのも恐ろしいことだが、独り残されるのは、ウォルフにはまっぴらだった。

まだ若く、資産もあり、本当ならどこへ出してもひけを取らない青年なのだ。〝問題なのはナサニエルには、他人に愛を感じる能力が大きく欠けていることだ〟

ウォルフはひそかにタメ息をついた。

「よく来たな！　アルディーン」

来客用の応接間で待っていたナイトハンドは両手を広げてそう言うと、年代ものの見事なテーブルの上に、さっそく拳銃を並べはじめた……。

この男がこういう目をして歓迎する相手は、めったにいない。

彼は背の高い青年で、浅黒い端正な顔だちもそう悪くはない。全体の雰囲気がすこし陰気だろうか？　だが、その気になれば洗練されたものごしを装うことも可能らしい。愛想のよ

い応対、知的で人を魅きつける会話……みんなお芝居だが。

ナイトハンドとの関わりを隠すために、ふだんは車椅子にのっている。身体が不自由だとふれまわらせ、交際も最小限に抑えた。

実際、きらびやかな資産を持つ青年でありながら、社交界にもめったに顔を出さなかった。人嫌いの若い富豪は、厳重な屋敷からは一歩も外に出ないと思わせていた。

蜃気楼のように出現した財力とともに、この演出はますます彼を謎めいた存在に仕立てあげている。しかし暗黒街とのつながりを漠然と噂する者はいても、黒衣の復讐者の正体を思う者はなかった。

顔のアザも偽装である。アルディーンを前にしている今は、どこにもないのだ。

けれどもナサニエル・ゴードンとして人に会わねばならぬときには、特殊な顔料を使って、頬の左いっぱいにアザをつくっていた。

顔だちの秀麗さを踏みにじるような無残なアザは、人目をわざとそむけさせるためである。

そこまでするだろうか……というのが、涼の正直な感想である。ウォルフ老人に言わせればもっとだろう。だが、なんでも徹底的にやってしまうのがこの青年の天性であり、いささかよくないところであった。よいところでもあった。

……さて、次々と目の前に出される銃器に、涼はややへきえきしていた。

コルト、マグナム、グロック。黒光りする、見るからに殺傷力の強そうな拳銃をズラリとならべて、〝さあ、どれがいい？〟と言われても……。

「お前はまだ手が小さいから、反動の強いものは勧められないが……」

――気を悪くさせずに断るには、どうしたらいいのかな。

困ってふと壁を見あげると、さまざまな種類の剣や古式の銃がかけられている。17世紀あたりからの壮麗な武器コレクションだ。美術品として価値が高いものもあるようだが、いずれにせよほとんどの品が、いまだに実用の性能をそなえている。

……時折この部屋に通される来客は、博物館なみのコレクションにかならず感嘆し世辞も言うのだが、内心では『青年富豪の権力意識のあらわれ』などと勝手な解釈をしていた。まさか彼がこの8割を実際に使っていようとは、誰一人夢にも思わない……。

見事なサーベルに、涼の目がとまった。

立ちあがってよく見ようと近より、背のびをしていると、

「それはロシアのものだ。こっちと一対になっている」

そう言って、ナイトハンドは向かいの壁から別の一振りを下ろして持ってきた。

把手の紋章の精緻な細工に、思わず見とれていると、ナイトハンドがすこし奇妙な声音でつぶやいた。

「……そういえば、聞いてもらいたい話があったのだ」

――なに？

「トマス・ナルダンという名前を知っているか？　つい最近、ネオ・ナリタにビルを建てた男だ」

「ああ、〝ザ・タワー〟のことだね？」

涼が明るい声をあげた。

ネオ・ナリタ旧市街をギリギリではずれるある場所に、近ごろ新しいビルが建っていた。いつ建てはじめたか、涼にもさだかではなかったが、夢のようなスピードで建築が進み、外観はほぼ完成に近いようだ。この街にはかつてなかった堂々たるガラス張りの高層ビルディングで、いつのまにか〝ザ・タワー〟という呼び名がつけられている。

噂では、完成すれば海外の一流企業がそこを本社にするつもりだとか……本当だとすれば、ゴードンの工場に続く第二の希望になるかもしれない。

涼は遠くから建物を見、また食堂で工事に使われているらしいケーブルやシステム用機材のナンバーなどを小耳にはさんだ結果、かなりのハイテク設備が予想されたのでうれしかった。〝噂は本当になるかもしれないな！〟

晴れた日には、建物の外壁のミラーガラスが氷の城のような輝きを反射し、旧市街の中からでもよく見えていた……。

「それじゃあ、あのビルの持ち主はナルダンという人なんだね」

ナイトハンドがうなずき、答えた。

「そのようだ。T・ナルダン……たしかに有名な企業家で、いくつもの法人や慈善団体をもっている。ネオ・ナリタを復興させることを、生涯最後の夢にするつもりだと言って、この前たずねてきたのだが……」

〝ミスター・ゴードン、ともにこの街に夢をいだく人間として、かねてより一度若いあなたにお会いしたかった!!〟

ナルダン氏は有能な企業主であると同時に熱心な慈善家であるという評判が、あちこちから入ってきていた。

実際に会ってみると、噂にたがわぬ誠実そうな紳士で、やや丸っこい温厚な顔をしていた。車椅子のゴードンの手をとり、親しげなあいさつをする。

ナイトハンドは初対面でこの男を警戒し、心から嫌悪した。

「どうして……いい人なんだろう?」

「いや、アルディーン、あの男は絶対に悪党だ!」

ナイトハンドとしての彼のすべてのカンが強力にそう告げていた。いそいでナルダンの身元や所有する企業の裏表を、あらいざらい調べたが、何も出てこなかった。

「だが気に入らない。そのサーベルは、ナルダンが持ってきたものだ」

噂ばかりでつかみどころのない大富豪ナサニエル・ゴードンについて、かろうじて確実ら

しいのは、彼が武器コレクターだということくらいである。

ナルダンは穏やかな笑顔とともに、〝お近づきのしるし〟だと言い、このサーベルを持ってきた。帝政ロシアの貴族の品らしい見事な剣だ。刃の部分はゾーリンゲンかもしれない、鋭くギラギラした光が目を妖しく射る……。

――これが慈善家の持ってくる品だろうか？

ナイトハンドの目は、おぼろげながらも見抜いていた。

収集家が騒ぐ剣もいろいろだが、これほど不吉な美しさを持つ品をほかには知らない。飾りや来歴はつけたしだ。これはたしかに殺すためにつくられている……おなじ性質を持つ彼にはよくわかるのだ。

〝これは凶器だ、いままでに百人の生身を切り裂いている。そこが魅力だ〟

平凡な収集家なら、知らずに魂まで魅せられてしまうのだろうが、ナイトハンドはただのコレクターではないのだ。そして、おそらくオークションでは手に入らない代物……だからこそ、ナルダンははじめての会見にこれを持参した。

〝コレクターなら、これを拒めるはずはない〟

上目づかいのあの目が、たしかに一瞬そう言っていた。彼もこの刀の真の値打ちをこころえている証拠だ……。

――慈善家だと⁉　バカなッ、慈善家がどうしてこんな凶器を持ってこられるものか！

どこから手に入れたのか……どうして、ここに持ってきたのか？

ナサニエル・ゴードンが武器収集家であるとつきとめるやいなや、このサーベルを用意してきた。その手腕が気に食わない。

これほどの品物を初対面のえさにして、近づきたがる態度が気に入らない。

「アルディーン、私は絶対に間違ってなどいない。あの男は悪魔だ！　どこかうさんくさい、何か……あるはずだ」

だが何も浮かんではこなかった。我慢できない不快感だけがある。血の匂いをちゃんと知っている慈善家の顔。

……涼は返事ができずに、困ったような表情で小首をかしげている。

ナイトハンドは暗い目つきで、

「あの男は、ザ・タワーが完成しだい、旧市街の中心に公園をつくる気でいるらしい」

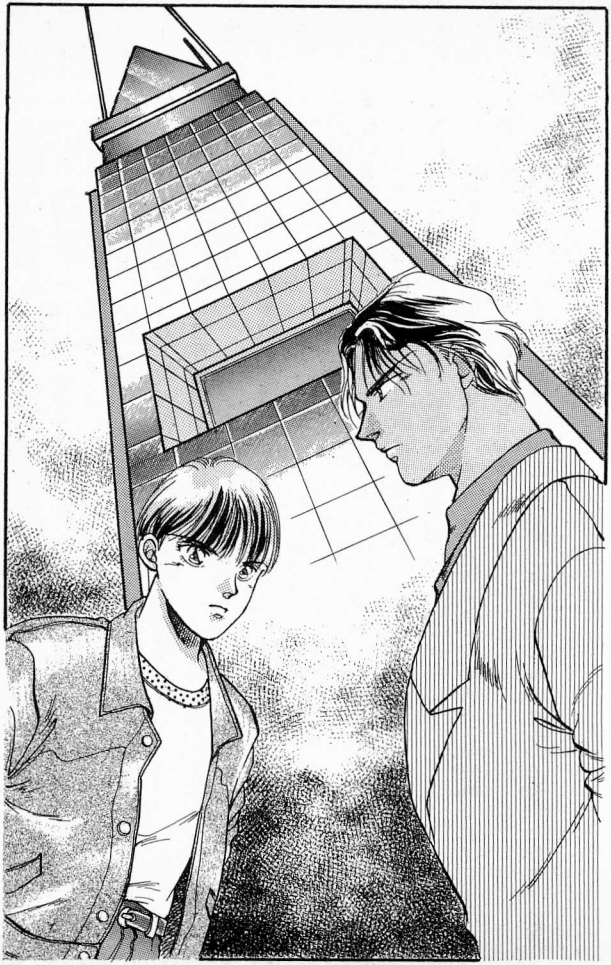
――公園？　素敵じゃないか！

涼の反応に、相手はただ肩をすくめた。

〝費用はおしまずに本格的なものにするつもりです。芝生があり、緑があり、美術館やコンサートホールもあるような〟

「……コンサートホールだって？」

「そうだ、旧市街のど真ん中にだ」



はじめて、少年の目にも、とまどいが浮かんだ。

ネオ・ナリタ旧市街にそういう施設を、今、作ることは……。

「はっきり言って、無駄だ」

涼が苦笑したが怒りはしなかった。ネオ・ナリタが今、必要としているのは働き先であり、安全な街角だ。それすらも、現在のところはかなえられていない。

男たちの気性は荒く、街には浮浪者がまだあふれていた。どうしようもなくなれば盗みや強盗をする者も多かった。

「工場でもくりかえし盗難事故が起きているし、あきれるほどモラルの低い工員もいるのだぞ」

「……ごめんね」

あやまることではないような気がする。ナイトハンドがチラリと歯を見せた。

「とにかくナルダンが予定している場所は、旧市街のど真ん中だ。あの場所にそういう施設を作っても、残念だが今は使いものになるはずがない」

豪華なホールや施設はアッというまに、ネズミやねぐらのない人々に占拠されてしまうだろう。新進の現代彫刻を誰が見るというのか？

それどころか、できあがった公園はもっとも危険な浮浪者たちのタマリ場所として、犯罪の温床となる可能性がおおいにある。

残念ながらそれが今のこの街の現実だ。涼はかつて雪村市長が言った言葉を思いだしていた。七賢人が倒れたあとも、老練な彼は次に来る事態が甘くないことを予想していた。

〝犯罪、流血、不毛……過去半世紀のあいだに、ネオ・ナリタはここまで墜ちてしまった。私たちはあきらめない。だがこの街が本当に立ち直るためには、少なくともあと10年の時間がかかるに違いない……〟

――僕はきっと、それを5年に早めてみせる！

……アルディーンのひそかな自負であった。

「いつかは……たぶん、この街にもそういった施設が自然にできるだろう。だが今は、かけた費用がぜんぶ無駄になるだけだ」

〝ナルダンという人は、まだそれを知らないのだろうか？〟

だが、思えば彼はすでにタワーを建てている。ネオ・ナリタの実情についてもくわしいはずだろう。

「……それなのに、すこし変だね」

うさんくさい話だろう？　ナイトハンドがきっぱりとうなずいた。

「仮にあの男が心底からネオ・ナリタの復興を望んでいるにしても、失敗するとわかっているプロジェクトに大金をつぎこむ理由はない。アルディーン、これには絶対になにか裏があるぞ！」

彼らはそれからしばらくのあいだ、話しあった。この計画に隠された目的があるとしたら、それは何なのか？

大きなポイントは公園の施工式かもしれない。

「計画が決まりしだい、予定の場所でフェスティバルをやろうと言っていた。一種の遊園地まで仮に造って、街に開放するというが……」

かなりの人手が予想される。旧市街の人口の大半が来ることだろう。

その混雑にまぎれて、何かの取引ができるかもしれない。

「密輸品？　密売品？　でも、今でさえネオ・ナリタはあちこちのシンジケートがウヨウヨ入ってきているんだよ。いまさら、カムフラージュがいるのかなァ？」

あるいは、式典の席で誰か重要人物の暗殺が可能か？

「いや、それほどまでするＶＩＰが来るはずはない」

それとも……悩んでも、はっきりした結論は出なかった。

ザ・タワーの最上階はナルダンのオフィスなのだ、とナイトハンドが言う。

「一度、入って調べてみたかった。アルディーン、つきあってくれないか？」

自分の疑惑はまだ曖昧な根拠しかない。ナイトハンドとしては、自分一人でなくてこの怜悧な少年の目でも確かめてみたかった。

「あの男が本当に慈善家だけなら、それでいい。だが、もし何かあるとすれば、あいつは極

悪人だ」

――予想もつかない恐ろしいことをたくらんでいるのではなかろうか？

「いいよ、僕も一緒にいこう」

アルディーンが静かにうなずいたとき、ウォルフがふたたび顔を出した。

「よろしければ、アルディーン様にお飲み物でもお持ちしましょう」

大事な客にふるまいもせずに……執事の目がやや責めている。ナイトハンドがうなずいたので、一礼してすばやく消えた。

それにしても、あきれるほど女の姿が見られない屋敷である。

――ふつう、メイドさんなんかもいるんじゃないのかな？

小首をかしげた涼に、ナイトハンドは冷淡なる口調で〝女など、目のとどく場所にうろつかせておきたくはないからな〟と言ってソッポを向いた。

「あれは無用の生き物だ。いなければいないほどいい」

「そうかなァ……僕は女の人はとても好きだけど」

言ってから、照れくさそうにクスリと笑う。

ついゆうべ、恐ろしい思いもしたけれど、それでもこりるつもりはない。

「その……優しくてきれいで、とてもワクワクするだろう？」

もっと言いたいのだが、うまい言葉が見つからない。女の子はよい。とても素敵だ。

――この冷血漢にわからせてやれたらいいのだが……。

だが言葉にするとどうにも説明できないのが、涼の悲しいさだめである。

〝すごく優しくて、このあいだも僕のために自分の倍くらいある大男とケンカをして、前歯を折ってくれました〟とは……アア、とても言えない。

ただ真夜子がそばにくると、それだけで胸がワクワクするのだ。

――それだけで、もうすごい気持ちなのにな！

ナイトハンドの答えは、ただ皮肉なうす笑いだけであった。涼がついムカッとして、

「でも、そう言うあなたのお母さんも女の人だったわけだしさ！」

――しまった、なんということを言ってしまったんだ!!

〝ナイトハンドのお母さんは、彼の目の前で殺されたというのに！〟顔を青くしてうつむいてしまった涼に、意外なほど穏やかな声がかかった。

「いいんだ、アルディーン。気にすることはない。なにもかも……済んだことだ」

〝それよりもお前の両親というのは、なぜいないのだ？〟

「僕は……」

子供らしい声に、かすかな寂しさがまざった。

「アルマ・シダル号の事故を知っているだろう？」

「ああ……大陸間シャトル、最悪の墜落事故だったな？」

その事故で涼の両親と祖父母は同時に亡くなった。
「乳児室の壁は三重に気密になっていたから、僕だけ助かったんだとあとで聞かされた」
それから涼・雨宮は9歳になるまで、政府の育児施設で保護され、その早熟な英才を発見されてアカデミアへ入学を許されたのだ……。
「だから僕は両親のことは何も知らない。ときどき、ほかの人が言っているのを聞いて、母親ってどんな感じか考えてみたこともあったけれど……」
両親……特に母という言葉の持つ、甘やかなひびきは、時折涼に空想させた。ボーッとしていると真夜子になぐられる。それでも……そうだ、ナイトハンドのお母さんはどんな人だったのだろう？
「私か？　母は……とても美しかったと、ウォルフに聞いているが……」
――聞いている？
涼がふとその言葉を不審に思った……ナイトハンドは静かに首を振って打ちあけた。
「私は両親のことは何もおぼえていない」
そんなまさか！　涼が思わず顔をあげた。この人はあの事件の夜、13歳だったはずだ。
……それでもナイトハンドには、現在その記憶がかけらもなかった。
どういう理由かは彼にもさだかではない……ただ、復讐を誓ったはじめのころには面影もはっきりと思いだせた。だが彼は殺すための技を次々とおぼえ、手を血で染めることにも慣

れなければならなかった。

ナイトハンドとしての自分が完成するにつれて、面影は不思議におぼろになり、

「今はもう何も思いだせなくなってしまった……」

青ざめた顔で目を見はる子供の頬を軽くたたくようにしてから、

「どうした、お前がそんな顔をすることもないだろう？」

思い出の一つすらないのは、同じことなのだ。

一度、タメ息をついてから、少年は片頬にえくぼをつくって瞳を輝かせた。

――本当に、母親ってどんなものなのかな？

憧れるような視線で何を空想しているのかは、すぐにわかる。

突然、ナイトハンドが爆笑した。

「ど……どうしたの!?」

ふだん無表情なだけに、この青年が笑いはじめると、いろいろな意味で心臓に負担がくる。

――彼だって笑えるんだ、笑えるんだ、笑えるんだとも。

でも何を？　呪文のようにとなえて心臓をなだめている涼の前で、ナイトハンドは必死に脇を向き口を押さえながら、笑い狂っている。

――威梨花め！　こんな子供がお望みだというのか!?

あいつはおそらく闇の皇子の姿を見て、悪心を動かしたのだろうが、捕らえてみればさぞ驚いたことだろう。まだ母親だのチョコレートだのが恋しい赤ん坊を前に、愕然となるあの女の顔はきっと……。

「み……見ものだ！　アハハハ、なんてことだ!!　お、おかしくて死にそうだッ」

――一度、笑いだすととまらないんだよね……。

そういえば以前にもこんなことがあったっけ。わけはわからないが、ナイトハンドの七不思議の一つにしようと、涼は心に決めた。

戻ってきたウォルフが、あやうく盆をとり落としかけている。

――その夜更け、タワーの見える旧市街の一角で二人は落ちあった。

「霧が出てきたね……」

小柄な黒い影がつぶやく。

「忍びこむには好都合だ」

背の高いほうがそう言って、首をかしげた。もともとネオ・ナリタは霧で有名な街ではなかったのだが、近ごろ夜になると、よく街路が低く這う霧でおおわれるようになった。

夢幻のような光景である。

時折ドブや街路のずれたマンホールから、白い蒸気があがっていることもある。どうやらこの霧は工場の温水から生まれるらしい。

〝困ったことだな……また冷却装置の部品が盗まれたようだ〟と、市内ただ一つの工場の持ち主が、心のなかでつぶやいた。

「……まあ、今夜はありがたいか」

霧のおかげもあって、二つの人影は建物の内部にはすんなり入ることができた。

ザ・タワーは数えると45階建てであるが、造りかけのホールのエレベーターはどれも40階までしか数字がない。さて、どうすればいいのか？

〝機械室へいってみよう〟小柄な影が誘って、17階のメインルームを指したそのとき、

——隠れろ、夜警だ！

積んであるパネルや資材のあいだに、あわててすべりこむ。どうやらたった一人らしい。もちろん警戒もしていない……片手にライトを持って足元を照らしながら、ただゆっくりとホールの見回りに入ってきた。

——よかった。何も気づいていない。

気づかれてはならない。スコルピオンのアジトに押し入るのとは、わけが違う。

今夜の侵入は、まだ誰にも知られてはならないのだ。

〝ジッとしていれば、やりすごせるね〟

……アルディーンがホッとしたとき、横でナイトハンドがわずかに身動きし、息を長くはいた。なぜか新しい血の匂いがする。

――ナイトハンド……？

――しまった、足を切った。

無理やり身体をねじこんだときに、暗闇で気づかなかったアルミ板がその膝上を切っていた。カミソリより鋭くなっていたアルミニウムの断面である、特殊な防護ウェアでなければスッパリ足が切り落とされていたのだろうが……。

痛みを無視することには慣れていたが、出血の多さが気になった。

不自由な姿勢のまま、ナイトハンドがソッと傷の深さをたしかめようとしている。たいした傷じゃない……夜警がいってしまったら血をとめて、それで大丈夫のようだ。

急にアルディーンの手が、こちらの腕をギュッとつかむのを感じた。

――ナイトハンド、血が!!

傷口からしたたる血が、脚を伝い……床に細い流れをつくって、あろうことか夜警の通路へと向かっていた。思わず、ギリギリとくちびるをかむ。

丸い光の輪をゆらしながら、一歩ずつ夜警が近づいてくる。

ナイトハンドは無理に力をこめて傷を押さえつけているが、かえって血はあふれるばかりだ。

極細の赤い流れは、裏切り者の小蛇のように彼らの居場所を教えようと走っていく。
どちらかが身体のバランスをくずしそうになった……パネルがミシッという音をたてる。
「……誰かいるのか？」
夜警が瞬間、立ちどまってあたりを見回したとき、アルディーンは決断した。
――もういけない、こうなったら……。
次にあの男が視線を前方に戻したとき、ライトはかならずナイトハンドの流した血に当たってしまう。きっとほかに方法はない！
しなやかな動作で少年は姿勢を低くし、ナイトハンドは自分のすぐかたわらから、ただ一瞬、異様な妖気が発せられるのを感じた。
「やれやれ、気のせいだな……」
……夜警の男はやがて通路にライトを戻すと独り言のようにつぶやき、なにごともなくホールを出ていった。
「フウ……あぶないところだった」
しばらくして、ようやく隠れ場所を出るとナイトハンドが汗をぬぐった。
――それにしても今、いったい何があった？
絶対、あの男は気づいてしまうと思ったのだが……信じられない、なにげなく床に目をやった彼がギョッとして立ちすくむ。

〝な……ないッ！〟

そんなバカな！　大理石の床は真っ白で、シミ一つなかった。カップ一杯ほどの血だまりがあったはずの場所にも……。

後ろで小さなせきばらいが聞こえた。

「だって、しかたないだろう？　あのままじゃ、僕ら絶対に見つかっていたんだから……」

そう言うゴーグルの陰の瞳がいつになく赤くキラキラと輝き、声音に1グラムほどのうしろめたさが感じられた。ミルクのぬすみ飲みをした子猫……ナイトハンドが変に抑えた声でたしかめる。

「お前が……やったのか？」

涼がおとなしくうなずいて、証拠のしるしにまだパネルに残っていた小さい血痕に指先をふれた。まるで水が蒸発するように血があとかたもなく消えていった。

――闇の皇子と一体になっている彼にとって、血の匂いほど甘いものはない。

〝どんなに甘く、温かいことだろうか？〟

心の半分に妖魔の感覚、妖魔の好みを持っている少年は、もし許されるものなら温かい人の血を浴びるほど飲んでみたかった。〝どんなにこころよい味がすることか！〟。

だが、許されるなら……の話だ。アルディーンに憑かれた彼が、死よりも激しく自分に課した禁忌の一番は、その欲望から身を守ることである。

高い精神力と、純粋な愛情深さがこれまでしっかりと涼を守ってきた。

だが、一度でも血の誘惑に負けたが最後……誰かの喉もとからあふれる血をすすったら最後、〝僕は過去のアルディーンの宿主と同じ、怪物になる〟。

一度、コントロールを離れた闇の皇子の妖力は、僕の記憶も人間らしさもすべて奪って荒れ狂うだろう。だからけっして、血のために人を傷つけてはいけない！

〝どんなに欲しくても!!〟

この誓いを涼は、いついかなるときもかたく守り、これからも守るだろう……。

――だがすでに流れてしまった血については、話がちょっとだけ違ってもいいとは思えないか？

いや……もちろん涼はそれも厳しく禁じてはいた。一度が二度になり、たびたびになれば何が起こるかおそろしい。

けれど、ほうっておいても誰にもかえりみられないものではあるのだ。本能と偶然。涼がたまたまどこかで、その味を知っていたとしても責めるのは気の毒である。

「……もちろん二度としないし、今までもしなかったよ。本当だよ、ナイトハンド。僕だってよくわかっているし、それにお行儀が悪いものねえ……？」

最後のセリフが逆に相手の背筋に水をあびせかけた。

暗闇をさいわいに、ナイトハンドがかなり顔を青くしている。この顔色をアルディーンに

は見せたくない。しかし、血の気が引くのは、しばらくどうしようもないようだ。

あのとき……隣から立ちのぼってきた妖気は、彼でさえうめき声をこらえなければならないほどの凄さだった。

この子供がもはや半分は人でないと知ってはいた。だが、ふだんまるで無邪気な澄みきった瞳をしている者が、時折妖魔の性を見せつける……。

さすがに全身が総毛立つ思いがするのだ。

「どうしたの、ナイトハンド？　急に暗闇が怖くなったのかい？」

前方からすずやかなボーイソプラノが聞こえる。

「……バカをいえ、私を誰だと思う？」

仮面の下で奇怪な笑顔が、やっと浮かべられた。魔の都市、ネオ・ナリタ。この街を知った人間だけが、この笑い方を習うのだ。

――わかっているはずじゃないか？　そうとも、この街はこういうところだ！

手早く脚の傷をしばりおえたナイトハンドが、立ちあがってあとを追いかけた……。

17階もまた、工事中のようすだった。

メインルームの机の上には、まだここの設計図がいく枚か広げてある。

ナルダンのオフィスがある最上階に上がるためには、どうしたらいいのだろう？　広げっぱなしの設計図から、闇の皇子が答えを読みとった。

「なるほどね！　どのエレベーターも45階までいけるのか……ただ、そのためには専用のキーかパスワードがいるんだ。これは大丈夫、僕にまかせてよ！」

そう言うと、いそいそとコンピューターボードの前に座り、すばやい指先でキーをたたきはじめた。

――アカデミアの技量を見せてあげる！

〝ならばお手並み拝見としようか〟二重、三重のガードプログラムが、あざやかに解除される。半時間後にアルディーンの頬には、えくぼが浮かんだ。

5ケタの数字が目の前のスクリーンに並ぶ。

「これがパスワードか？」

「たぶん」

試してみなければ、わからないけど……さっそくエレベーターの一つ、操作ボタンの下に小さくあるパネルに入力すると、見事に作動した。

45階、無人のオフィスでエレベーターの扉が開いた。

軽やかな電子音とともに扉が開く……すでに完成された豪奢な部屋である。

広い大きなデスクを中心にした一角と、来客用のモダンなセット。オフィスに絵は一枚も

ない……壁の一面がガラスになっていて、ネオ・ナリタの夜景が一望に見わたせるのだ。
それがこの部屋の唯一の大パノラマで、二つとはないものだった。
〝力はこう使うものだ！〟
見せつけられるような思いで、涼がさすがに目を見はる。
ナイトハンドのほうが、こうした部屋には慣れていた。さっさとナルダンのデスクのそばにいくと、注意深く調べはじめる。
たしかに公園の設計図があった。旧市街の現状もそうとう調査していた……荒れはてた古いビルや、勝手に住みついた人々の写真が何冊もファイルに残っている。
横からのぞきこむ涼の目が、ふと卓上の機械にとまった。
「これは何かな？」
「記録用のレコーダーだな。よく使われている」
契約や会議のときなど、記録をとるために録音で残すことがある。操作して巻き戻すとナルダンの声が入っていた。側近の秘書へ指示をあたえている。
〝フェスティバルの計画は十分に練ってくれ！　一つでも手落ちがあってはならん、我々のネオ・ナリタ復興計画はそこから始まるのだ。
この街こそ長年の夢をはたすのに最適だ。今は最悪の犯罪都市だが、二つの汚点をとり除けば可能性は十分にある。憎いのはまず、あの旧市街の環境と治安の悪さ、そして……〟

ここで例の電子音がテープに入ってきた。エレベーターの扉の音、来客があったのだろう。

男の声と、それに答えたナルダンの声を最後にテープは終わっていた。

〝やあ君か……よく来てくれた、報告かね？〟

その声にかすかな間の悪さが感じられたのは、気のせいだったか？

――この客は何者かな……いずれにせよ、これだけでは何も浮かばない。

テープをもとの位置まで直すと、ナイトハンドが嘆息した。

薄暗い室内で、もうかなりの時間ねばっていたが、彼が求める種類の情報は何も見つからない。企業スパイになった気がしてきた。

「とりあえず……このへんの書類でも記録していく？」

アルディーンがそう言ってポケットからカメラを取りだした。

ますます嫌がるナイトハンドにかまわず、一度フラッシュをたいたとき……。

目の前の壁の一部が、大きくスライドした。

「……光センサーだ！」

驚いて顔を見合わせたが、すぐに仕掛けはわかった。壁のパネルの一枚が、隣に続く隠し扉になっていて、三つそろったライトの〝ある一つだけ〟をつけると、センサーがはたらいて開く仕掛けだ。

今のフラッシュがそれに当たってしまったのだろう。いずれにせよ、隠し部屋とは気がつかなかった、うかつだ。

小部屋に踏みこんで見ると、驚くべきものが彼らを待っていた。

見事に精巧な、模型のネオ・ナリタである。

「これは……まるでおとぎ話だな」

「でもきれいだ」

涼がうれしげに見とれている。整った街路、美しい町並みは理想の姿だ。憩いと近代性を十分に計算している。ネオ・ナリタ復興計画か……やっとその意味がわかったように思った。

この模型の姿ではザ・タワーは一つではない。ちょうど対になる街はずれに、いつかもう一つのビルが建てられるらしい……二つの塔をつなぐ中心に、緑豊かな公園が広がっていた。

——生涯最後の夢か……。

これならば、と涼はうなずいた。たとえ何年かかっても、街をこの姿にしたいと思うはずだ。長い長い時間がかかっても、やってみる価値はある！

「バカらしい、100年はかかるぞ」

あぜんとして部屋を出たナイトハンドはつぶやいたが、闇の皇子はにっこりと笑い、

「その手はじめに彼は、旧市街に公園をつくろうとしていたんだ……すべてはそこから始まると言っていたじゃないか」

——納得だね？

ナイトハンドは苦笑して肩をすくめた。どうやら今回は自分の猜疑心が強すぎたか……。

だが無事に建物を抜けだし、すこし離れた場所での別れぎわ、ザ・タワーを振りかえった涼の胸に一度だけ、かすかな警報が鳴った。

あの美しい都市の模型は、ナルダン個人のオフィスのさらに隠し部屋の中にあった。

堂々と誰の目にも見える場所に飾っておけばいいではないか？

——たとえばホールとか。

なぜ隠し扉の後ろにあったのだろうか……どうして？　鈴のように、チリンと警告が鳴る。だが警告の鈴はすぐに記憶のすきまに落ちて消えたようだ。

美しい未来都市のほうがずっとあざやかな幻を残した。

アルディーンはすぐに忘れてしまった……。

次の日である。

お昼のヤマ場をすぎて、赤鍋亭のマスターは在庫を確認していた。

「おや、ケチャップが切れた。涼ちゃん、すまないけど」
「ハーイ、マスター」
おつかいのカゴをかかえて飛びだす涼……こみいった旧市街の街路も、もうよくわかっていた。いつもの店の前まできたとき、突然目の前に窓ガラスの黒い高級車が現れた。
オートマティックのドアが開くと、花のような美女がほほえんで言った。
「こんにちは、あなた。さあお乗りなさいな」
〝威……梨花!!〟涼はそくざに数歩あとずさって、ノーのサインを出した。
梨花は膝においた封筒から写真を取りだすと、
「それならこの写真は、いいかしら？　あなたの夜の顔と昼の顔……」
〝待ってくださいッ〟瞬間、脱兎のごとく少年が車内に飛びこむ。すかさずドアが閉まり、車は走りだしてしまった……。
「会いたかったわ、アルディーン」
今日は、髪を肩にゆるやかに流している。警戒で目を皿のようにしている涼に、あでやかな流し目をくれ、
「ひどいわ、忘れてしまったのかしら？　私よ……あなたの梨花よ」
「いッ……いつ、誰がそんなことを言いましたッ!?」
本日は雪豹の毛皮がついた白のドレスを身にまとっている。深くあいた胸には、ネオ・

ナリタがそっくり買えるようなダイヤモンドのブローチを無造作につけていた。
たくみに手をのばして頬にサッとふれ、〝まあ昼はあたたかいのね〟とニッコリした。
涼は、つとめて冷静にふるまおうとした。
「なぜ僕のいる場所がわかりましたか？」
威梨花は、いたずらっ子のようなはずんだ声をあげて、
「街で、この写真の顔だけ見せて聞いたのよ！　わけないわ、みんな知っているんですものね。ホホホ、赤鍋亭の涼ちゃんですって……？」
コロコロといつまでも笑っている。
涼はとにかく逃げ道をさがす気で、後ろ手にソッと手をのばすと、自分の側のドアを開けようとした。だが、
——アッ……開かない⁉
「そのドアは前でロックしてあるから、もう開けられないわ。そうよね、ショーン？」
梨花が運転席に声をかけると、
「はい、奥さま」
しっかりとロックいたしました……それを聞いて思わず泣き声になった涼が、
——どうして僕につきまとうんですかッ⁉
「こんなことをして、どうする気ですッ？　僕にいったい、何が目的なんですか⁉」

美女がにこやかに両手をとって、
「もちろん愛するためだわ。アルディーン、あなたに梨花の旦那様になってもらいたいのよ！」
〝あなた今、なんとおっしゃいました!?〟
うわずった声でなにやら口走っている涼に、彼女は落ちつきはらった態度で、前の席の運転手を紹介した。
「私の一番の部下、ショーン・小杉よ。とても役に立つ男だわ……」
大陸的容貌の男が、振りむかないままで軽く礼をした。
どちらかといえば美貌を基準に選んでいる梨花の部下の中で、彼だけはやや違っている。つまり顔ではなく能力で選ばれたのだから。もちろん空手と投げナイフの達人であり、女頭目には絶対の忠誠を誓っていた。
「……これからはあなたも主同然になるのだから、なんでも言ってやってちょうだい」
「おろしてください、おろしてください、おろしてください……」
〝そればかりは千回言っても無駄だわね〟梨花が桜色の爪をすかしながら、無情につぶやいた。
「残念ですが、梨花！　そんなことを言っても僕はだまされませんよ！」
〝ちゃんと知っているんだぞ！〟の目で、キッとばかりに美女を見すえて、

「あ……あなたはいままでに、たくさんの男性をそうして誘惑しておいて、一時は恋人でも、飽きたら自分の客に売りとばしてしまうそうじゃありませんかッ」

――ナイトハンドね、ちッくしょう……。

梨花はそくざに情報の出所を見ぬいていた。

あいつはきっと念には念を入れて、自分の悪口を吹きこんだに違いない……長いまつげをとじて彼女は天に祈った。

〝あの犬めが今日のうちにも、恐ろしい病にかかって悶え死にしますように……〟

噂がぜんぶ本当なのは、とりあえず問題ではない。人の恋路を邪魔する奴が憎い。

女はすぐに目を開けると、闇の皇子をひたと見つめて、

「あなたにならそんなこと、けっしてしやしないわ！　本当よ、あなたは特別な人なの……」

あの運命の夜、窓の外にいるこの少年を、ひと目見てから恋の虜になった。

素顔を知ったときの驚きを忘れることはできない。

胸が痛いほどときめいて、涙があふれてしまった……はじめて生涯の伴侶とすべき男に会えたと思った。

「愛しているのよ、アルディーン。こんな気持ちは生まれてはじめて……あなたが私の運命の相手だわ！」

――そんな……だってあなたはこれまで何回か結婚だってしているのに!!
葉子光とか、海賊の狼大とか……すっかり忘れていた顔つきで梨花は瞳を上にあげ、
「……葉子光はよい人だったけど、恵まれすぎて野生味に欠けていたのね。狼大は男らしかったけれど、私とは40も年齢が離れていたのよ。ええ、それなりに嫌いではなかったわ、でもどこかときめかなかったの」
――みんな私の本当の夫とは言えなかったわ……。
すこし懐かしむような目をしていた梨花夫人は、すぐ生き生きした笑顔を薔薇のようなくちびるに浮かべて、
「ずっと長いこと探していたわ。死ぬまで愛しあえる旦那様！　やっぱり女には、よい夫が必要なのよね。強くて美しくて、苦しいほどのときめきのあるお方。世界のどこかにいるとは思っていたわ……そしてとうとう見つけたのよ、このネオ・ナリタで!!」
「違いまーす!!　カンベンしてくださーい！」
情けない声であとずさる涼に、彼女はさらに念を押した。
「それにね、いままでのほかの人たちだって、梨花が無理やり売ったのじゃなくってよ」
みんな正直にどうなるのか教えてあげたし、きちんと自分で選ばせてあげた。
〝ごめんなさい、もう愛していないの。だからもう一緒にはいられないけど……〟
このまま自分と別れて、二度と会うこともない自由の身になるのがいいか、それとも梨花

の得意先に売られて、ときたまでもアフターケアにたずねてもらえるのがいいか。
「みんな進んで梨花にもうけさせてくれたわ……」
——変だぞ、ひどく疲れたぞ……。
急に気力をなくしたような涼の肩を優しく抱きよせると、
「でも、そんなこともう関係ないのよね？　だってあなたは私の大切な旦那様になるのですもの。もう梨花はほかの誰も欲しくないわ、本当に……夫とまでしたいと思ったのはあなたがはじめてなのだから」
——だから愛してちょうだいね？
雪豹のショールをスルリと肩から落とした梨花が、間近に迫ってくる。妖花とまで言われた美女が一世一代の熱意で寄ってくるのだ。
「……あら、どうして泣いているの？」
返事もせずにメソメソ首を振りつづけている。自分でも情けないが、とまらないのだ。
——おねがい、だらしない奴だと嫌いになってください!!
燃えるような願いもむなしかった。
「かわいい人ね、ますます好きになったわ」
……しゃくりあげる声は、いっそう激しくなったようだ。
ふと、梨花夫人の手が離れたので顔を上げた。

彼女は白い手で座席の小物入れを開け、茶道具と銀の小箱をとりだした。
優雅な手つきでジャスミン茶をいれると、自分でもひと口すすってから、アルディーンにすすめた。
「いかが？　ほら、キャンディーもおいしいわ」
小箱にチョコレートボンボンが並んでいる。一方の手で涙をぬぐいながら、涼がおそるおそる手をのばして受けとった。
「旦那様はまだキャンディーがお好きなのね？」
微笑む梨花の顔が急にぼやけて見える。
――あれ？　なんだか……。
ふいに身体が重く感じた、と思ったとたん、彼は梨花の膝に倒れこんでいた。
「梨花夫人……これは、いったい……？」
〝ごめんなさいね、アルディーン。それにはお薬が入っていたの〟
優しく髪をなではじめた手を振りはらおうとするが、まるで鉛のように重い。飛びおきようとしても、身体がドンドン重くなって沈んでしまいそうだ……。
「でもぜんぜん苦しくはないでしょう？」
――本当だ、すごく気持ちがいい……。
甘くけだるいような感覚が、波のようにひろがっていく。

指先まで暖かくて、このまま眠りこみたくなるほど……耳のそばで梨花の声が聞こえた。
「許してちょうだい、アルディーン。やっと見つけた愛しい人。梨花はここであなたを逃がすような、まぬけな女じゃなくってよ」
〝誓ってよ、梨花は死ぬまでつくすから……〟
あと一個、薬入りのボンボンを口移しで与えようとするのを感じて、闇の皇子の瞳の色が変わった。血のような赤さでカッと見開かれたかと思うと、アルディーンの力が表に出る。いきなり腕の中でたつまきが起こったような衝撃を感じて、梨花がアッと叫んだ。
ドレスと毛皮がズタズタになって舞い散る。
突風のようなもの凄い力が、自動車の扉を内側から吹きとばして開けてしまった。
「アルディーン!!」
夫人がとっさに手をのばしてつかまえようとしたが、涼はかまわずに身体を丸くして、走っている車内から表へ飛びだしていった……。
「なんだ、どうした？　子供のひき逃げか!?」
急ブレーキの音を聞いて、近くのビルから住人が顔を出した。
車は鋭いターンを切ってから、フルスピードで走り去る。
旧市街を離れてから、運転席の男が低い声で主にわびを言った。
「申し訳ありません、とっさに対応できませんでした……」

梨花は美しい目を光らせて、くちびるをかむと、
「ぬかったわ……まさか昼間からあの力が出ようとは」
〝でも、ショーン。お前のせいではないわよ〟それからやぶれてしまったドレスを優雅にかきよせると、微笑んで部下に命令した。
今日の狩りは、もうおしまい。獲物は逃がしてしまったけれど、それなりに収穫はあったと思う。ほっそりした少年の身体に、やはり恐るべき魔界の力を秘めていた……強くて美しく、そして愛すべき純情な未来の旦那様。
妖しげな満足の笑みを浮かべて梨花は言った。
「帰るわ、屋敷へやってちょうだい」

「涼ッ……あんたいったいどうしたの⁉」
赤鍋亭ではカウンターの真夜子が、大声で叫んでこっちに飛んできた。
何時間もおつかいから戻らない涼を心配して、マスターが仕事場から呼んできたのだ。
「マスター……すみません、遅くなってしまって」
〝ケチャップ一本にどこまでいったのよ‼〟怒鳴ろうとした真夜子が、ただごとならぬようすに気づいて黙りこんだ。

「……あんた、大丈夫？　泥だらけじゃないの？」
泥だらけで、しかもロウのような顔色をして全身がふるえている。
ケチャップのビンもなぜか持っていない。
「僕？　ああ、僕すこし具合が悪いんだ……」
車から投げだされたあと、そうとうな時間がたつのに身体がだるくゴムのようで、身動きができなかった。
しかたなく涼は胃の中のものを無理やりすべて吐きだそうとした。
さんざん苦しい思いをしたあとで、ほとんど這うようにしてこの店まで戻ってきたのだ。
真夜子の顔を見た瞬間、涼は安心してもう立っていられなくなってしまった。
「キャアッ、涼!?」
「涼ちゃん!?」
真夜子とマスターが同時に叫んで駆けより、おおあわてで彼を奥のベンチに寝かせた。
「涼……涼……どうしたのよ、あんたってば？」
冷たいタオルで顔をぬぐいながら、心配のあまり何度も真夜子が問いただす。
まだ薬が残ってボンヤリしている涼の返事は、夢と現実がゴッチャになって混ざっていた。
とにかくすごく怖かったらしい、何度もくりかえしてそう言った。

――真夜子……真夜子、怖かったァ。
「しっかりしなさいよ、涼ッ。あんた病気なの？　熱がある？」
「違う……あのお菓子のせい」
――お菓子!?　誰かにもらったの？
「……きれいな女の人」
真夜子の目がなぜかキラリと光った。
「……でも吐いたからもう大丈夫。よかった、ここに帰ってこれて」
そう言うと、涼はとうとう目を閉じてグッタリしてしまった。マスターが首をかしげて、
「昔、悪い奴がいてさァ……小さい子に悪い菓子をやっていたんだよね」
チョコレートにカミソリをしこんで子供にくばっていた男の事件が、だいぶ前に旧市街で起きていた。あのとき、犯人はさすがにリンチにあったものだ。
「もっとも、狙われたのは五つ、六つの子供ばかりだったけどねェ」
真夜子の目が、虎のように光った。
「ううん、マスター……こいつったら、精神年齢せいぜいそのくらいよ！　見ればすぐばれちゃうわ、〝僕、トロいんです〟って顔に書いてあるものッ……ひどい奴、なんてことするのかしら!?　悪くなったケーキかなにか、遊び半分こいつにやったのね？」
親切らしい顔をされれば、涼ならすぐにこにこ顔で受けとってしまうだろう。

そんなひどい女がこの世にいるとは信じられない。しかも、

——きれいな、ですって⁉　フン、なにさッ！

なにさ、こいつもこいつだわ！　〝真夜ちゃん、よしなよ〟と、マスターがとめるのも聞かず、真夜子は涼の肩をつかんでグイグイ揺さぶった。

「バカッ、世の中いい人ばかりじゃないって何度言ったらわかるのよ⁉　今度やったら見捨てっからねッ……いい、涼？　二度と知らない人から食べ物をもらっちゃダメよ！　落ちているものがおいしそうでも、口に入れちゃダメなのよッ」

聞いているのか、こらッ……ひどい手で揺さぶられながら、涼は必死に耐えていた。

——なんてことだ。ナイトハンドが言ってたことは、みんな本当だった……。

梨花夫人はただごとでない。男殺しの魔界の使者……しかも問題はさらに深刻だ。

手段を選ばぬ彼女の次のターゲットは、どうやら間違いなくこの僕だ！

どうしよう……考えると、また涙が出そうだ。

——あんな人がまた来たら、僕きっと死んじゃうよ！

……ところで、ザ・タワーの最上階でアルディーンとナイトハンドが聞いたテープの終わりに、ナルダンのオフィスへ入ってきた人物は誰だったのだろう？

――それはファレルという名の男であった。
ナリタ署もナイトハンドたちも知らなかったが、じつはその午後、タワーが見下ろす旧市街の一角のビルでは、あやしい会合が開かれていた。
いずれも各都市シンジケートの大物であり、いずれもこの街、ネオ・ナリタを狙っている。
招待主の若い男――金髪に非情な目をしている――が、立ちあがった。
「お集まりのみなさま、私はファレル。専門は麻薬の製造と販売……現代の錬金術師とお考えください」
その名は知っている者も、いない者もいた。
ファレルか……誰かがあざけるようにその名をくりかえした。敵意が部屋に満ちている。
「お集まりいただいたのはほかでもありません。私はあなた方と同じく、この新しい街をほしがる者。そして失礼ながら私に、この街の権利を主張することをお許し願いたいのです……」
〝バカをいうな!!〟同時に数か所から声があがった。
「青二才めッ、どうして新参者の貴様にくれてやらねばならない？　我々は現在、組織をあげてこの街をおとそうとしているのだぞ！」
「だが、それはたやすい仕事ではありませんね？」

激怒しているマフィアの男に、落ちつきはらったようすでファレルが答えた。知らず知らず、その場の全員がうなずいていた……ネオ・ナリタ制圧は簡単にはいかない。

ようやくにして最近気づきはじめていた。

「まず警察組織が意外に雑でないな。若い命知らずが多いし、いったん銃撃戦になるとやたらに手ごわい」

シカゴのブラザースの使者ロイコが口を切った。黒い髪をピッタリとなでつけた男だ。

「七賢人とやらのおかげで、すっかり鍛えられているらしい……ハハハ」

――その七賢人を倒した黒衣の二人組が、問題なのだ。

闇の皇子……ナイトハンド、もうおなじみになってしまった名前をいらだたしげに一人がつぶやいた。

「正直に言うが、私はもう手を引くつもりだ。魅力的な街だがリスクが多すぎる。これ以上、金と部下をつぎこむわけにはいかないのでね。あとは……まあ好きにしてくれ」

ロイコの目がキラリと光ったようだ。〝ライバルが一人消えた〟

同じように喜んだらしいのが、アイヒマンなる壮年の男であった。優秀な殺し屋を多数抱えている彼は、ゆっくりと考えながらつぶやいた。

「ナイトハンドというほうは、調べるとつねにネオ・ナリタにいるというわけでもないらしい。香港での噂も聞いたことがある……とすれば、またいつか消えてくれる可能性もあるの

だな？　それにとにかく奴は人間だ。それならばやはり問題は……」
「そのとおり、問題は闇の皇子なのです」
ファレルが軽く手を打って、注目を集めなおした。
ネオ・ナリタの妖力〝闇の皇子〟それは彼らにとって、これまでに見たことのないタイプの敵であった。
正直なところナイトハンドは異常に手ごわい。だが、復讐のために組織にいどむ者なら以前にも何人か現れている。年かさの組織の男たちには、それぞれ過去に似たケースの記憶があった。
ナイトハンドほど強く手ごわく、冷酷無比の者はさすがになかったが、それでも過去の例からいけば、いずれは何か人間ゆえの弱点を見せ、自滅してくれるはずだ……。
「だが、あのアルディーンというのはわけがわからない。力だけではないぞ。あの姿はどう見てもまだ子供だが、こちらの手の内をアッという間に読んでしまう。あいつは何だ？」
撃とうが刺そうが本当に効かないのだと、みなにも十分にわかっていた。
「アイヒマン……あんたの配下にも、あれを殺す方法はないのか？」
〝いやいや、殺すことはまったく解決にはなりませんよ〟ファレルの声がひびいた。
「……よく考えてみてください。〝闇の皇子〟というのは本来、この街の超常現象の名前なのです。ナリタ署の記録にもたしかに残っています。7年、あるいは17年ごとに〝闇の皇

子〟と呼ばれる何かが、この街の人間の誰かを選んでとり憑くのです。

とり憑かれた人間は一種の超能力の持ち主となり、不死身に近い身体となります。ただ、これまでの宿主は例外なく発狂して、人としては使いものにならなくなってしまったようですが……どうも今度のアルディーンには、非常にけたはずれの精神力があったらしい」

それがどうした？　シカゴのロイコが机をたたいて怒鳴った。そんなことはすでに知っている話だ。

「昔の連中などどうでもかまわないんだ。問題は今、アルディーンとしてうろついている奴だろうがよッ！　あいつを殺さなければ、この街はどうにもできねえ!!」

「わかっていただけないようですね、ミスター・ロイコ。現在、我々が見ている闇の皇子は正確に言えば〝闇の皇子の宿主〟なのです。彼を殺すとしましょうか？　アイヒマン氏の特別に強力な武器ならば可能かもしれませんが、その後はどうなります？

アルディーンの今回の宿主は消えます。しかし、パワーそのものはどうしようもないのですよ。力は解放され、とりあえずは旧市街の空間に戻ります。しかし7年後、または17年後には蘇ってくる。そのときに、もし今と同じ性格を保持していたとしたら？」

現在の宿主は異例に能力が強く、異例に長くアルディーンと合体しているのだ。

「なにもかも、前例ではかれないことばかりなのです！　復活する時期も1年後かもしれない。あるいはたった半年かもしれない……」

はじめて部屋の男たちの顔が青ざめた。
「そ……それじゃ、まるで堂々めぐりじゃないか」
そういうことになりますね……ファレルが言った。そして黙りこんでいる人々の顔を、わざと一人一人見まわすようにしながら、
「いかがでしょう、みなさん。ここまでの話の要点はおわかりいただけたかと思います。そこで、この私の提案はこうです。もし私にネオ・ナリタの妖魔を滅ぼす秘策があるとしたら？」
底光りする男たちの視線が集中した。
「……そのときは、私にこの街を支配する権利があるとは思いませんか？」
激怒のあまり数人が声をあげた。いずれまた、お会いしましょう……そう言ってファレルはすばやく席を立っていった。
そして数時間後、ファレルはナルダンのオフィスに報告に現れたのだ。
ナルダンは秘書にテープをとらせている最中だった。
「やあ、ファレル、君か……よく来てくれた、報告かね？」
「ええ、会合が終わりました」
若い金髪の男は、冷酷な笑顔で話しはじめる。
愛想よくうなずくナルダンは、内心眉をひそめていた。この男が断りもなく、この階まで

上がってくるのをやめさせねばならない。

——この計画の最後には、殺してしまわねばならない男だ。筋書きのすべてを知られるのはまずい、避けなければ……。

そう考えつつ、ナルダンは相手に微笑みかけた。

「さて、それではいよいよ君に、約束のサンプルを見せるときだな」

そう言ってポケットから、薄いケースを取りだしてふたをはじいた。

ファレルの目が一瞬食いいるように中身に見入った。うす青いカプセルの列なのだ。

「見たまえ……恐ろしいながめだな。これがいわゆる最強の麻薬〝ケミカル・ブルー〟だ。いかなる都市国家も一撃で破壊できる……どこであれ腐敗した、この旧市街のようなありさまにしてしまうだろう」

「私にとって重要なのは、これが大金を生んでくれることです。違いますか、ミスター・ナルダン？」

貪欲な光を目に浮かべたファレルが言うと、ナルダンは親しげにその肩をたたいた。

「君はじつに賢い男だよ、ファレル君！」

いかなる敵にも弱点はある。ナルダンのネオ・ナリタ復興計画にとって、アルディーンはあってはならない邪魔な存在だった。

けたはずれの能力の上に、なまじな罠にはかかりそうもない賢さがあるらしい。だが、

――だが、彼はどうやら悪に対して激しい反応をするようだ。

それなら、このファレルのような男がオトリにふさわしい……。

「ナサニエル・ゴードンにはなんとか近づいたから、あとは早く君があの妖魔を始末する番だ、そうすれば私も君の能力を完全に信頼できるからね」

「ええ、罠の専門家がようやく見つかりました。おっしゃるとおりのものができるでしょう」

ファレルは得意げに笑った。

「ついでにゴードンの工場の内部を少々荒らしておきましょうか？」

忠義面をするファレルの言葉に、手を振りかけてフト気がかわったらしい。

――それもいいだろう、やらせておくか。

この男ならばさぞ卑劣な手を使うことだろう。アルディーンが思わず我を忘れるほどの悲劇が起きればいい……ナルダンははじめて本心からうれしそうな笑顔を浮かべた。

「そう……君ならきっと満足すべき結果を出してくれるだろうね」

第三章　錬金術師ファレル

さて、休日のネオ・ナリタ……赤鍋亭もお休みのある日、涼はマスターにオーブンを貸してもらい、真夜子にせがまれてクッキーを焼いていた。

材料は二人でお金を集めて買った。ナッツにチョコレート。

「まだ、涼？　ねえ、まだ焼けない？」

「まーだまだ」

カウンターで足をブラブラさせていた真夜子が、待ちきれなくなって椅子から飛びおりた。今日は彼女も、『ナリタ日報』をお休みの日だ。

「うん、もう！　ノロいわねェ！」

明るい目をした少女はすねたようにポニーテールを振って、また椅子にかけなおした。さっきまでやっていた原稿の仕事を続けようとするが、気が散って手につかないらしい。

――だって、涼の焼いたクッキーはおいしいんだもの!!

ゾクゾクしちゃう。そろそろオーブンから甘いかおりがただよってきた……エンピツをガ

シガシかんでいる真夜子を、涼が笑いながら見ている。やせっぽちで赤毛で、負けん気一番なこの少女が、世界の誰よりも大好きだった。

さりげなく近よって肩ごしにのぞきこむ……。

「見せてよ、真夜子！　何の記事を書いているの？」

「これ？　例のフェスティバルの記事よ」

ナルダンが作ろうとしている公園の施工式の話は、旧市街でもそろそろ噂になりはじめていた。仕事柄、真夜子は特に情報通である。

「なんかね、花火や一日だけの遊園地もやるって話よ……本物のメリーゴーラウンドも来るんですって、知ってた？」

涼の瞳がキラリと光った。もちろん知っていたのだ。そればかりではない、

――本当は、その次のこともすこし知っているんだよ！　ザ・タワーの上で見たんだ！

あの美しいネオ・ナリタを、真夜子にも教えてやりたかった。〝あのタワーがいつかは対になる計画だと知っていた？〟

だが真夜子は何も知らぬまま、ひじをついた姿勢でつぶやくように、

「……あたしねえ、昔、一度だけオーエンに連れられてメリーゴーラウンドに乗ったことがあるのよ。もう10年も前の話」

「オーエンに？」

真夜子はこっくりとうなずいた。旧市街の捨て子だった彼女を育ててくれたのはオーエンという人物で、新聞記者だったそうだ。〝すごくいい人。読み書きも教えてくれたのよ〟だから長いこと真夜子の望みの第一番は、彼のような腕ききの記者になることだった。涼はこの人物をじかには知らない、だが思い出をよく聞かされたので、今ではなんだか自分も親しいような気持ちがしていた。

〝楽しかった？〟真夜子はただこっくりとうなずいた。

「そりゃそうよ、あのときは、オーエンが一緒だったもの……」

新聞記者オーエンは、はるか昔に死んでいる。取材中、流れ弾に当たって助からなかったのだ。だからもう二度と、メリーゴーラウンドに連れていってもらうことはなかった。

〝思いだすと、なんだかこのへんが変な気になるのね〟勝ち気な真夜子は、わざと歯をくいしばって横を向いた。

——そうね、今度のフェスティバルには、またメリーゴーラウンドがくるって。もし一人でいってそれを見たりしたら、あたし、ひょっとして泣いてたかもしれない……。

気がつくと、優しい手がソッと肩に置かれている。少女は暖かい自分の手を重ねて、元気よく揺すった。

「……でも今は、あんたがいるわ！」

居候の少年がうれしそうな笑顔ですりよる。ただしそれから一瞬後には、ハッと叫んで

オーブンの前に飛んでいった。
そして焼きあがったクッキーをオーブンから取りだす。のぞきこむ目がキラキラしている。二人とも、甘いものは大好きなのだ。
この大きいの、あたしがとりたいなァ……真夜子などは、一つでも多くとろうと夢中だ。
〝でも僕が作ったんだからね！〟だが、こういうとき負けるのは、たいがい涼のほうだ。
「ねえ、涼、あんたは優しいところがいい子だわね……？」
ずるい猫なで声を出したとき、足もとで小さい子供の声があがった。ギョッとして見おろすと、ジャンパーを着た六、七歳の男の子がいて、
「ヤア、こいつ……女のくせして男と殴りあいをする山猫女だ!!」
〝なんだと、わりゃあ!?〟飛びあがった真夜子を、涼が後ろで必死に押さえつける。それを指さして、
「……それでこっちは男なのに腰ぬけのエプロンだぜ！」
スラムの小悪魔はゲラゲラ笑っている。
「君ねェ、どこの子？　どうしてきたの？」
涼がしかたなくかがんでたずねると、〝腰ぬけに教えるかい！〟という返事が返ってきた。
「何よ、こいつ！　オーブンで焼いちゃうわよッ」
〝よせやい、ニセ女!!〟カンカンに怒った真夜子がつかみかかっていくと、いさましくすね

を蹴りあげた。すかさず、真夜子の手がそいつの耳を捕らえてひねりあげる……。
「……ウィリー、ここにいたのか！」
振りかえった真夜子の目が驚きで丸くなった。
「ネフ・ブラウン……さん!!」
この前、街角で助けてくれた、ゴードンズ・ガードのリーダーだった。
「どうも申し訳ない、ちょっと目を離したらとたんに……こら、悪い奴だ！」
〝いえ、そんな……かわいい坊や〟真夜子と涼が、ややひきつった感じで言う。
「さんざん探したんだぞ、いったいなぜ……」
ネフが聞いている。涼は小悪魔の視線が、しきりに並べてあるクッキーのほうへいくのに気づき、クスリと笑った。どうやら、甘い匂いに呼ばれてしまったらしい。
「弟さんですか？」
「ああ、そうだよ。そんなふうなものなんだ」
彼は、からまりつく暴れん坊を平気で肩に乗せて笑った。〝ネフはおれの兄ちゃんだ！そう決めたんだもんなッ〟上からふんぞりかえって叫んでいる。
本当の兄弟ではない、やはり拾われた子供だ。そしてじつはこれ一人でもなかった。
「いろいろな事情で親をなくした子供ばかりだよ。一緒に暮らしているんだ」
「まあ……」

と、真夜子がすこし優しくなった目で子供を見た。小悪魔はアカンベエをしてみせる。
「こら、ウィリー!!」
お行儀はどうしたんだ？　だが、相手はきかん気の顔で、
「いいんだい！　エプロンかけてるいくじなしと、みんな知ってる乱暴女じゃないか……そんなクッキーだって、くれてもべつに欲しくないやい!!」
――なーるほど、やっと本音が出たわね？
ハハーン、真夜子がようやくうなずいた。ネフ・ブラウンも困った顔で頭をかき、子供を下におろすと手をにぎって、〝今度、買ってやる。約束だから〟と言った。
「本当かい？　みんなにかい？」
ネフは複雑な表情をした。真夜子にもなんとなく理由はわかっている……この青年は工場では技術職だったが、それでも一人分の給料では楽はできまい。実際、小さい子ばかりだが、菓子などはめったにやれなかった。
〝おれたち、店で悪いことをしちゃいけないんだぜ！〟きかん坊なりに、それだけは堅く守っていたが、甘い焼きたての匂いには非常に弱くなる。のぞきこんだ赤鍋亭の中では涼たちがクッキーを数えていたわけだ。
真夜子はふと、昔のことを思いだした。
オーエンが死んだあと、彼女はまたたった一人でこの街に残されたのだ。毎日が生きるた

めの戦いだった。父親や母親のいる子供たちは、旧市街でも甘いお菓子を持っており、真夜子もどんなにか、それが欲しかった。

——うらやましかったわ、あたし……。

店先で盗んだり、盗んだお金で手にいれる子供も大勢いたが、潔癖な真夜子にはどうしてもできなかった。それでいて、キャンディーを持った子供が前を通ると、いつも大きい目が光るほど見つめずにはおられなかったものだ……。

「さッ、いくぞ。ウィリー」

ネフは苦笑しながら一礼して背中を向けた。手を引かれて店を出ていく子供に、真夜子が唐突に声をかけた。

「あんた、ちょっと待ちなさいよ……」

それから、後ろに手をのばしてクッキーの皿をとると、中身をぜんぶ袋にあけて子供に押しつけた。〝ホラッ、これ持っていきなさいよ！〟

子供ははじめ用心深くあとずさった。さんざん悪態をついたあとだ、ケンカ女がものをくれるはずがない。きっと、だますつもりだな？　目はもう釘づけなのだが、どうしても手は出せない。

「チェッ、いらないよ……あとで取りあげようっていうんだろう⁉」

バーカ、本当にやると思ったか……そう言って、笑いものにする気だな⁉

「バカね、そんなことしやしないわよ！　それより欲しいの、欲しくないの？」
目の前で誘うように袋を揺らしてやると、チビ助は泣きべそをかきだした。
「ウソだい！　ウソだ、ウソだあッ……」
くしゃくしゃの顔で、じだんだを踏んでわめいている。真夜子はニヤリと笑って、
「それならネフに渡すわ。ホラッ……これでどうよ？」
子供の目がパッと輝いた。すぐさまネフの手から、歓声をあげてお菓子をもらうと、
「すごいや、ネフ、ありがとう!!」
「おい、僕じゃなくて、あのお嬢さんにだろう？」
子供は威勢よく首を振って、〝あんな奴、お嬢さんじゃない！　ケンカ女だ!!〟と叫んだものだ。涙でベトベトになった頬はグイと片手でぬぐった。
はねまわりながら出ていったあとから、まだ元気な声が聞こえる……。
「じゃあいいや、あいつはお嬢さんにしてやるよ。これ、みんなで分けるんだもんなッ！　でもネフ、おいら大人になっても、絶対あんな情けない腰ぬけ野郎にはならないぜ！」
なかでは涼がお腹をかかえて笑っている。真夜子がコッソリ横目をつかって、
「ごめんね、涼……全部やっちゃったわ」
こいつが焼いたのに、勝手にやってしまった。もう材料もないし……怒っているかしら？
涼はこのうえなく優しい表情で、えくぼを浮かべて首を振った。

——いいんだ、そんな真夜子が大好きなんだから！

肩に手をまわして、ギュッと抱きついた。誰よりも、好きで好きでたまらない相手がここにいる……。

それから何日かたった夜……闇の皇子はネフ・ブラウンと再会した。

このところ旧市街には麻薬が出まわっていた。ナリタ署がやっきになって大もとをたたこうとするのだが、逃げ足の早い奴でなかなかしっぽをつかませない。

三日月警部からひそかに連絡を受けて、アルディーンがナリタ署に現れると……。

「ねえお願い！　今夜きっと何かあるでしょう⁉　すこしでいいから取材させて！」

表で刑事とやりあっている真夜子の姿を見つけてしまった。カメラをさげ、目をらんらんと輝かせている。

「頼むよ、帰ってくれよ！　何もないってば！」

フフンと少女は、鼻であざ笑った。どうしても秘密にする気ね？　それならいいわ！

〝ならいいわよ。さよなら！〟真夜子は急におとなしくなったようすで、クルリと背を向けていってしまった。涼は強烈にいぶかしんだ。

——ちょっと待った！　あんなにきれいにあきらめるはずはないぞ⁉

あわててあとをつけると、案の定建物の角を曲がったあたりで走りだした。駐車場に飛びこんで、まよわずパトカーのトランクにもぐりこもうとしたところを捕まえた。

「……記者さん、なにをしているのですか？」

「アルディーン!!」

振りむいた真夜子がドキマギと赤くなった。まさか、こんなところを見られるなんて！

黒衣の少年はゆっくりと微笑みを浮かべた。

「困った人ですね？　まさか、こっそりついてくるつもりだったとは！」

銃撃戦の真ん中にいくかもしれないナリタ署の車だ。あぶないとは思わないのだろうか？

〝だって特ダネになりそうな予感がしたんですもの……〟そういう真夜子の周囲に、脅すような突風が吹いた。思わずキャッと叫ぶと、厳しい声が言った。

「いいカンだ。でも今夜はダメです、社に戻りなさい」

いつもの勇猛さはどこへいったのだろうか？　真夜子はしょんぼりとうなだれた。

アルディーンは、真夜子にとっては憧れの的であった。

恐ろしい妖力をはじめて身につけた勇敢な人。黒衣をまとった姿は見たこともないほど美しく、気高くさえ見える。たしかにすこし、目が眩んでいるのかもしれない……手のとどかない星からきたようにさえ思えるのだ。

憧れの人が怒っているようだ。厳しい表情で自分がトランクから出るのを待っている

……。

「ごめんなさい、あたし……」

真夜子の心の動きは、涼にもわかっていた。

いつもと違う優しい視線、ふるえるくちびる。いけないとは思っていても、魔法にかかるのは彼のほうなのだ。

――そんな悲しい顔をさせたまま、帰すなんてとてもできない！

手をのばして軽々と真夜子をトランクから抱きおろすと、アップで瞳を見つめてささやいた。

「私の記者さん……どんなに心配かあなたにはわからないのですか？」

――キャー、素敵！　許せない！　アップだわ!!

……のちに表の刑事はさっきの記者が、カメラを振りまわしながら帰るのを見かけた。何かいいことがあったようだ。

さて、ナリタ署の部屋には、ナイトハンドも一緒にいた。

取調室を仮に使っている薄暗い場所である。黒衣の二人の訪問者は、どちらも暗いほうが好みらしい……仮面のナイトハンドは窓を背にして逆光で立ち、闇の皇子はその足もとに、座るというよりとぐろをまいている。

三日月真吾警部が、二人に説明する。どうやら今夜、市内のある場所で大きな麻薬の取引

がおこなわれるらしい。
「運び屋はどこから来るかわからないが、買い手は、ホラ……」
シンジケートの動向にくわしいナイトハンドが、三日月警部の言う名前を聞いてうなずいた。今、この街で動かされる麻薬の8割を流している組織だ。
「……だが肝心の売り手がわからない。それであんたらの手を借りたいのさ！」
使える者は何でも使えというのが真吾警部のモットーだ。たとえ妖魔でも、殺人鬼でも！
「取引の情報を持ってきたのは誰なんだ？」
場所と時間は、ゴードンズ・ガードからの通報によるものだった。ネフ・ブラウンがそこに来ていて言った。
「仲間の一人がぐうぜん工場で耳にしたんです」
「すると、それには工場の人間がからんでいるのか……？」
ナイトハンドが低い声でつぶやいた。
「まあ、そういうことになるな。ナァ、どう思う？　近ごろ、この手の麻薬や密輸品の運び手をやる下っぱ連中は、捕まえてみるとどうも工場の工員が多いんだよな……ナサニエル・ゴードンがやはり陰にいるのだろうか？」
〝そんなことはないと思うが……〟ナイトハンドがややあいまいな調子で口をにごした。真吾警部はネフ・ブラウンに顔を向けると、あんたはどう思う？　とたずねたものだ。

「聞くところによると、あんたたちのグループは別に彼から金なんかもらってはいない。ひもつきの番犬ってわけじゃないんだ……どうかな、あの雇い主は怪しくないか？」

ネフ・ブラウンは首を振った。

「残念ながら、ガードの人間はみんな単なる工員ばかりですからね。ゴードンさんの顔は見たことすらありませんよ……でもね警部さん、それじゃ悪事にかかわる工場のために、ただで身体を張る人間っていると思うんですか？」

まいった……三日月警部が素直にあやまると、ネフは男らしく笑い、それから現場にもついていきたいと強く願った。

――密告者になっちまった責任を見とどけるつもりか。律義な男だね。

「邪魔になるから、前には出させないぜ？」

真吾警部は融通がききすぎるたちだ。肩をすくめてうなずいた。ナイトハンドには、悪党どもの逃げ道をふさいでもらいたい。そして闇の皇子は……。

「フッフッフ、もちろんいちばんあぶないところをやってもらいたいわけさ！」

悪いなッ、そう言って警部は用意されたボロ着を投げわたした。

「これを着て、どうするんです？」

三日月警部の作戦を聞いて、涼はうなずいた。〝いいでしょう、やってみよう〟

黒衣の上から、うまく古毛布などをまきつけると、すっかり浮浪児らしい形になった。

フードをすっぽりかぶり、どこかひ弱い子供に見える……ナイトハンドが注意をした。
「……フードをおろしているあいだは、ゴーグルをはずしたほうがいいぞ。内側から、まだ金具が光って見える」
言われたとおりにアルディーンが手をまわしてゴーグルをはずし、フードをさらに深くおろした。三日月警部の目が、なんだか怪しく輝いた。
――オッ⁉　あいつめ。チャンスじゃないか！　顔を見てやりたいぜ！
〝アルディーンには何度も助けられた〟それは本当だ。
力を借りたこと、一度は生命も助けられたこと……みんな感謝しているし、いつかその借りを返せたらと思っているのだが、それはそれ、これはこれだ！
だいたい、くやしいじゃないか⁉　あんな小僧っ子にいつもいつも助けられて……。
――ガキのくせして先を越すな、と言いたいね！
頭もいい、ほとんど不死身だ、そしていつも向こうから手を差しのべてくる……あいつに欠点はないのか⁉　そんなの俺は気に入らないぞ‼　絶対に不公平だ！
……真吾警部にしたところでアルディーンに罪を着せるつもりはない。仲たがいする気も、さらさらない。
だが、一度あいつの弱みをにぎれたらどんなに気持ちがいいだろう！　たとえば、いつも隠している素顔を見てやるとか……あのゴーグル一つ、どうにかならないのだろうか？

力ずくでは相手が悪い。だがもしあれをひっぺがして、すかした顔を見てやれたら……そうしたら、これから先ずっと奴の優位に立てるような予感がするのだ。

きっとさぞ、あせるだろう。アア、思っただけで気持ちがいいぞ！

〝真吾警部、何するんですか!?〟

〝フーン、お前さんそういう顔だったのかァ〟

〝やめてください！　見るなッ……見ないで！〟

嫌だね、俺さまはジックリそれを見物してやるんだ……あいつめ、二度と生意気な顔はさせない。真吾警部はいよいよ目を光らせた。

――ちくしょう、顔が見たいッッ!!

これも同じくボロ着で変装した、例の新米刑事が連絡書を持ってくる。真吾警部はどこかうわの空で受けとると、

「オッと、そうだ、俺電話をかけてこなくちゃあ！　すぐに戻るから待っててくれ」

特に愛想よく、窓ぎわのアルディーンにうなずいて飛びだしていった。わざと音を立てて遠ざかっていって、廊下のはしでタイミングをはかる。

……出ていったとみせかけて、部屋に飛びこんでフードをはいでやる！

あいつも油断しているはずだ、きっとうまくいく！　ぬき足さし足でもとの場所まで戻った彼は、いきなりドアを蹴り開けると、目標におどりかかった。

「ワッ、何するんですか!?　やめてくださいッ！」
もがく相手をひざで押さえつけて、高笑いとともにフードをはぎとった。
「お!?　お前、やけに新入りの奴に似ているんだな？」
すこし似すぎてないだろうか？　真吾警部はキツネにつままれたような顔で、一瞬、事態がわからないようだ。〝まさか双子!?〟闇の皇子にはすべてわかっていた。
――どうせこんなことだろうと思ったんだ。
真吾警部が下手な芝居をしながら出ていったあとで、彼はドアの隣まで場所を移し、窓ぎわに残っていたのは新米刑事だったのだ。
「バカらしい、私は先にいくぞ！」
……ナイトハンドがつっけんどんにことわって、部屋を出ていった。
廊下のはしで異様な大笑いが聞こえたのは、はたしてナリタ署の亡霊か幻聴か？

……やがて、刻限が来て、旧市街の古い倉庫で問題の取引がはじめられた。
倉庫のまわりはすでに真吾警部のたくみな配置で、二重、三重にとりまかれている……。
そうとも知らず、シンジケートの車が小さい倉庫の前に静かに現れた。男たちが10人ほど、中に入っていく、運び人も時間どおりにやってきたようだ。

倉庫の中で取引が始められた。
「その前に念のため、そこいらを調べておけ」
組織の男たちがすみずみまでチェックすると、積んである木箱のあいだで震えている浮浪児を発見した。どうやら、不幸にもこの場所を寝ぐらにしていた子供のようだ。
「見ろ！　これだから、目をくばっておかなければやばいんだ」
逃げようとした子供の背中をナイフでひと突きにすると、足もとにくずれ落ちるように倒れて動かなくなった……。
「さあ、もうこれで寝ぐらの心配はいらないぜ。ガキめ」
黒服の若い男がニヤリとすると、背中に足をかけて、深くささったナイフを抜く。
「さてと、ではこれが品物だ……引きかえに金をもらいたい」
運び屋は、買う側の組織の男に確認をさせるため、アタッシュケースを渡した。
相手の中で、いちばん格上らしい男がふとせきばらいをして言う。
「ところで、その……すこし聞かせてもらえないかね？　あんたのボスについて」
実際のところ、買い手の男たちは、運ばれてくる麻薬の品質と値段については知っていたが、自分たちが誰と取り引きしているのかよくわからなかった。
取引はすでに、くりかえしおこなわれ、おたがいに満足のいくものだったが、それでも（あるいはそれだから）彼らは取引先の正体を知りたがっていた。

「それは言うわけにはいかねえな」
運び屋ははじめ、そう言って首を振ったが、〝これは代金とは別だ〟と多額の現金をつかまされて気が変わったようだ。
俺もたいしたことは知らないんだ……男はそう言って、金をポケットにしまいながら、
「俺が会うのはファレルという男だ。奴が品物をくれて、この金を受け取る……使い走りとは思えねえ、たぶんあいつがボスなんだろうな」
——大きな組織じゃねえな。だが、ちっぽけなところには、これほどのブツはあつかえねえだろう……そこがわからねえ。
痩せた青黒い顔の運び屋は、暑くなったのかひたいの汗をぬぐって首を振った。
若い金髪の男で、はじめは愛想がよかった。だが今では心底冷酷な奴だとわかっている。
「……あんたたちもそうだが、子供でも平気で殺す男さ。はっきりしているのはそれだけだよ」
運び人に言えるのは、そこまでのようだった。
組織の男も金を出してきた、アタッシュケースと交換しようとしたそのとき、
「……はい、そこまで」
突然、足もとからのびてきた手が2個のアタッシュケースをつかむと、男たちのあいだから引き抜いた。

ギョッとした目が下を見ると、さっき刺し殺したはずの浮浪児の少年が、ボロ着をはらいながら起きてきた。その下は黒衣と短いケープ、ゴーグルをつけなおした顔でニッと笑う。金属的な気味の悪い声だった。

「こ……こいつ、アルディーンだ!!」

「〝闇の皇子〟憑きかッ……ネオ・ナリタの!?」

よそからきた組織の人間は奇妙な言いかたをしたが、間違いではない。

見つかったらかまうこたァない、おとなしく殺されてやれ……三日月警部が言ったものだ。

〝秘技、死んだふり〟それで聞くだけの話はぜんぶ聞いた。黒衣の少年はククと笑い、

「なんだ、これから銃を出すのかい？　この倉庫はすでに包囲されているよ。抵抗は無駄だと思うがなあ……」

〝う、撃て！　撃ち殺せ!!〟一人が絶叫したが、

「アハハハ……もう遅いッ！」

彼が手をあげると、たつまきが荒れ狂うように男たちが床にたたきふせられていく……。

逃げようとして出口に駆けこんだ者たちは、さらに恐ろしい目にあわされるのだ。

それから約10分後。

放心したようなシンジケートの連中は、ナリタ署の警官に連行されていった……三日月警

部が来たところで、アルディーンは彼らに情報を伝えた。
「ファレルという男か。知らないな」
ナイトハンドにも心あたりのない名前らしい。
「他所からきた組織のはずなんだけど……」
真吾警部がまたぞろナサニエル・ゴードン黒幕説を持ちだしてきた。闇の皇子が笑いをこらえている。
「だってさ、あれほど怪しい野郎もないもんだぜ!?　億万長者のくせに社交界にも顔を出さないし、新聞の取材にも会おうとしない」
何が楽しくて生きているのかわからない奴は、真吾警部の判断ではみんな怪しい。
「若くて金があって、どうして美女とのウワサひとつない!?　おれがああいう大金持ちなら、閉じこもってなんかいるもんか！　まず客船を一つ買いきって、可愛い子ちゃんだけのせるだろ？」
まてよ、船員と船長はいるか……生ぐさい妄想に耐えられなくなったナイトハンドはどこかへいってしまった。アルディーンもなんだかキョロキョロしていると……。
「警部、あぶないッ！」
闇の皇子の姿を見たとき、まっ先に逃げていた運び屋の男が戻って、銃を乱射したのだ。狙われた真吾警部をかばったアルディーンの背中で、マシンガンが炸裂する。

〝クソッ、とり押さえろ！〟わめきながら撃っていた男は、すぐにとり押さえられた。目をむき、顔いちめんに汗が浮かんでいる。どうやら彼自身、薬の中毒者でヤケになってしまったようだった。

「……アルディーン、おいッ、大丈夫か!?」

さすがに真吾警部が青くなって叫んでいる。彼がささえていないと、そのまま床にくずれてしまいそうなほど、身体に力がないのだ。

「しっかりしろ、おい！　貴様ッ！」

……ようやく、ささやくような返事が返ってきた。

「大丈夫です、警部……このくらいなら平気なんです。ただ、ちょっと疲れたから休ませてもらえれば……」

言うなりガックリと後ろにのけぞった。あわてて、落ちないように抱きとめると、

「のびてやがるぜ、こいつ……」

呼吸はある、信じられないが生命に別状はないらしい……これまでのケースから考えても、たぶん数分で起きてくるだろう。それまで、どうすればいいんだ？

さすがにあのマシンガンの集中射撃はこたえたんだな……まだ動く気配もない少年をかかえて立っている三日月警部の心に、ハッとひらめいたことがあった。

〝今なら、顔が見られる！〟

見おろすと、すぐ手の届くところにゴーグルがある。ちょっと手を動かすだけで、あんなに見たかったこいつの素顔にお目にかかれる。今なら、簡単に……。

——俺をかばって撃たれたんだ。

三日月警部は手をさげて首を振った。それから空いている部屋にアルディーンを入れてドアを閉めて、〝誰も中に入るな！〟と部下全員にきつく言いわたした。

「それと……そうだな、新入り。すまないがどこか開いている店を探して、ソーダでも買ってきてくれ。なんでもいいさ、ガキの好きそうなやつを頼む」

……ソーダ水が来ると、彼はノックをしてからドアの向こうに声をかけた。

「入ってもいいか？」

静かな声がそれにこたえた。〝ようし、もう起きている〟いせいよくドアを蹴って入った真吾警部は、もはや立ちあがっているアルディーンを見て笑顔になった。

「取れよ、さし入れだぞ！」

子供がしっかりした手つきで受けとるのを見て、もう安心だと思ったようだ。だが、なにげなく口をつけた涼は背筋が凍るような気持ちを味わっていた。〝これは何だ!?〟

まずい！　いや……何も感じられないのだ。思わず吐きだしそうになるのを、とっさにこらえた。ふだんなら好きなはずの甘い液体は、今何の意味もなく喉を通っていく。

なぜかは痛いほどよくわかった。

――こんなもの……欲しくないんだ！

目の前にいる三日月警部を、彼は必死に見るまいとした。若い元気な男だ、生気に満ちあふれた背の高い……涼は目をとじ、歯をくいしばった。

この少年の身体と精神は、二つの異なる支配を受けていた。

人間の子供である涼・雨宮と恐るべき妖魔のアルディーン……瞳の変化や能力の上下は、どちらの性質が強く現れているかによって微妙に移りかわるものだった。

月が満ち……欠けるように、アルディーンと人のあいだを涼はうつっていく。

このときは急激なはげしい消耗のあとで、妖魔本来の餌食を身体が求めていた。

あとすこし、回復すればこの飢えは消える……涼にはよくわかっていた。しかし、温かい獲物を前にしてこらえるのは、言いようもない苦しみだ。

――あとすこし苦しめばこの飢えは消える。我慢だ……こら動くんじゃないッ！

〝一歩でも動けば許さないぞ！〟ひそかに懸命に自分に言いきかせているのを、真吾警部は知るよしもない。

「真吾警部、すまないけど……もうすこし一人で休ませてください」

いいとも、陽気にうなずきながら警部は出ていった。

〝獲物が……〟赤い瞳の妖魔が、部屋の隅からまじろぎもせずそれを見つめている。

真吾警部がいなくなったあと、残された少年はうずくまって泣き声をこらえていた。

時たま、恐ろしい光景が心に浮かぶことがある……。

――今僕はたしかに正気なのだろうか⁉

闇の皇子に憑かれた者は、たちどころに正気を失い狂暴な妖魔になって殺しつくす。姿もしだいに変わる……獣にふさわしく。

だが生まれつき、人として高い能力をさずかっていた涼・雨宮は、奇しくもアルディーンの力を支配した。凄まじい妖力と完全に合体した。

ネオ・ナリタの呪力はもう荒れない……誰もがそう考えたし、涼もそれを信じていた。ふだんは人間として、涼の意識がアルディーンを完全に制御できた。ただ時折、こんなときに、恐ろしい飢えが身体の内側に起こることがあるのだ。

こらえられる……こらえられた。涼・雨宮の心は勇敢で強かった。彼は間違いなく闇の皇子の理想の宿主だったが……それでも時に、震えるほど怖くなるのだ。

――いつか僕が血の誘惑に負けてしまったら……？

アルディーンの力がいつのまにか強大になり、ある朝、僕の限界を越えてしまったら？

〝ダメだ、そんなことは起こさせない‼〟

叫んでも、誰がこたえてくれるだろう？　もしも自分が正気でないとしたら⁉

「……大丈夫、まだ何でもないんだから」

声を殺してつぶやきながら、少年は頬の涙をこすった。

長いネオ・ナリタの歴史のなかで、涼ほど長いあいだアルディーンと合体していた者はいない。涼ほど強い妖力を得た者もいなかった。

その彼がもし狂ったら……そのときは、前例のない危険な怪物がネオ・ナリタに放たれることになるのだ。

――そのときはこの街じゅうが僕を殺そうとするだろう。そして、できるのだろうか？

死ぬことは恐ろしい。でも、怪物になって生きつづけるのはもっと恐ろしかった。

勇敢な人たちが何人も、妖魔の牙にかかって死ぬ……それだけではない、かつてアルディーンに憑かれた人々はどうなった？　古い記録の文章を、涼は忘れたことなどなかった。〝彼らは家族や恋人でさえかまわずに惨殺した〟と。

暗い瞳が闇の中のまぼろしを見ていた。

すっかりアワの消えたソーダ水を口にしてみる……甘いオレンジの味が戻っている。

だが涼はまだ暗闇の中で、瞳をこらしていた。

もう傷は回復している。立ちあがって、部屋から出ていけばいいのだ。

だが、ドアまでの距離はなんと遠いのだろう……そのむこうには知っている人々がいる。親しい、懐かしい人々だ。いつか僕は彼らのことを忘れて、血に飢えた魔物になるかもしれない……そのときはきっと誰にも止められないだろう。

死骸が山をなす街角で、返り血をあびて笑っている自分が見えないか？　狂った自分が獲

物を求めて街をさまようのが……？

今でさえ、血の匂いがこんなに甘く感じられるのだ。

家族や……そして、恋人でさえかまわずに⁉

——嫌だッ‼

小さな悲鳴をあげかけたときに、ノックもなくドアが開いた。

「どうした？　遅いので見にきたぞ」

黒衣の仮面の男が、低い冷たい声で問いかけた。

——ナイトハンド……。

ふいに涼の顔が輝くと、元気よく立ちあがった。

「ごめん、もう大丈夫なんだ！　ぼんやりしていたよ」

いつもどおりの笑顔を見せるとドアに向かって歩きだした。通りすぎるときに、一瞬だけ、背の高い相手に視線を向けた。奇妙な信頼のまなざしだ。

——心配はいらない。彼がいる。

自分はただ力のかぎり強くあろう。もし運命が僕を変えても、そのときには彼がいてくれる。ナイトハンドの戦意と力は、かならずや敵を倒す。

——君ならきっと僕をも殺せる。手段をつくして殺してくれるだろう。

暖かい安堵がさざ波のように胸にひろがる。

倉庫を出ると霧が晴れていた。澄んだおだやかな瞳で少年が星を見あげた。

ナイトハンドはネフ・ブラウンを、その住む地区まで送っていくつもりになっていた。旧市街の街路は迷路のようで暗く、男といえども夜間は安全ではない。

「ええ、僕らもかならずグループで行動するようにしていますよ」

ゴードンズ・ガードのリーダーがうなずいた。

この青年をリーダーにして結束した若者たちは、誰の指示でもなくそうやって各所に集まり、街頭でのトラブルを未然に防ごうとしていた。

悪質な犯罪者なら警察に引きわたし、そうでもない場合にはできるかぎり力になった。

運び屋だった工員の運命を聞くと、彼は〝そうですか、死にましたか〟と、悲しげにつぶやいた。

ナイトハンドが、暗闇から低い声でたずねた。

「……いったいなぜ、そんなことを始めたのだ？　得になる話でもないだろうに」

この男が一銭の報酬も受けていないのは、よく知っていた。

やっかいなばかりで、危険も少なくないはずだった。

ネフ・ブラウンはただ声をあげて笑い、

「たしかにやっかいごとは多いですよ！　まったく、次から次へとよくもめごとが起きるもんです。僕は、あなた方のように特別に強いわけでもないですしね」

それぞれ両脇を歩いているアルディーンとナイトハンドを、かなり好奇心に満ちた顔で見まわした。

「それでもこっちには仲間がいます。この街はあぶないところで、誰もが仲間をつくりたいんです。そうすれば、なんとなく安全な気がしますから……」

もしかしたら、この人たちにはわからない気持ちかもしれないが……黒衣の二人の連れは特に何も言わなかった。

……現実に、旧市街の多くの若者には自分たちのグループがある。

「でも本当に信じあえる仲間ってのは、めったにありませんよ」

自分たちが求めているのは、そういう仲間同士だとネフは説明した。

「本気で信頼できて、奴なら真面目にやれるとわかる仲間がいれば、それだけでいろんなことが可能になるでしょう。一人ではダメなこともやってみせるつもりです、かならず！」

ゴードンズ・ガードの名前は、そろそろ街で知られはじめた。

「おせっかいの裏切り者呼ばわりされることもありますが、頼りにしてくれる人も出てきました。うれしいですよ、やっぱり……ネオ・ナリタは犯罪都市で、街も汚らしいけれど、生まれた街なんです！　この街でも何かできると思いたいんですよ！」

街角に立って、そう言う瞳が強い決意で輝く。
この目が多くの仲間を魅きつけて、かたい団結をつくりだしているのだろうか。
ナイトハンドと呼ばれる男は、どこか奇妙な声音でつぶやいた。
「……ナサニエル・ゴードンに何か望みたいことはないか？　その……私はいろいろな場所にいるし、会うこともあるかもしれない。もし言いたいことがあれば伝えておくが……」
ネフ・ブラウンはしばらく考えているようすだった。それから〝特にありませんね〟と首を振った。
「僕らはあの人に感謝しています……工場での仕事がなければ、たとえ七賢人がいなくなってもこの街はまだ暗いままだった。働く先もなしに、人間らしくなんかなれませんからね。給料もまともです……本当に、もっとひどい賃金でも、この街ならしかたないかもしれないのに」
だから僕らはゴードンズ・ガードと名のることにしたのですよ……ネフは言うと、ふと思いだしたように真面目な顔になって、一つだけ望みがあったと口に出した。
「それは？」
「あの人にもっと表に出てもらいたいんです」
仮面の男は不審そうな気配で、たずねかえした。
「表に出ろ、というと？」

「その……言葉のとおりですよ。あの人にもっと人前へ出てもらえたら、ありがたいです」

謎の富豪ナサニエル・ゴードンは、めったに人前に姿を見せない。不可思議な人嫌いぶりは、さまざまな疑惑を呼んでいた。

「暗黒街とつながっているとか、いろいろ噂もありますけど、僕は技師なんです。技術者として自分でチェックしたから、よくわかっています……あの工場にはどこも怪しいところはありません。ええ、間違いないことです。

だけど、たいがいの工員にはそんなことはできませんからね。顔のない男のもとで働いているみたいなものです……不安な感じはわかりますよね？　みんな疑いを心から捨てきれないんです。ひょっとしてまだ犯罪の片棒をかつがされているんじゃないか。さもなければ、またある日突然工場がなくなって、またドン底に放りだされるんじゃないか……」

だからすぐ自棄になるし、悪い話にも耳を貸しやすいのだ……青ざめた顔には気づかず、一人でうなずいているネフは、

「もしあの人がもっと外部に顔を見せてくれたら、ずっと違ってくると思うんです。誰ももっと安心できるようになるでしょう」

「だが……彼は身体が……」

かすれた声だった。ネフは一度うなずき、

「ゴードンさんの身体が不自由なのは知っています。人目がつらい気持ちもあるとしたら、

お気の毒だと思いますよ。それでも、やっぱりあの人はもっと人前に出るべきです、なぜなら……」

そこで彼は、はたと立ちどまった。

ゆくての街角からインディアンのような雄叫びが聞こえる……100メートルほどむこうのアパートの玄関で、小鬼たちが数人、声をかぎりにわめいていた。

「ネフ！　ネフ、おかえりよ!!」

「こらッ、お前たちどうしてこんな遅くまで起きているんだ？」

笑いながら駆けよる先で、飛んだりはねたりして叫んでいる。その真ん中から、小鳥のような声があがった。

「ネフ、おかえりなさい！」

「マリア！」

それは車椅子に乗った若い娘だった。

「やあ、驚いたな。どうやっておりてこられたんだい？」

「……みんなが手伝っておろしてくれたわ！」

ネフ・ブラウンは、振りかえるとナイトハンドに向かい、

「あの方にとっても、そのほうがきっとよいはずなんです。マリアも……あの人のように車椅子の脚ですが、いけるところにはどこへでもいきます。とても勇敢なんですよ。僕ら、い

つか結婚するつもりでいます」

彼はその後、送ってもらった礼を言うと、恋人のもとに走っていってしまった。

しっかりと抱きあっている……そして、娘が子供たちに言うほがらかな声が聞こえた。

「さあ、あなたたち！　帰らなきゃ……家の前まで私と競争よ！」

ワァッという歓声があがると、子供らは走りだした。なかなか早い車椅子が、すぐあとから追い抜いていった……。

――人影のなくなった暗い街路には、凍りついたような黒衣の男がとり残された。

どこかすくんでしまったようにビルの壁に背をあずけると、うつむいて長いタメ息をつく。

なぜだか自分が恥ずかしくてならなかった。

7年間、復讐だけしか頭にはなかった。そのためにはどんなことでも犠牲にしてかまわなかった。それでいいと思い、疑うことすらなかったのだが……。

――あの男は、私に人々の前に出てほしいと思っていたのだ。

〝不自由な身体で人目がつらいとしたら、本当にお気の毒です……〟

思いだすと頬がカッと熱くなる。手も脚も、本当は誰よりも強く俊敏だった。車椅子など必要ではなかったのだ。

こんな気持ちになったのは初めてだった。

――まるで……まるで何か卑怯なことをしていたようだ！

うつむいてこぶしを握る姿を、アルディーンが心配そうな目で見ていた。

さっきから黙って彼の横についていたが、つと手をのばすと力づけるように肩を揺すった。

「ナイトハンド、ねえ……元気だせよ」

人ではない妖魔の声なのに、不思議にホッとした。

気がつくとしなやかな腕がさりげなく肩にまわっている。ナイトハンドは軽く眉をあげて、足もとを見た。

――やっぱりそうか。

小柄な少年の手が、そのままで彼の肩にまわるはずがないのだ。思ったとおり、コッソリ木箱に乗って背丈の差をうめていた。

「こらッ、インチキをするんじゃない」

ナイトハンドは笑いながら箱を蹴った。

さて、残念ながらネオ・ナリタの治安はあいかわらずの状態だった。

ある朝など、市の中央オフィスほか、数か所に爆薬がしかけられていた。

爆破1時間前に犯人から電話で連絡があったので、被害にはならなかったが、市警察はてんてこ舞いをしたものだ。

電話をかけてきたのは女で、涼のところにだけは特別の使いが来てその名を告げていった。名前を知った涼は、思わず怒りで我を忘れかけた。

――スコルピオン……梨花夫人だってえ!?

……そのころ、スコルピオンこと梨花夫人は例の屋敷でアルディーンを待ちうけていた。まだ日が高いが、夜までは待たないだろう。

――きっとすぐにここまで乗りこんでくるはずだわ！

爆薬は市内の『ナリタ日報』のビルにも置いてきたのだ。これに平気でいられるはずはない。

アルディーンの慕う相手が、この新聞社の女記者だととっくに調べはついていた。ただし傷つけるつもりは今のところない。〝あれしきの小娘、私の敵ではないわ〟

一度でも彼が私を愛してくれれば、あんな娘はこの世にいなかったも同然よ。

――それなら手荒なことをして、優しいあの子の恨みを買うのはバカというもの……。

威梨花はにっこりと微笑んで、鏡のなかをのぞいた……朝からずっと衣装選びに命をかけ

ていたのだ。
どんな姿をしていれば、アルディーンの心をいちばん捕らえやすいのだろう？
「いったい、どんな服が旦那様の好みなのかしら……」
青いドレスを脱ぎ捨てながら、梨花夫人がつぶやいた。
年上なことは今さら隠せないのだから、あまり少女めいた格好はしないほうがいいかもしれない。しかし見るからに少年らしい彼の前で、年増に見えるのは死んでも嫌だった！
この深紅のドレスは本当によく似合う……でも胸ぐりが深すぎるかしら？　ところがレースをかさねた蜻蛉のようなローブは、美しい肌がまるで見せられないので嫌なのだ。
清楚か……いっそもっと大胆にか？　ながい裳裾の黒いドレスは怪奇小説の花嫁のようで、ほかのときなら問題外だが、妖魔の好みにはこれこそあうかもしれないし……。
朝からもう100着以上に手を通しているのにッ……梨花はくちびるをかんで鈴を鳴らした。
「誰か、香片を持ってきて！」
まもなく、香片（ジャスミン茶）を運んできた部下のショーン・小杉が、山と積みあげられた衣装を見てさすがに3歩あとずさった。
「なあに、ショーン？」
「いえ……だいぶお悩みのごようすで」

そうなの……タメ息をついてから、梨花（リイホア）は紫のイブニングを脱ぎとばした。

――ああ、もう！　こんなことをしていたら、彼が来るのに間にあわない！

怒りに燃える相手をすかさず出むかえて、ひと目で心をとろかすのがよいのだ。もたもたしていると、効果は半減してしまう……。

美しい眉（まゆ）をしかめて立ちあがった梨花だが、鏡にうつる自分を見てすぐに機嫌（きげん）を直したようだ。

「ああ、うれしい！　やっぱり私はきれいだわね？」

裸足（はだし）のまま、両腕を広げて軽やかにまわってみる。豊かな胸、細い腰。手足の美しさは昔から無類だった。

脱ぎ捨てられた衣装の山を見ていた梨花夫人の目が、不意に輝いた。

――そうだわ、あの人にはいちばんきれいな私を見てもらいましょう！

鈴を鳴らしてショーンを呼ぶと、もうすぐここにアルディーンが来ることを告げた。

「……そうしたらすぐ、ここへ通してちょうだい！」

どういうわけか涼は、ほぼスコルピオンの予想どおりに行動し、屋敷に現れた。

この屋敷に彼女がまだ平然としていることにちょっと驚いたが、それどころではない。今

日という今日は腹が立ってたまらなかった。
あの女性はナイトハンドの言葉を何と聞いたのだろう？　〝今度、一度でも事を起こせばかならず生命をもらうからな〟彼はつねに本気だ、それなのに市庁に爆弾なんてどういうつもりだ!?
しかも爆薬は、『ナリタ日報』の玄関にも置いてあったのだ。
――真夜子に何かしたら、この僕が許さない!!
ツカツカと乗りこんできた少年は、現れたショーンにきびしい声音で、
「梨花夫人に会わせろ！　話があるんだ！」
「どうぞこちらへ……」
廊下を抜けて、奥の部屋に案内する……先にドアを開けて客を通し、ドアを閉めたところでアルディーンの悲鳴があがった。
「ちょっ……ちょっと待ってください、梨花夫人！　僕はけっして、そんなつもりじゃ!!」
〝本当です！　信じてください！〟
ドアの前ではショーンが無表情に一礼して去っていった……。
「あら、何かしら？　アルディーン」
優しく、なだめるような梨花の声がひびく。闇の皇子はしどろもどろに、顔の前で手を振りながら、

「信じてください、僕はまさか……あなたが入浴中だなんてッ、ここがバスルームだなんて本当に知りませんでした!!」

——広い美しいその部屋の中央に、豪奢な浴槽が切ってあった。

ドアから一歩入ると、さえぎるものもないど真ん前である……仰天して、死にもの狂いで目をそらしているアルディーンを見て、梨花夫人がウ・フ・フと笑った。

「もちろんよ、アルディーン。わかっているわ。だって私がショーンに言いつけておいたのですもの。あなたが来たらまっすぐにここへお通しするようにって……」

——なんですって!?

ギョッとなった視線が、思わず声の方向に向かう。

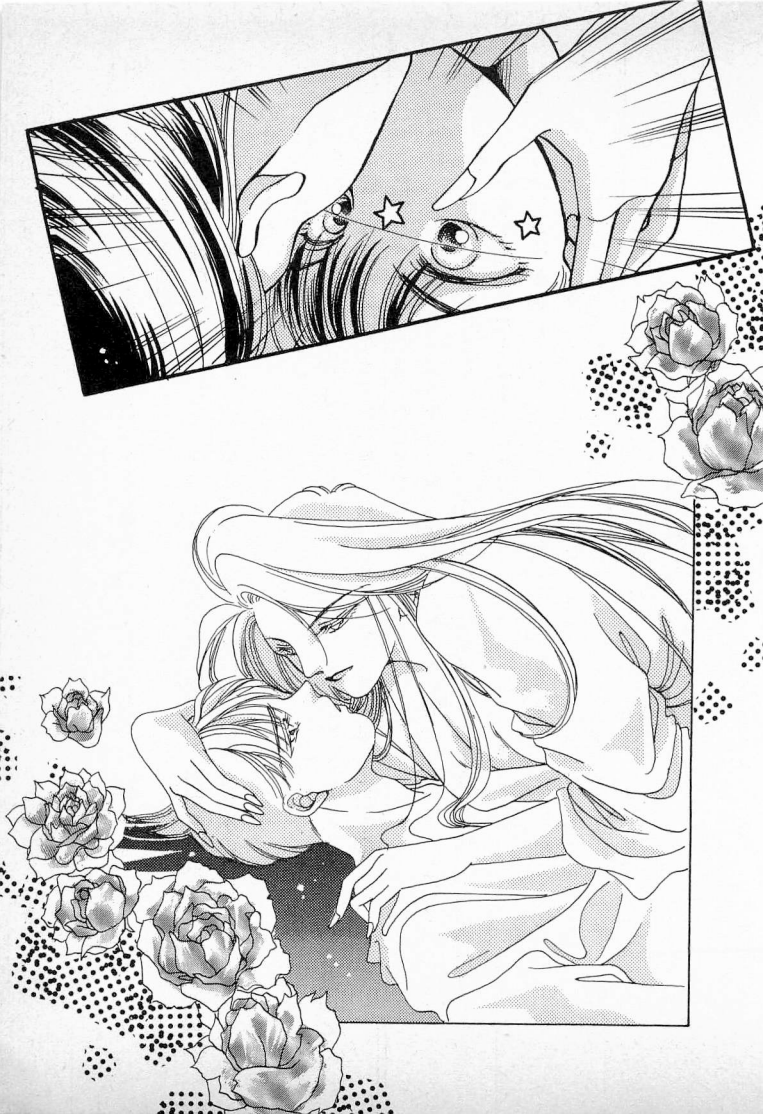
そのとたん、首すじまでカッと赤くなってしまった……突然、金縛りにでもあったように、足が棒立ちで動けないのだ。梨花夫人はミルク色の泡につかったままで、わざと美しい手や足をくねらせるようにしてみせた。

ウキウキした鈴をころがすような声が追いうちをかける。

「まあ、あなたったら、耳まで真っ赤」

目の毒という言葉は、このためにあるようなものだ。どう考えても涼には刺激が強すぎる。二、三度あえいだあとで、必死に口を開き、

「お……お願いですから、何か着てもらえませんか?」



それだけをかろうじて言うと、かたく目を閉じてしまったらしい。

――まあ、真面目な子！

梨花は目を輝かせると、わざとゆっくり時間をかけて風呂からあがり、悩ましい絹ずれの音をさんざん聞かせてから、しっかり目を閉じている涼の手に冷たい水のはいったグラスをのせてやった。

「はい、お水。お飲みなさいな……」

〝もしかして喉がかわいているんじゃなくって？〟なぜわかったのだろう？　その言葉のとおり、喉がカラカラになっていた涼は疑いもせず一気に飲みほして目を開けた。

「……着てくださいって言ったじゃないですか!?」

「でも、タオルとローブがあなたの後ろなんですもの……取ってくださらない？」

混乱のてっぺんまできてしまった彼は、言われたガウンを取ろうとしてよろめいた。

――おや、どうしたんだろう……？

フウッと身体が暖かくなったと思うと、力が抜けていった。

「もしかしてあの薬……」

「そうよ、こんどは十分に効いているわね」

蜜のような優しい声を最後に、どんどん意識がうすれていく……。

はじめのうち、眠くなるのがその特性だった。

床の上で目を閉じている少年の顔に、しばらく見惚れていた梨花はやがて、ガウンに着がえて手をたたいた。

現れたショーンが軽く抱きあげて、隣の部屋まで運んでいく。レースのカーテンがついた寝台に寝かせると、〝これでよろしいですか、奥様？〟と振りむいた。

梨花は満足げにうなずいてから、部下の視線に気づいたように、笑いながら、

「なあに、お前、何か言いたいことがありそうね？」

「その……奥様にはいささか幼すぎるお相手ではないかと思いまして」

右腕ともいうべき男は、そこでハッと耳をかいて苦笑した。やや言葉に迷いながら、

〝もちろん奥様はまだお若いですし、非常にお美しくていらっしゃるが……〟

アルディーンに目をやって、首をかしげた。

この少年が稀な凄まじい能力を持っていることは、よく承知していた。女頭目は彼を本気で主に迎えたいらしい。だが、目をつむって寝かされているところを見れば、まだあまりにもあどけないではないか？

「まだ男ともいえない子供です。いずれもの足りなく思われるのでは？」

〝よけいな心配をおしでないよ〟梨花はそれでも機嫌よく返事をした。

「ごらん、この喉のなめらかなこと……」

……まだ二度目の成長が始まってもいないのは明らかだ。発育の遅いほうなのだろう。

――だが、それならこの小柄な見かけも今だけのこと。

梨花はにっこりと微笑んだ。

「15か16歳……この年ごろはアッというまに変わるものよ。すぐに背も高くなり、男らしくなるでしょう」

歪みひとつない、ほっそりした姿を好もしく見つめて、

「ほらね、この肩から背にかけて……もう子供ではなくなりかけているわ」

ガラス細工のようなこのままの彼を愛おしんで、すこし待てばいい。

身体が伸びはじめたら、一月でも見違えるほど変わる。そのときには、どれほど素晴らしい青年になるだろう……夢みるような微笑が、ゆるやかに彼女の頬にのぼった。

――今、彼にめぐりあえたのはなんという幸運かしら。

やはり二人は結ばれる運命にあるのだと思った。子供から大人へ移る微妙な季節……今でなければならないのだ。閃光の一瞬に立ち会うのはこの私……梨花が微笑む。

はじめての愛人が子供らしい領域を焼きつくしてしまうだろう。

――なんて素敵……梨花しか知らない！　梨花しか愛さない！

部下をさがらせたあと、梨花夫人は自分のためにシャンパンのグラスを手にして、ひときアルディーンの寝顔を見つめていた。

――今夜こそ、私たちの婚礼の夜にしましょうね、あなた？

……少年はなぜかうなされている。
梨花夫人はどこ吹く風で、サフラン色のガウンをゆったりとかきあわせた。甘い空想にひたりきっている。
——これから先、アルディーンと私はいつも一緒にいるわ……。
気品のあるしなやかな姿勢の若者が目に浮かんだ。いずれ彼がそうなる姿……優雅な、それでいて抑えきれない情熱の瞳で、梨花だけ見つめてくれる。
〝ウ……ン〟かすかな声がとぎれのかげで聞こえた。
「気がついて？　あなた……アルディーン」
自由にならない身体に困惑した瞳が、大きく見ひらかれたまま、梨花を見あげていた。
「僕を帰しなさい……すぐに！　こんなことをされるのは嫌いです！」
梨花は黙って首を振った。
「ダメ……あなたはもう帰らないのよ」
そんなッ、もがく涼を柔らかい手があっさりと押さえこんだ。〝動かないで、旦那様〟
——梨花のこと、もっとよくわかってもらいたいの……。
甘い香りのする腕がどうしても自分を離さない。どこへ逃げてもくちびるが追ってくるのだ。このままではキスで捕らえられてしまうと感じて、呼吸ができなくなるほどのパニックに襲われた。

「苦し……息がッ……」
不意に腕にかかる手が強くなったのを感じて、梨花は顔をあげた。
――梨花、熱い……胸が焼けそうだ！
「……こういうふうなキスは初めてね？」
荒い息をついている胸の鼓動を、ソッと手を置いてたしかめている……憂わしいほど優しい。その手を離せと涼が叫んだ。
「ええ、いいわ。もう何もしません……」
ただ安心させるためにだけそう言いながら、指先でシャツのボタンをはずしていく……。
「梨花!!」
ほどいた長い髪の先が喉からふれていく感触に、反射的に目を閉じ背筋をのけぞらせた。手も足も熱い。気が遠くなってしまいそうだ……。
……抵抗する気力が尽きてきたのを感じて、梨花夫人はうれしげに笑った。
「好きよ、アルディーン……」
もう逃がさない。まつげをふせて、本当に長いくちづけを始めようとしたとき、窓ぎわから皮肉な声がかかった。
「これはこれは梨花夫人、どうやらとんだところにきたらしい……」
女豹のようなすばやさで、梨花夫人は後ろを振りかえった。

黒衣の〝その男〟の姿を見るなり、美しい眉がキリキリと吊りあがった。サッと後ろ手にカーテンをさげると、

「出ておいきッ！　このいやらしい黒コウモリめ!!」

ナイトハンドはわざと悠々とした足どりで部屋の中に入ってくると、悩ましい場面で邪魔をしてすまなかったとつぶやいた。

〝わかったらさっさと出ておいき！　飛仔（チンピラ）！　のぞき屋!!〟

叫んで窓を指さしたが、ナイトハンドはいっこうに出ていく気配を見せない。手近な椅子にかけ、脚を組んでテーブルの上に投げだしたものだ。

これ見よがしにベルトから銃をはずすと、

「スコルピオン……そう怖がることもあるまい？　私はアルディーンとも約束をしているのだ。新しい悪事をしないでいるかぎり、貴様をこの街では殺さない、とな。はなはだ残念だが、約束は約束だ……」

拳銃をもて遊びながら、氷の笑みを浮かべた。

「もっとも貴様のような女が、いつまでもおとなしくしていられるはずはないがな。遅かれ早かれ、いずれは法にふれる……フフ、そろそろ何か始めているんじゃないのか？」

蒼白な顔で、カーテンの前に立ちふさがる梨花をおもしろそうに見つめた。

「……どうした？　おぼえがあるのか？」

「あるものかッ！」

それはいいな……ナイトハンドが大袈裟に手をたたいた。

「本当なら私は、今すぐにでもこの屋敷じゅうの人間をみな殺しにしてやりたいのだ。わかるだろう？　つくづくお前が何かしていればいいと思うぞ……何か一つ、わずかでも法律を破っていればアルディーンとの約束も消えるからな」

〝たとえば、この屋敷だが……住居不法侵入にはならないのか？〟威梨花は高らかにあざ笑った。

「ハッ……あいにくだね、この屋敷はちゃんと持ち主から購入しているんだよ！」

ナイトハンドはたいして驚いたようすもなく、肩をすくめた。

「そうか、用意がいいことだな。それではここに一人の未成年者がいて、スコルピオンというあだ名の性悪女に狙われているとするぞ。女はそれを逢い引きだと言うのだが、どう見ても一服もられている……」

立派な誘拐罪だと、ゾッとするような笑みを浮かべた。

――こいつ、知っていやがったのかッ⁉

何もかも知っているという薄笑いが仮面の下に浮かんでいる。梨花夫人は恐ろしい目をしてくちびるをかみしめた。

「おとなしく渡せ。渡さないと生命はないぞ」

ひやりとする声音。もちろん本気なのだ……さすがの梨花にもわかっていた。
女を憎んでいる相手には、自分の魅力も通用しない。手袋をはめた右手が不気味に動いている。〝あの手はこの喉など楽ににぎりつぶしてしまう〟
死神同様の男がゆっくりと立ちあがったが、梨花は寝台のカーテンをにぎりしめて首を振った。
――嫌よ！　せっかくここまで来ていながら……渡せるものか!!
やぶれかぶれの抵抗をこころみた。
「誘拐!?　何か勘違いをしているようね、どうやってアルディーンをさらおうというのさ？彼がここにいるのは、自分から会いにきてくれただけよ！　もう愛しあっている仲なのに、薬だなんてよくもそんな……シャンパンに酔ってしまっただけじゃないの！」
「ホホウ、アルディーンは酒など飲めないはずだが……」
残念ながらナイトハンドは信じるふりすらしなかった。猫がネズミをなぶるような顔で、ジリジリと追いつめていく。
「しかもグラスは一つしかないな？」
「恋人同士はそうするものよ！　お前なぞ……どうせ知るまいが！」
ナイトハンドはニヤニヤ笑った。〝たしかに、そうした習わしには、うといほうだがな〟
「あくまでも合意のうえだと言い張るわけだ……」

「そうよ、恋するのが罪だとでも言うつもり？」

仮面の男は笑いながらうなずいた。

「あいにくだが、それでもお前はこの街の法にふれているのだ！　ネオ・ナリタの市条例によれば、18歳以下の者とのそうした行動は、たとえ本人の同意があっても罪になる……」

――なんですって⁉

一瞬、ガク然としている彼女の顔を、卑怯なよろこびの目で見つめながら、

「で、そいつがまだ16歳だということは私が保証するのさ」

ネオ・ナリタの風紀条例には、たしかにそうした一節があった。はるか昔に定められた、青少年を保護するためのものだ。

守られているかどうかは、神のみぞ知る。

おまけに、どちらかといえば未成年の女子を守る目的で作られていたのだが……。

「それでも法律は法律だ。どうする梨花？　それ以上続けるなら、お前は立派な条例違反者だ。あの約束は、なしになるが」

〝生命が惜しいか、惜しくないか？〟

ついにがっくりと膝をついた梨花を突きとばして、カーテンを開けた。着衣の乱れに眉をひそめて、

「アルディーン……起きろ、こら目をさませッ」

あまり乱暴にしないほうがいいわよ……ふてくされたように梨花が注意した。
「全身の神経が敏感になっているはずだから、なぐられれば2倍にも3倍にも感じるよ」
実際に涼は夢うつつで、丸太でなぐられているような気がしていた……。
ナイトハンドはチッと舌うちすると、少年をかつぎあげた。
「梨花、手もふさがっていることだし今回は勘弁してやる。条例は市庁で閲覧できるから、よく読んで頭にたたきこんでおくことだな……」
高笑いをしながら立ちさっていった。
「飛仔!!」
煮えくりかえるようなくやしさが、指先から火花となって飛びちる気がする。
よくもよくも、絹のロープをかきむしりながら梨花夫人が叫んだ。
「おぼえておいで、下司野郎ッ……ショーン、塩!!　塩をおまきッ!」

薬がさめるとナイトハンドの屋敷に連れてこられていた。
「……ここは?」
冷たい視線の主に気づくと、アルディーンはホッとタメ息をついた。
——た……助かったあ!

「さてと……私があれだけ言ってやったよな？」
自己嫌悪で口もきけない彼に、ナイトハンドはねちねちと警戒心のなさを責めあげた。
「よくもあれほどまでに油断ができるものだな？　まったく……意味もない爆弾と聞いて、私でさえ罠だとピンときたのに、お前はなんて間抜けなお人よしだ!?」
そのとおり、ひとこともないのだ。
「貴様、なぜあの梨花の怖さがわからない？　見たらすぐ撃てと言っただろうが!?　あのまま放っておかれたら骨まで料理されてしまうのだぞ！　もっとも……」
フム、皮肉きわまる目つきでジロジロと上から下までながめまわした……なぜか涼の全身にカッと血がのぼる。それを見て、氷点下30度の声が言う。
「もう骨ぬきにされているようなら、何も言わんがな……ムダだから」
ナイトハンドの目には、自分から罠にかかりにいったとしか思えない行動である。
〝そうなったら貴様ともそれかぎりだ〟
そんなァ……涼がなんとか言いかけたときに、執事のウォルフが現れて来客を告げた。
「旦那様、お留守中にトマス・ナルダン様がお見えでした」
何の用だ？　ウォルフもまた、いぶかしんでいるようすだった。
「さあ……そうそう、フェスティバルの式典には、ぜひ出てほしいとのお話しでしたが」
ナルダンがそれを言いにきたのは、すでに三度めである。

第四章　フェスティバルが近づく

さて……フェスティバルの準備は、着々とおこなわれつつあるようだ。

旧市街のほぼ中央にあたる一角に、小さな空き地がつくられた。もとからあった古いビルなどをとりこわして作ったのだ。ささやかな広場だが、そこだけ風通しがよくなったかもしれない。

ビルに住んでいた住人たちは——勝手に住みついた浮浪者もふくめて——全員、ひどく法外な金をもらって、いそいそとそこを立ちのいた。

ナルダンはこのフェスティバルを実行するためなら、いくら金がかかってもよいつもりだ。

広場にはさっそく手がくわえられた。円形にならされ、緑の樹がぐるりに植えられた。今はその中央に、卵形の屋根の仮ドームが建てられようとしている。

当日の遊園地やメリーゴーラウンドはすべてこの中にあるそうだ……雨でも、霧が出ても大丈夫なようにという話である。

フェスティバルの式典はこの前でおこない、その後、見物客の目の前で、入り口が解放される手はずであるらしい。旧市街でも、しだいに心待ちにする人々がふえてきた。

奇妙なことに、ナルダンはなるべく自分の名前を出さずに準備を進めている。むしろ可能なかぎり、もう一人の富豪ナサニエル・ゴードン氏を表に立てようとする。だから街では主催者はゴードン氏だ、とカン違いしている人々までいるようだったが……。

夜の街では、闇の皇子対組織の死闘が続いていた。

さまざまなシンジケートは策を練り、アルディーンの抹殺に全力をあげた。どう考えたところで、ほかに方法があるとは思えなかったからだ。

戦場で使うほど強力な銃やレーザーを持ちこみ、仕留めた者はその場で幹部にすると、どのボスも約束したらしい……黒衣の少年は、まるで遊びにでもつきあうように彼らの的になってくれたが、ゲームの代償としては組織にとって貴重なものを何かしら奪っていった。

どのような陣を敷いて待ちぶせても、ひと目で何手も先まで読んでしまえた……アカデミアの頭脳にとっては、子供だましのようなものなのだろう。

どの組織にとっても、ネオ・ナリタ進出は悪夢に近くなってきた。〝どこの街だって、これほどの力をかければ制圧できないことはないはずだ！〟

――だが魔の都市ネオ・ナリタでは恐るべき敵が待っていた。

ナイトハンドが通る場所には、つねにおびただしい血の海が広がり……アルディーンが現れたあとには、しばしば発狂寸前の暗殺者が残されていた。

そして、旧市街の奥では、ふたたび各シンジケートの会合が開かれていた……。

オーク材のテーブルの向こうで、〝錬金術師〟ファレルが立ちあがった。

金髪をとかし、極上のスーツを着ている。若い顔だちは整っているが、冷酷だ。

「さて皆様、いろいろとご苦労なされたようですが、そろそろ私の前回の要求について考えてくださってもよろしいのでは？　すなわち私ファレルが、ネオ・ナリタを支配する」

……誰も承知とは思えない険悪な顔つきである。

「ファレル、お前さんの長広舌は聞きあきたぜ。口は達者だが、アルディーンの始末はどうした!?　奴はあいかわらずこの街で毎晩、おれたちの邪魔をしているぜ？」

シカゴの使者、ロイコの嘲笑にファレルは答える。

「闇の皇子を倒すには、それなりの準備がいります。ようやく、それも終わりましたが……だから、こうして皆様を呼んで、二度目の話しあいをしたいのです。

闇の皇子を始末したら、そのときは私がこの街をもらう……あなた方はすみやかに手を引いてくださる。それでよろしいですか？」

よろしいわけがない……ロイコがせせら笑う。眉ひとつ動かさずに見ていたアイヒマン

が、ふとかたわらの美女に声をかけた。先回の会合ではいなかった者だが……。
「梨花夫人、あなたはどう思われますな？」
……女賊はあでやかなしぐさで肩をすくめ、軽く本心をかわした。
「ホホホ、まだ私、この街で仕事をするかどうかも決めておりませんのに……今日ここへ参りましたのは、ひさしぶりに男らしい方々のお顔を拝見するため」
冷血の彼でさえ眩惑されるような微笑みを浮かべて言う。
ファレルがそこで振りむいた。
梨花夫人からずっと人々の顔を見まわし、わざとゆっくりしゃべりだした。
「〝闇の皇子〟を制する者が、このネオ・ナリタを制するのです。理由は、もうよくおわかりのことと思います。残念ながら、あなた方には有効な解決策がおありでない……ところがこの私にはあるのです！　それならば、引きあげて私にまかすのが利口では？　どのみちこのままでは、誰にもチャンスなどありえないのですよ！」
勝ち誇った顔を、疑心半分怒り半分で見つめている……ファレルはさらに提案を重ねた。
「もちろん、ただでとは言いません……」
そう言いながら、ポケットからシガーケースのようなものを取りだして開けた。
うす青いカプセルがいくつか並んでいる。いぶかしげに見ていた組織の男たちの顔が、ハッとこわばった。ファレルの手があざやかに動く……。

「ケミカル・ブルーです。どうぞ手にとってお確かめください」
魅せられたように、一人ずつ手をのばした。
それは極小の容器に入った最強の麻薬であった。
ケミカル・ブルー……ほぼ50年ほど前に、ある科学者が発見した半合成の麻薬物質だ。
ヘロインに比べて数十倍の効果があるが、シンジケートが扱うにはただ一つ大きな欠点があった。
「……ナンバー4のヘロイン15キロから、たった100グラムしか作れない」
誰かのうめくような声に、鷹揚に微笑んだ。
「たしかにそうでした、とても〝商品〟にできるものではありません……今までは。しかし、私がまったく新しい合成法を開発したといったら？」
いくらでも好きなだけ合成できるといったなら？　部屋の中の空気に一気に火がついた。
「まさかッ!!」
〝私が錬金術師と呼ばれるのをお忘れにならないように〟
今や部屋じゅうの男たちの視線は、ファレルの一挙一動に釘づけになっていた。
「いかがでしょう、みなさん？　どうぞそのカプセルを一つずつお持ちになって、本物のケミカル・ブルーであることをお調べください」
1カプセルでも数千Gの代物だ。それをファレルは平然と持っていけと言う……。

「……私にはいくらでも作れるのですからね！　そこで、もう一度私の要求を言わせてもらいましょう。私にネオ・ナリタをいただきたい。闇の皇子も確実に処分してみせます。

そしてこの街が手に入れば、私はここを拠点にしてあなた方にこの薬をお売りできるわけです。いくらでも！　お好きなだけ‼」

〝私たち双方が巨大な富を手にできるのです‼〟熱波のような空気が室内にうずをまいた。まずアイヒマンが立ちあがった。

「……よろしい、それではこのカプセルをいただいていく。私のほうで品物の確認ができれば、あなたのいう言葉の半分が信じられるだろう。しかし闇の皇子については、どうするのだ？」

秘策など、あるとは私には思えない！　アイヒマンの言葉は、ほぼ全員の考えのようだった。

錬金術師と名のる男はうなずいて、まるで気軽な約束でもするように言った。

「けっこうです、それなら約束しますよ。1週間以内にアルディーンを旧市街から消してお目にかけましょう。そう……ちょうど好都合にフェスティバルがはじまりますね。当日、またこの旧市街でお会いしましょう」

ナリタ署はおそらくフェスティバルの人出に忙殺されて、動きもとれずにいるだろう。集会には好都合……誰もがうなずいた。

「そのときまでにアルディーンの始末はかならずつけましょう。ケミカル・ブルーの注文があれば、そこでお受けしましょう。ただし、そのときは私がこの都市のキングです……」

暗黒街の男たちは、それから一人ずつ席を立つと無言で出ていった。

会合は終わったのだ。

……優雅なしぐさで立ちあがり、部屋を出ていこうとした梨花夫人はファレルに声をかけられて立ちどまった。

「美しいマダムに、おみやげはお持ちいただけないのかな？」

さっきただ一人、カプセルに手を出さなかったのを見て、呼びとめたのだ。

「麻薬は興味が持てないの。知っているはずでしょう？」

この男と梨花は香港で多少顔見知りだった。〝錬金術師ファレル〟――たしかに自分からそう名のっていた。

うぬぼれの強すぎる愚かな男。お前は自分で思っているほど賢くも、度胸もないのよ。これしきの器量では、梨花夫人の厳しい好みにとうてい合わないのだ。

そしてジャングルの掟は正直だ。梨花夫人の知るかぎりファレルには、さしたる組織も金もないはず……。

――それなら本当に合成法を発見したというのかしら？

一瞬くれた流し目に感づいた男は、キザな動作でその手を取り、ニッと笑った。

「梨花、今度ばかりはこちらについたほうが得ってものだぞ……」

威梨花は答えず、ふくみのある笑いを浮かべた。たった一つ、この男の言葉に賛成だったのだ。

〝闇の皇子を制する者が、このネオ・ナリタの戦いの勝者になる！〟

ファレルの秘策などに関心はなかった。梨花には梨花のやり方があるというもの……。

――闇の皇子を封じるのは何も武器だけとはかぎらない。要するに彼が敵でないようにすればいいのだわ……そして、それこそが梨花の夢と望み！

「……なあ梨花。早く俺についておいたほうが得だぞ？　望みは何でもきいてやるから」

甘ったるくささやく恥知らずの顔をチラリと見あげた。この男がこんな自信を持つには、一人では絶対に無理なのだ。そもそも一人では、これほどのヤマは考えもつかないはず……。

おそらく誰かいるわね？　彼はただその言葉をうのみにしゃべっているだけなのだろう。

美女の視線が冷ややかに彼を射抜いた。

「……それほど言うなら教えてちょうだい。ねえ、ファレル。今回あなたの上にいるのは、いったいどこの何者かしら？　その人とならお近づきにもなりたいわねえ」

ファレルの顔が急速に青ざめ……そのとき、通りから最初の銃声が聞こえた。

会合が終わり、通りに出た人間たちは思いがけない驚きにあう仕組みになっていた。逃げ道はすっかり封鎖され、ナリタ署のパトカーが何台もライトをつけていたのだ……会合を呼びかけたファレルの不手際である。ささいなミスから、警察が会合場所を推測してしまった。

――一瞬ののち、銃撃戦が始まった。

ロイコの動きは早く、追いすがるナリタ署の車を振り切っていちばんに逃げおおせたらしい。アイヒマンの部下たちは彼を守り、ビルの正面ホールから強力な重火器で反撃を続けていた。さしものナリタ署の包囲陣もくずれようとしたときに、ビルの横側の壁をふっ飛ばして突っこんだ黒い車がある。

メチャメチャになった車のドアを内側からひと蹴りで開けて出た黒い影は、両手に連射レーザーをかまえて叫んでいた。

「アイヒマン！　悪運はもう終わりだ。貴様の暗殺シンジケートもろとも地獄へ送ってやるぞ!!」

「ナイトハンドッ……撃て！　殺せッ!!」

……地獄のほうから出張してきたような死闘が開始された。

爆音と砲煙のなか、人々が入り乱れていた。ある者は殺しあい、ある者は逃げている。

一人になって上階をさまよっていた威梨花の手を、誰かが横から強く引いた。

「こっちです、梨花！」

一方、逃げ足の早いファレルは裏手から逃走し、近くの通りで一台の車に出会った。

運転席のウインドーが音もせずにおりて、中を見たとたんホッと安堵した顔になる……それは彼も知っているナルダンの秘書だった。

ザ・タワーのオフィスでも会っている……ナルダンには腹心のスタッフが何名かおり、なぜかみな彼のように有能で非人間的なタイプの男ばかりだった。

いかなる命令でも無表情に実行するようすは、ファレルの目にもどこか機械のようで気色悪かったが、今はただありがたいだけだろう。

後部座席には、ナルダンの姿があった。

眉をしかめたまま、ファレルを車に拾いあげると、安全と思われる地区に出るまでは報告も聞かなかった……狭い袋小路の行き止まりに車をとめ、エンジンも切ってしまう。

各シンジケートとの話もほぼ終わった……と聞いて、ようやくホッとしたらしい。

「それはなによりだ。彼らがのってくれないことには話にならないからな……」

この男ひとりの力では、とうていまとめきれぬ話だと思っていた。

――ケミカル・ブルーを出して見せたのは、やはり正解だったようだ。

もっと力のある男なら、〝闇の皇子の始末〟だけで十分各組織に手を引かせて見せただろう。だがファレルでは気迫も能力も足りない……。

――さりとて、これ以上切れる者を使っては危険がある。
ファレルがしきりと話しかけてくる。
「フェスティバルの日には、いよいよ例の合成法も教えていただけますな！」
彼の出してみせたケミカル・ブルーは、みなナルダンの手から来たものだった。
ナルダンの技術ファクトリーで、偶然に、あの麻薬の合成法が発見されたのだと聞かされていた。
――もちろん彼は企業家だから、表だって麻薬をさばくわけにはいかない。だが捨ててしまうなど、とんでもない宝の山だ……だから、片腕として俺が選ばれたわけだ！
ナルダンはファレルにこれを、必要なだけいくらでも渡すと言い、そのとおりにしてくれている。したがって、ファレルは彼の言葉をそっくり信じていた。
〝アルディーンの始末と、組織への交渉。この二つをかたづけてくれれば、君の能力を認め全面的なパートナーにするつもりだ。もちろん、そのときは合成法も君と共有するよ！〟
――どちらも難題だが、フフ、やりとげてみせるとも！
「あなたもすぐ、私を選んだことを喜ぶようにしてみせますよ！」
「あ……ああ、ありがとう」
ナルダンは一瞬、あいまいな笑顔でごまかしたが、ファレルは気づかなかったようだ。
ナサニエル・ゴードンに関してはどうなっているか……ナルダンは自信ありげにうなず

き、

「大丈夫、順調にいっているさ！」

とはいえ、このゴードンという男は、どうもいま一つわかりきれない相手だった。ファレルなどより何倍も扱いにくい、不可思議な男なのだ。

人の欲望をあやつることにかけては自信があるナルダンだが、この青年富豪を動かすのはひどく難しかった。どう誘いをかけても、奇妙に効果がない……あらゆる欲望の罠をさりげなくしかけてやったが、どれにも反応はなかった。

〝そんなはずはないのだが？〟

身体は不自由だが理知的な上流の青年だ。だが何か大きなナゾを、うまく隠しおおせている気がしてならなかった。

――うす気味の悪い……若造だ。

もっと簡単な相手だと思っていただけに、今では憎くてならないほどだ。

だが、彼にはなんとしても、計画の一部として踊ってもらわねばならない。

「まったく、私も苦労をしたがね。ついに予定どおりフェスティバルの式典に引きずりだした」

〝どうしてです、ミスター・ゴードン？　素晴らしいではありませんか！　この式の記録とともに、あなたの名前が都市の恩人として長く記憶されることになるのですよ！〟

〝私はどうもそうした人目に立つ場所は苦手です。もともとあなたがご計画くださったフェスティバルではありませんか？　どうぞその名誉はあなたのものになさってください〟

憎い奴！　金に恵まれた階級の者なら、今度は名誉に飛びつくはずなのに……。

フェスティバルへの寄付も言う以上の額をあっさり出した。ところが、称賛が確実な席には出ようとしない……何度も持ちかけたが、いつも礼儀正しく断られてまいっていた。

――だがそれも、ようやく承知させてやった。

いつものように断りかけたとき、ふと何か思いだしたように考えを変えたのだ。奇妙な痛みのある表情だったが……。

「たしか、そこで彼を始末するのでしたね。しかしどうやって？」

ケミカル・ブルーの製造には、いずれ大規模な工場も必要だと聞かされていた。

それにはゴードンの工場しかありえない、とも……ファレルの質問にナルダンは答えなかった。そのときが来ればわかる、とだけ言う。

そのはずである。どうやって……が知れたらファレルは使いものにならなくなる。

――あわれな奴、この計画はお前が考えているよりずっと大きいのだ。

だが、とりあえずフェスティバルの日に各組織は旧市街に集合する。そこが肝心なのだ。

アルディーンへの罠が整ったのも、喜ばしいことだ。それについては、ナルダンに考えがある。ネオ・ナリタの妖魔は非常に怜悧で賢い……ふつうにおびきよせたのでは、どんな罠

にもかかりっこないだろう。シンジケートのたび重なる失敗も、そこが原因だ。「……怒りで逆上させてから、追いたてることだ。できるかぎり人を死なせ、街を荒らしてやるといい」

ファレルが疑いもせずうなずいたとき。外からかすかな物音が聞こえた。

ネズミではない誰かが逃げる音だ。

ファレルがすかさず飛びだして、胸にナイフを突きたてる……生酔いで陰にうずくまっていた不運な男だった。

〝これだから、この街は油断できない〟、ファレルはニヤリと笑いナイフを抜いた。

死体を早く片づけなければ……ナルダンに、彼はよい手があると言った。

「ナサニエル・ゴードンの工場はできるだけ荒らしておくほうがよいでしょう？　こいつは工場の塀に引っかけておきましょう。騒ぎになりますよ」

残酷なアイディアにナルダンは、〝よかろう〟とうなずいた。

一方、もとのビルに戻ってみれば、激しい戦闘はまだ続いていた。

銃声と爆発音がたえまなく聞こえてくる……ナリタ署対アイヒマンの白兵戦の音だ。

威梨花は上の排気ダクトにまで引っぱりあげられ、そこに隠れていた。

〝息をひそめて、できるだけ物音を立てないように〟
手を引いてここまで隠してくれた相手は、耳もとでそうささやいた。それから身軽にいってしまおうとしたのだが、梨花は小さな悲鳴すらあげ、彼を引きとめてしまった。
爆音がしだいに遠くなり、間があくようになると……ようやく梨花も息をついた。
「私なんかをどうして助けてくれたの？　アルディーン」
狭い場所で抱きあうような姿勢でいた少年は、自分でも首をかしげている。暗闇で顔もよくわからないが、かすかに微笑んだようでもあった。
「……僕にもよくわからないのです」
〝それよりなぜあなたは会合に出席などしていたのですか!?〟責める口調のアルディーンに、梨花は優しく答えた。
「誰かあなたを始末できるなんて言う奴の噂を聞いたの。それで確かめにきたのよ」
来てみれば、それはファレルだった。
「たいした男でもないわ……あなたの敵じゃないでしょうね。でも気をつけてね？　ひょっとしたら誰かが後ろで糸をひいているかも……」
〝ありがとう、梨花〟素直なたったひとことなのに、胸が高なる気がするのだ。
梨花はファレルについて知っていることを話しつづけた。
麻薬を扱う男、香港でも見かけたことがある。自信家で支配欲が異常に強い。

「どこかの没落貴族の血を引いているとか言って、自慢にしていたわね」
だから生まれつき支配する能力があるつもり……梨花の見るところ、気品も威厳も数代前にとっくに堕ちていた。
――嫌な奴め、よくもこの梨花に触ったもの……もうれっきとした旦那様もいるのに！
涼はケミカル・ブルーが何より気にかかった。麻薬についてはあまり知らない。
――でもそんなものが、本当にいくらでも合成できるなら大変なことだ！
そのとき、同じ階のどこからか恐ろしげな声がひびいてきた。
「威梨花！」
梨花夫人がハッと身体をおののかせた。ナイトハンドの声だ……見つかれば即座に生命がない。目をつむり、さすがにふるえている気配だ……涼の手がかばうようにまわされた。
ナイトハンドのレーザーは、すべて一瞬でけりをつけてしまう。
おかげで涼は考える前に行動していた。彼が知れば怒り狂うだろうが、それでも……。
――ただこの美しい人を、ナイトハンドに殺させたくなかったのだ。
「梨花夫人、あなたはその……犯罪者だし恐ろしい人だけれど、ナイトハンドが言うほど悪い人ではないような気がするから」
「ありがとう、うれしいわ」
〝でも、ばれたらきっと絶交されるぞ〟半分本気で心配を始めていた。

「かまうものですか、あんな奴ッ……」

探しもとめる声がだんだん遠ざかっていくと、美しい梨花は吐きだすようにそう言った。

――陰険な獣め。仮面を取ればどんな顔をしているやら……きっと目もあてられない醜男ね？　女につれなくされた恨みが積もって、あんな卑劣な性格になったのだわ！

〝ウーン、ナイトハンドはわりとハンサムですよ〟アルディーンが苦笑しつつ言った。

女性を憎んでいるのは本当だが、そんな理由ではない。

――彼は愛したひとに裏切られたから……。

本来ならば彼の復讐は、七賢人の崩壊を最後にとげられているはずなのだ。

だが、まだ彼の心からは憎しみの炎が消えていない。あたかもまだ敵を殺し足りないように、ナイトハンドは出合う組織をかたはしから制裁している。

……殺しても殺しても、心が満たされることはけっしてないのだろうが。

どこか思いに沈む声でアルディーンがつぶやいた。

「僕はあの人の笑い顔がいちばん好きだな。もっとたびたび笑うようにすればいいのに……」

ナイトハンドの笑顔ですって？　梨花夫人がゾッと身ぶるいした。

「あいつの笑顔なら知っているわよ。前に香港で一度、あの畜生と決着をつけようとしたことがあるもの。腕の立つ手勢を集めて、罠を張って……でもくやしいわね、全滅だった。

床一面、血まみれの半殺しになっているのを見まわして、あいつニヤリと笑ったの！　あれで私、香港が嫌になったのだわ！」

「その……そういう笑い方じゃないんですけどね」

梨花夫人は聞く耳を持たずに首を振った。

美しい街だったのに……そしてひどく残念そうにくちびるをかんだ。気に入りのオモチャもみんな残してくるほかなかったのだ。

――梨花の大好きな小さな宝石店も（盗品専門である）、粋なクラブも……（金曜日の夜、常連にかぎって彼女が何をさばいていたかは、この際考えてはいけない）。

〝もちろんネオ・ナリタはいい街よ！〟……梨花があわててつけくわえた。

「でもいつか香港のネオンも見せてさしあげたいわ。それはそれはきれいなの……」

アルディーンが優しく笑う……乱闘の物音もやっとやんだようだ。

ホッと息をついたのは、まずアルディーンのほうだ。それから少しククと笑った。

「さあ梨花……もう離してください」

排気ダクトを内側からあげて、ようすをうかがう。

「……ああ、やっとあなたが見えるようになったわ」

うれしそうに梨花がつぶやいた。こんなときにまだそんな……振りむいた涼は、ふと最初に彼女を見たときのことを思いだした。

あのとき、梨花夫人は庭園に香卓を出して祈っていた。あれは……何だったのだろう？

「願いのあるときは星を祭るの。香港ではよくやることよ。でも見られていたなんてすこしも知らなかったわ。いけない子ね？」

アルディーンはおもはゆそうに下を向いた。あのときは白い霧の中で、何かの精のような姿に思わず見惚れてしまった。

「こんなに美しい人は見たことがないと……本当にそう思いましたっけ」

うれしいわ……梨花がウットリとささやいた。

何を祈っていたのです？　その問いに梨花は微笑んで、耳飾りを揺らし、

「よい殿御にめぐりあえますように……」

〝梨花、あなたらしい！〟笑い声をあげた彼の手を、梨花がきつく握りしめて言った。

「願いはかなったわ」

「梨花、僕はあなたの気持ちにはこたえられない‼」

悲鳴に近い声で、アルディーンが身体を引こうとした。梨花夫人はますます手に力をこめる。なよやかな手が、振りほどかれまいと必死になっていた。

〝アルディーン、お願いよ、私を見て！〟

「なぜ、私を避けるの……私が嫌い？　悪い女だから？　でも梨花はあなたを愛している！　アルディーン、ねえ、あなたが愛してくれれば梨花は何だってするわ。悪事がお嫌いなら二

度としません！　何でもあなたの言うとおりにするから!!」

美しい目に涙があふれていた。アルディーンは凍りついたようにその瞳を見つめている。どうしても目をそらすことができないのだ。

なにもかも焼きつくすような炎が、手を伝わって届きそうなほど熱く、強い。

「……愛しているわ、アルディーン。お願いよ……梨花を見て！　あなたにとって梨花は何の魅力もない女？　それならいっそ殺してちょうだい！　梨花は策略も使うし、あなたに悪いこともしたわ。でもそれは愛してほしいから……乱暴な手を選んだのは、それだけ待つのがつらかったからよ！　好きよ、アルディーン……梨花を愛してほしいの！」

いかないでお願いと、梨花夫人が叫んだ。だが涼は彼女を突きとばすようにして、下に飛びおりた。そのまま……一度も振りかえらずに、風のように走りさった。

通りに出て、もう誰もいなくなった街路を黒衣の影がまだ走りつづけている。

耳にまだ梨花の声が、こびりついて離れないのだ。

〝愛しているのよ、アルディーン！〟

――でも僕は違う！　違うんだ!!

何度も首を振ってこぶしを握りしめる。倒れるまで走らなければ、どうにかなってしまいそうだ。わけもなくたまらなかった。

恐ろしいのはこの胸の鼓動だ。

あの目に見つめられて、激しい言葉を聞くと、まるで別の自分のように胸が熱くなったのだ。そうだ……狂おしいほど美しい梨花のまなざしが怖かった。あのまま見つめていたら誰でも火のような熱情に巻きこまれてしまうのだろうか？

「違う……違うッ!!」

夜空に少年の声がひびいた。

息ができなくなるまで走ってから、ようやく涼は自分の場所に戻ってきた。

廃品置き場のはずれの倉庫だ。

闇の皇子の黒衣を変えて、どこか隠れるように近づくと、明かりがついていた。真夜子がもう帰っている……その瞬間、恐ろしさも不安もかき消すように消えてなくなった。

嵐のような胸の鼓動が、スッと静まっていく……。

「真夜子、お帰り……今日は早かったんだね！」

歓声をあげてドアを開けると、狭いキッチンのほうから返事があった。

「あら、涼。遅かったじゃないのよ、不良！」

——その声をきいたとたん、鎖がバラバラにとけたように感じた。

顔を見ると、何もかも忘れてしまった。温かさとうれしさだけがいっぱいの笑顔で、真夜子のもとに駆けよることしか頭にはなくなった。

赤いジャンパーの少女はツンと顔をあげ、ポニーテールをかっこよく振った。

「なによ、甘ったれ。こんな時間までどこをウロウロしていたの？　怖がりのくせにさッ」
〝役たたず!!　あんたがいないから、あたしがご飯つくったじゃないの！〟
真夜子はわざとツンケンしてみせた。居候の涼が素直にオタオタすると、はじめて上目づかいになってナベを開け、
「でね、あたし……こんなに焦がしちゃったのよ。どうしたらいいと思う？」
のぞきこんだ涼は、大丈夫とうなずいた。
「このくらいなら、おいしくできるよ。あとは僕にまかせてね！」
〝早くしてよね、あたしお腹ペコペコなんだから！〟
真夜子はすかさず涼にナベをあずけて、自分はテーブルに陣取った。そして、
「……早くしてくんなきゃ死んじゃうわよッ。いいわね、涼？　親分のあたしがいなけりゃ、あんたなんか3日でおだぶつなのよ。わかっているでしょうね!?」
――はいはい、真夜子。
怒鳴られながら、イソイソと小さなテーブルに夕食を並べていく……。

数日後の午後、お使いから帰った涼を、赤鍋亭でお客が待っていた。
「涼ちゃんにお客だよ！」

――ネフ・ブラウンと車椅子のマリア。カウンターから真夜子も手を振った。
この前のクッキーのお礼に来てくれたのだ。
「みんな大喜びしたの、本当にありがとう！」
「これは僕の許婚のマリアだよ。どうしても来て、お礼を言いたいというから……」
ネフは恋人の肩を抱いて紹介した。
「ああ……あッ、いえあの、初めましてッ！」
あやうく涼は初対面のフリをして見せた。あぶない、あぶない。
――この女性とは本当は闇の皇子で会っているんだ。
「トロいわねえ、もう！　あいさつひとつちゃんとできないの？」
真夜子が頭をゴンとはたいた。〝こういう奴なんです！〟
カナリヤのような声のマリアがはじけるように笑った。それから涼を見て、
「あのね、じつは今日来たのはお礼のほかに、お願いがあるからなの。ね、どうしてあんなにおいしいクッキーが作れるの？　あんなの初めてよ、もう秘密が知りたくて知りたくて！」
そんな、秘伝だなんて……涼がパッと赤くなった。その後、ちょっと得意そうな声にかわり、〝でもまあ、すこしだけ工夫してみたところもあるんですよ！〟
「そんなたいしたことじゃないですけど。でも、おいしいとすればそこがコツかも……」

〝ぜひ教えて!!〟もちろん、涼は大きくうなずいて説明しはじめた。
真夜子はさっそくネフにくらいついてインタビューだ。
「ゴードンズ・ガードについて話していただけませんか？　きっかけはいつ？　どこで？　メンバーは今、何人くらい？　あっ……あとネフさんの好きな色と食べ物は!?」
「そ……そう、淡いブルーかなァ？　マリアの目の色だし……」
ネフがしどろもどろに返事をするのが聞こえる。
涼の見るところ、この前の夜、ナイトハンド相手のほうがよほどうまくしゃべれている。
「ウーン、きっかけって言われても……」
「あら、もしかしてすごく個人的な感動だから、秘密にしておきたいとか!?」
……街で行動するメンバーは、いちおうそろいのシャツかバッジをつけているらしい。笛を合図にすることもあると言った。
「ほら、ケンカなんかの最中だと、何を怒鳴ってもなかなか聞こえないだろう？」
そう言いながら、ネフはちょうど持っていたホイッスルを出すと、集合の約束などいくつか合図を吹いてくれた。すると、
「……ネフ、ケンカか!?」
たまたま通りかかったガードの若者が腕まくりして飛びこんできたので大笑いになった。
ネフとマリアたちは（飛び入りのメンバーもふくめて）、夕方まで話していった。

夕焼けで赤くなった通りを帰っていく彼らに向かって、涼たちは元気よく手を振った。

——みんないい人だね、真夜子？

なんだかうれしくなった涼がニコニコと振りかえると、真夜子はなぜか暗い瞳をしている。

「真夜子……どうしたの？」

「どうもしないわ」

それでも心配そうな涼に気づくと、真夜子はギュッと口をむすんで、首を振った。

「なんでもない！　ただちょっと怖くなったのよ……」

——怖い？

少女はどこか遠い目をして、ネフたちの去っていった通りを見つめている。

「そうよ……べつにどうってことじゃないわ。みんないい人だわ。ただね、涼……あたし知ってるのよ。旧市街ではいつもいい人から先に死んでいくのよ。信じたくないけど、ずっといつもそうだったもの……」

突然、気弱なはずの涼が、真夜子の肩をしっかりと抱きしめて言った。

「真夜子、もう大丈夫……大丈夫さ」

暖かい腕、優しい力……ときどきだけど、こんなにいい奴。そのとき、胸の中に電撃のような不安が走った。

――もしそうなら、涼だってすぐにいなくなってしまう！

今まではこの街で、いい人、優しい人が生きのびられた試しはないのだ。振りかえると涼はまるでガラス細工のようで、誰より先に淡雪のように消えてしまいそうだ。

澄んだ瞳があふれるような優しさで自分を見つめている。

一瞬、寒くなるほどのふるえが真夜子の勇気をあざわらった……。

「うるせえ、畜生！　ゴードンの飼い犬め!!」

「なんだと、もう一度言ってみろッ！」

旧市街の工場ではゴードンズ・ガードとほかの工員たちとのあいだに、激しい対立が生まれはじめていた。それは本来は自然な感情だったのだろう。生き生きした連中ばかりがグループをつくり、何かあれば街角で結束してはたらいている。

ほかの目には、なぜかみな自分より強そうにも思えるのだ……多少の反感は当然である。だが、少しずつでもネフたちの仲間は増えていたはずだ。流血のケンカを瀬戸際で止められ、あとになって感謝されたことも多かったはずなのに……誰がはじめに彼らを〝犬〟とふれまわったのだろう？

対立は奇妙なスピードで広がり、大きくなる。

……そしてある朝、工場の塀に男の死体がかかっていた。
彼がたまたま工場の札つきの一人だったことから、導火線に火がついた。
「貴様ら狂犬だ！　こっそり殺っちまったんだろうが!?」
「バカッ、なんてことを!!」
「隠したってわかってるんだよッ！」
旧市街の街角のそこここで、二つの勢力に分かれていがみあっている。ガードのメンバーは結束こそ堅かったが、しかし数では圧倒的に少なかった。
工員同士のケンカで、病院へいくほどのケガをするようになった。
誰が彼らをそうさせたのだろう？
……荒れた心のスキをぬうように、あの薬ケミカル・ブルーが市内に出回りはじめた。
従来の麻薬とはくらべものにならない力は、一度でも人を虜にする。
まるでオモチャのようにばらまかれて、ナリタ署は恐慌状態となった。強盗殺人事件が異様に増え、逮捕された犯人の多くが中毒患者である。
ナイトハンドもアルディーンも狂気のごとく街じゅうを調べまわったが、どの地区でも製造場所をつきとめられなかった。ファレルという名がわかっていても、なお旧市街の迷宮は足跡をくらましてしまうのだ。ファレルはなぜかゴードンの工場の周囲でも暗躍していた。

主に事故や、犯罪ばかり……目的は妙につきとめにくい。
いらだち、焦る涼にはしだいにミスさえ増えてきた。恐ろしいことに、組織との戦いまで逆転しかけている。
ネオ・ナリタに何が起きているのか……。
新米記者の真夜子も、事件の連続に飛びまわっていた。
「涼！　あたし、しばらく社に泊まりこみしなくちゃならないのよ……そのあいだ、あんた一人でやれるわね？」
泊まりこみ……涼がちょっと震える声で返事をした。
「じゃあ真夜子、帰ってこなくなるの？」
〝あんた本ッ当に怖がりね？〟バカにしたように真夜子は言ったが、それでも手をのばして頭をクシャクシャになでた。
「今までだって、何度も泊まりこみあったじゃないの！」
「ウン、でも……」
街に充満する悪意が、涼を不安にさせていた。
――そんな目をしないでよ、弱虫！　心配になるじゃないの……。
真夜子はわざと明るく手をたたくと、
「あんたはここでネズミとパーティーすればいいわ！　日が暮れたら危ないから、チビ助は

絶対外へ出ちゃダメ！　いいわね？　お弁当とか持ってくるのは、断乎許さないわよ！」

バッグになけなしの着替えをほうりこむと、あわただしく出ていってしまった。

真夜子のいない部屋……涼がふと身震いをした。

――怖いんじゃない。でも……いてほしかった。

こんなときには。

放火と火事、殺人と狂気。闇の皇子もまた毎晩のように事件に引きずりまわされていた。

誰かが誰かを闇討ちしたとか、食堂ではそのたびに涼が耳をふさぎたくなった。

重苦しいつらい気持ちで帰っても、真夜子はいないのだ。

ある朝……たった一人で目をさまし、廃品置き場から食堂へ向かう道すがら、涼は街のあまりの荒れように目をみはった。〝わずか数日でこんなになるなんて……〟

街角はよごれ、ガラスのかけらや焼けたゴミがそこいらじゅうにたまっている。

闇の皇子といえども、壊された建物まではどうしようもなかった。

気がつくと、誰の顔もとげとげしくこわばっているのだ。

――こんな街だったか、ここは？

たしかに汚かった、みんな貧しかった。犯罪もケンカも毎晩のように起きていたけど、朝になれば機嫌のいい笑顔だって見られたはずだったじゃないか⁉

……涼も知っている食堂のお得意さんの一人が、仕事仲間の男とわずかなお金のことで

狂ったように言いあらそっていた。思わず涼がとめに入ると、
「うるせえぞ、このガキめッ！」
まるで見知らぬ人間を見るような目でにらまれて、代わりになぐられた。壁にたたきつけられてつい声をあげると、通りすがりの誰かがヘヘッとせせら笑ったようだ。
ふいにナルダンのオフィスで見た模型の街が、美しい幻のように記憶によみがえった。ピカピカした、傷一つないあの街にくらべて……絶望が、はじめて涼の心を黒く染めた。
〝こんな……こんな街が！〟大きく開いたガラスの瞳に嘲るような幻が見えていた。
――こんな街ッ……どうせ、きれいになるわけがないんだ！
そしてある夜、ついに最悪の事態が起きてしまった。
何者かがネフ・ブラウンの首に賞金をかけたのだ。
騒ぎを聞いて、アルディーンが現場に駆けつけたときにはすでに、彼のアパートの前に100人からの男が集まっていた。みな何かにとり憑かれたような殺気だった表情をしている。
ナリタ署の三日月警部はめずらしくムチャをして、手ひどい傷を負ったらしい。ひたいから血を流していた。
「……出てこい、ネフ・ブラウン!!」
「人殺しの卑怯者、俺たちは話があるぞ！」

地の底からわきあがるような声が、次々にネフをその前に引きずりだそうとしていた。
さいわいネフは、まだ中にいるらしい。
アパートのほかの住人は、とっくに外へ逃げている……。
黒いオートバイのそばの闇の皇子を見て、真夜子が走ってきた。
「ああ、アルディーン！　大変なの！　工員たちがおおぜいでネフを……」
さすがに蒼白な頬をしている。黒衣の少年は落ちつかせるようにその肩に手をかけて、
「それで彼は？」
「まだ中にいるわ。出てこないといい……出たら生命がないかも！」
そのとき、暴徒の内から新しい叫び声があがった。
「でないと建物に火をつけるぞ！」
真夜子がアッと肩をふるわせた。しかもネフがついに表に出てきたのだ。
――ダメよ、ダメ！　殺されちゃうわ!!
〝大丈夫、心配しないで〟闇の皇子はひとこと告げると、ケープをひるがえして群衆のただなかに駆けていった。
……ネフ・ブラウンは自分から暴徒たちの前に姿を現した。まだ落ちついた声で、
「僕に何の用だ？」
〝人殺し〟という怒鳴り声があちこちからあがった。ネフは彼らをまっすぐに見て、

「おい、それはどういう意味だ!?　ふざけるなッ！　僕がいつ、誰を殺したんだって!?　濡れ衣を着せる気なら、いつでも受けて立つぞ！　こっちは潔白なんだ!!」

うるせえッ……と一人の男が吠えるように言った。

「貴様が殺したっていう人がいるんだ！　証拠だと？　貴様がそんなバカじゃないことぐらい、ここにいる誰もが知っていらァ……うまく逃げようったって、そうは許さねェ！」

「そうだ、かたきうちだ!!」

〝待てッ、話を聞けッ！〟数歩下がったネフに、バラバラとつぶてが飛ぶ。

暗闇ではアルディーンが、駆けつけてきたもう一人の黒衣の腕をあやうく押さえていた。

「……ナイトハンド、待て！」

「バカッ、邪魔をするな！」

〝今すぐ解散させる！〟と叫ぶ彼は二丁のショットガンを手にしている。闇の皇子はきっぱりと首を振った。

「君のやり方じゃ逆効果だ……僕にいかせて！」

言うなり身軽に飛びあがった。

手にそれぞれ武器を持った男たちが、ゾッとするような雄叫びをあげてかかろうとしたときに、頭の上から冷たい声がひびいたのだ。

「……お前たち、何をする気だ？」

見上げた男たちは、はじめてそこに闇の皇子がいたのを知った。

〝アルディーンだ〟さすがに彼らは、ややあとずさったが、それ以上は絶対に動かない。

……黒衣の少年は奇妙にくつろいだようすで、狭い壁のくぼみに足をかけ、ネフ・ブラウンを指さして言った。

「その男が人を殺したというのは本当かい？　誰が見た。いや……誰に聞いた？　ひょっとしてそれは……」

一瞬の直感が心にひらめいた。

「ファレルという名の男だろう？」

殺気だっていた集団の中で、言いあてられた数人の驚愕があたりに伝わった。

「フーン、そうか、その男が殺人を証言したわけか……ところで彼は今どこにいる？　ここにはいないね、どうしてだ？　ここにいる男が本当に殺人者なら、吊るし首もこの街のやり方かもしれない……だがファレルはなぜ、正義がおこなわれるのを自分の目で見にこない!?」

いもしないファレルの言葉を信じて、人一人を血祭りにあげようとしているのか！　きしるような妖魔の声が、上空からあざ笑った。足なみがふと乱れて、ざわめきが起きる……。

〝畜生、みんなどうしたんだ！〟一人の男が勇気をふるいおこすように叫んだ。

「おい、何をかまうもんか！　人殺しなんだろう、ネフは!?　だから賞金も２０００Ｇ(ゴールド)か

かっているんじゃないか！」
「そうだ、賞金首だ！」
――賞金!?　ああ、そうだったのか！
２０００Ｇは大金である。一瞬、活気づいた叫びがほうぼうであがったが、水をあびせるような笑い声がそれを押さえこんでしまった。
「ハハハハハ、賞金!!　２０００Ｇだって!?」
軽蔑のまなざしが冷ややかにそそがれた。
「それを大金だと思っているんだな、お前たちは……そのためなら、無実の男でも殺して差しだそうというのだな？
だが見たところ、お前たちは１００人以上いるじゃないか。賞金を１００人で分けたら、いくらになると思う!?　一人20Ｇにしかならないぞ！」
あきらかに考えてもみないことだったようだ。大きく息をのむ音が、あちこちから聞こえた。闇の皇子の声がひびく。
「それでいいのか!?　20Ｇ！　たった20Ｇで、人ひとり殺して満足か!?」
〝それともそうじゃないのかな？〟……不意にその声に人らしくない期待が加わった。
「分け前は、人数が減るほど多くなるものだったね？　金のために1人を殺すのなら、2人も3人も同じことだっけ。ひょっとして……その男を殺したあとは、お前たちで殺しあいを

はじめるかもしれないねえ？」

不気味な喜びを隠そうともしないで、白い頬に血も凍るような笑みを浮かべ、

「素敵だ！　ハハハ、何を驚いている？　みんな僕が妖魔だということを忘れているようだね。殺しあいを見るのは大好きさ、そら……お前たち自分の隣の奴を見るといい。誰かな……何を持っている？　そいつが次に殺す奴だよ！」

恐る恐る、誰もが自分の周囲をうかがって青ざめた。晴れやかな少年の声がわざと追いうちをかける。〝楽しみだな！　最後の一人になるまでここでずっと見ていてやるよ！〟

ついに一人の手からナイフが取りおとされ、続いて次々と武器が投げすてられた……。

「……すごいわ、アルディーン！」

軽やかに降りてきた彼は、真夜子の輝く憧れの視線で迎えられた。

「ウソみたい！　アッというまにあれだけの人数を鎮めてしまうなんて。力も使わないのに……あなたにできないことってないみたい！」

本当はまぶしくてたまらないのに、わざとさりげなく微笑みかえして、

「真夜子、私はただ、誰にもケガをさせたくなかったのですよ」

「アルディーン……」

——やっぱり、さすがはアルディーンよ！　ああ素敵！　かっこいいッ！

あわいタメ息を感じてうっとりしかけた耳に、またしても悲鳴が聞こえた。

どうして!?　すかさず振りむいた涼の目に、燃えあがる火の手がうつった。建物が……なぜッ!?　古いアパートの窓から、まるでいっせいに起きたような火事であった。激しい炎が見るまに全階に燃えひろがる……。

「いかん、放火だ！」

パトカーの警官が叫んで、無線で消防車に怒鳴りまくった。

――いったい誰が火をつけたのか!?　暴徒は解散したはずなのに！

ネフ・ブラウンが建物を見あげて絶叫した。

「マリアが……子供たちがいるんだッ！」

アルディーンがすぐうなずいて建物の中へ飛びこんでいこうとしたのだが、すでに遅く火に追われた娘と子供らは、窓わくにつかまって助けを求めていた。

〝子供をおろせ！〟小さい子たちが4人、飛びおりてなんとか受けとめられた。怖がって泣く子も、マリアに言いふくめられて必死に窓を離れた。

最後に残った彼女にネフが叫んでいる。

「飛びおりろ、マリア！　僕が受けとめる!!」

だが彼女の車椅子の脚は、窓わくを乗りこえることができないのだ。

〝ネフ、ダメッ。できないわ！〟絶望した悲鳴がひびくと、まだ上に残っていた子供の声が重なって、驚かされた。

「マリア姉ちゃん、もう一度ッ、俺がささえるから！」
あのウィリーである。
火はもはや全体をなめつくし、どうすることもできない。悲鳴がまるで歌声のようにあたりにこだまするのだ……。
「いやッ……いやッ、助けてお願い！　お願いだから、誰か助けて！」
――マリア!!
そのとき、建物の壁がくずれた。
落ちてくる瓦礫の中で、ナイトハンドと涼が懸命に二人を受けとめようとした。車椅子のマリアはナイトハンドがとらえた、だがウィリーは……？
どこかのブロックでひたいをくだかれた子供の死骸が、アルディーンの腕に残された。青ざめたネフがそれを受けとり、無言で抱きしめている。
クッキーが欲しかった暴れん坊だ。
「こんな……こんな簡単に……」
胸にうずまいているものが、怒りなのか悲しみなのかよくわからなかった。
ネフは黙ったまま、ガードのバッジをむしりとると、道ばたで踏みにじっている……。
ただくちびるをかみしめている涼の背後で、これ見よがしなクラクションが鳴った。
振りかえると一台の車がヘッドライトを煌々と照らしながら、人々を蹴散らすスピードで

建物の角から現れた。
チラリと見えた座席の顔は笑っていた。若い金髪の、卑劣な笑顔。
「……ファレルだな!?」
妖魔の少年の瞳が光った。まぎれもない怒りだけが嵐のように全身をつつんでいる……ギリギリと歯を鳴らしてはね起きたその顔は、地獄からの火で照らされるように燐光を発していた。
真夜子がかすかな悲鳴をあげてあとずさる……はじめてアルディーンを恐ろしく思ったのだ。
——あれがファレル！　許さない!!
闇の皇子はひらりとバイクに乗ると、矢のようなスピードであとを追いかけた。
「アルディーン、待って！」
少女の声で振りかえったナイトハンドがハッと顔色を変えた。
——追うな、アルディーン！　罠かもしれない！
「やめろ、深追いはするなッ……」
だが、誰の声も耳に届いてはいなかった。闇の皇子は狂気のように車のあとを追い、そして……。
その夜から旧市街にアルディーンの姿は見えなくなった。

――闇の皇子は消えてしまった。

「ようこそ、アルディーン、この場所まで！」

どこをどう来たのかわからぬまま、アルディーンはファレルの車を追いつづけた。目もくらむほどの怒りで我を忘れ、おびきよせられていることにも気がつかなかったようだ。乗りすてられたような車が、崩れかけた屋敷の前に停められているのを見て、ファレルはこの中だと思った。

怒りはつのるままで、彼はその建物の内部が、表の荒れようにくらべて整いすぎていることも深くは考えなかった。地下から人の気配がする……そのさらに奥から明かりがもれていた。

「……そこか、ファレル！」

厚い扉を身体で押して飛びこんだ瞬間、部屋の中のライトがいっせいに消えた。

――これは⁉

思うまもなく、前後から奇妙な衝撃がぶつかり、身体が壁にたたきつけられていた。左腕に何かささったような強い痛みを感じた……反射的に手をやろうとした彼は、驚きで息をのむことになる。

――う、動けない！　なぜッ⁉

そのとき、頭上のライトがふたたびついて、はじめて涼は自分が見事な罠にかかったのを知った。

「ようこそ、闇の皇子……この場所まで」

それはかなりの広さを持つ空間で、白い床と壁のほかには何もなかった。

天井からスタジオのような強い照明が降りそそぎ、たった今の声は、そこからした。

首を振りあげたが、まぶしすぎて何もわからない……だが、向こうからは確かにこちらが見えているようだった。

アルディーンは今、両腕と脚をコの字形のくさびで壁にとめられていた。正面に見えるドアから入ってきた彼を、標本のようにこれで壁に打ちとめたのだ。

手も足も金具に邪魔されて自由にならない。

暗闇でぶつかった物体はすべてこのくさびである。軌道にそって飛ばされたものだとしたら、恐ろしいまでの精巧さだ……。

はじめの衝撃がすぎると、虜は全身でもがきはじめた。

力をありったけ使い、懸命に金具を壁から引き抜こうとしているのを見て、上からの声が楽しげに注意した。まるで洞窟の中のように反響がひどく、耳に痛いほどだ。

「あきらめたまえ、そのくさびは絶対にはずれない。ただの金具ではないよ、強力なマグ

ネットになっているのだ。君といえども、それだけははずせないのだから……ああ、ほら、そうしているからその手から血が出ているじゃないか？」

左腕の上腕をとめる金具だけは、軌道からずれたのだろうか……涼の腕の真ん中を打ちぬいてとまっている。もがくたび、脈うつような痛みが走った。

――くそッ……こんなバカな!?

じつに気の毒だねェ……上からの声が笑っていた。

「だが、もう一度やりなおすわけにはいかないからな。とにかくようこそ……アルディーン、いかがかね、この場所は？　君がこれから永遠に暮らす部屋だ。気に入ってもらえるとうれしいのだが」

思わず顔に浮かぶ表情がファレルを存分に楽しませていた。そうとも……と彼は言う。

「我々は君を殺すつもりなんて毛頭ないんだ。殺してもどこから生き返ってくるかしれない相手を……そうだろう？　だが、自由にしておいては邪魔でたまらない！　今日だってせっかくの筋立てを半分でつぶされてしまった……」

何かと目ざわりなゴードンズ・ガードのリーダーを片づけて、それをオトリにアルディーンに追わせるつもりだったのだが、途中まではダメにされてしまった。一石二鳥の計画とうぬぼれていたのだが、

「まあいいさ。こうして目的ははたした。これで君はもう二度と動けない」

そのくさびはけっして抜けない……この壁はいかなる種類の通信も通さない……。
「気の毒だが食事も水もあげられない。だが〝闇の皇子〟は死ぬまいね。フフフ、君のその不死身に近い身体があだになるわけさ。君はこれから未来永劫この部屋で、生きることも死ぬこともできずに苦しみつづける……」
〝アッ……ウアッ〟脇腹と首筋に、背後からのびてきた針がささったのだ。声は言う。
「痛かったかね？　だがそれは君の生命維持に必要なものなんだ」
ここで心電図をモニターして、あぶなくなったらいく分か栄養をあたえてやろう。
「貴様……ファレル……」
妖魔の怒りにふるえる声が、呪いをこめるように部屋にこだました。
見おろすファレルの隣に誰か来たようだ……奴の声音がすこし変わる。
「ごらんください、見事にやりました」
相手はファレルの腕前をほめずに罠の確かさをほめた。
「すごいものだな、あの腕以外ほとんど一分のくるいもなく獲物を捕らえた……君が捜してくれた専門家の技量は、まったくたいしたものだ！」
「顔をお見せできると、なおよいのですが……」
へつらうようなファレルの声に、相手は首を振ったらしい。
「いや、近よるわけにはいかんだろう」

〝すこしだけなら？〟ゴーグルの陰で赤い目がキラリと輝いたが、男は用心深かった。

――やがて、上からの声がアルディーンに話しかけた。

誰だろう？　だがファレルよりも格段に深く、残忍な意志を秘めた力を感じさせた。

「アルディーン……気の毒なことだ。君のその姿には深く同情するよ」

だが、しょせんこうするよりほかないのだ、と言う。

「それにこれは殺人でもなんでもないからな。闇の皇子……アルディーン……要するに危険な怪物だ。わかるかな。君がもと何者だったかは知らないが、〝闇の皇子〟に憑かれた日から君はもう人間じゃない……汚れた生き物になりはてている。不幸なことだが真実だよ。存在しているだけで醜い、本来ならあってはいけない汚点なのだ……そうは思わないか？」

「よくも……よくも貴様!!」

怒りと憎しみの絶叫がひびく。

ナルダンは哀れむように眼下でもがく少年を見おろして、ファレルに冷却装置のスイッチをいれるように指示した。〝いっそこのほうがいいのだ〟

「このほうがいい。なまじ力を残しておくより、苦痛をあたえてすみやかに希望を捨てさせるほうがいいのだ。零下40度の世界では、彼もすぐ気力がつきるはず……なにもかもあきらめてここで夢を見るようになれば、〝彼〟にとっては１００年も一瞬に過ぎるさ」

そして、最後に謎のような言葉をつぶやいて去っていった。

「ネオ・ナリタの繁栄を望んでいたのだろう、アルディーン？　それならばこれが最上の方法なのだ。安心したまえ。もう何も心配することはない……ネオ・ナリタは栄えるよ。貧困も犯罪もない。君が真にこの街のためを思うなら、ここで永久に眠りつづけることだ……」

ライトのむこうから人の気配がしなくなった。彼らはいってしまったらしい。

残されたアルディーンの周囲で、しびれるような冷気がしだいに強まっていく……。

第五章　霧

「ただいま、涼！　どこにいるの？」
泊まりこみから帰った真夜子が見たのは、誰もいない空っぽの倉庫だった。
うっすらと埃が積もった床、冷えきった空気……昨日も今日も誰もいなかったような変な感じ……。
「ちょっと涼、どこよ。涼……？」
いつも着ているジャンパーが椅子に掛けっぱなしになっていた。
真夜子の大きな目がそれにハッと釘づけになると、駆けだして赤鍋亭にいく。
赤鍋亭のマスターは、ここ数日、涼は現れないと言った。
「そんなッ……だって涼は無断で休むような子じゃないでしょう⁉」
マスターは、ただ首を振ってタメ息をついた。
たたきつけるようにドアを開けて店を出た真夜子は、それから知っているかぎりの場所をたずね歩いたのだが、どこにも涼はいないのだ。

不吉な予感が本当になってしまったようで、しだいに真夜子の全身が総毛立つ……。
——なんてバカ！　あたしったら……どうして目を離したの!?　あんな弱い子を一人にして！
何があったの？　どこにいるの？　でも、誰もあの子の居場所を知らない。
〝もう街を出ていったのだろう〟と言う人もいたが、真夜子にはわかっていた。
「バカッ、涼はそんなのじゃないわッ！」
——いくじなしで赤ん坊だけど、さよならも言わずにいったりする奴じゃないのよ！
真夜子にはわかっている、涼はこの街が本当に好きだった。
汚い街、最低のスラムなのに、あの子はなぜか、この街とその住人たちが大好きでしようがなかった。
〝変な奴！　どこがいいのよ……こんな街、きれいなものなんて一つもありゃしないのにさ？〟
〝真夜子、そんなことないよ！　僕は好きさ……みんな愛してるよ！〟
大好きだよ、真夜子……生まれたばかりのようなあの瞳が、たしかにまっすぐにそう言っていた。急に胸のなかが暖かくなって、スラムの町並みがキラキラして見えたのだ。
少女はグイと涙をぬぐった。
——あたしだってきれいなもの、一つだけそばにあったのよ！

涼よ……それ！　涼がいたもの！
なくしてしまいそうになって、はじめてのようにわかることもある。
あんなに澄んだ目をしていて、あんなに無邪気な笑顔をくれて、いつもあんなに優しかった。せいいっぱいに愛してくれた……この街も、自分のことも！
――それなら、涼はどこへいったのよ!?
座りこんで泣いてしまいそうになるが、真夜子は泣かなかった。
なぜなら病院も警察にもいったけれど、涼らしい消息はあがらなかったからだ。それならまだ、どこかできっと生きてるはずなのだ。
〝うっかり何か見たか聞いたかして、口封じにどこかで捕まっているのかしら!?〟
旧市街ならありえぬ話ではない。真夜子は暗い顔で、涼がアカデミアから来たことを思いだしていた。世間知らずの涼は、スラムのカンなどまるで持っていないのだ。
――だからあたしがついてなきゃいけなかったのに!!
疑うことを知らない涼に、誰が何をしたというのか……歯を食いしばっても今、泣いてはならないと思った。
――きっと涼は、もっとつらいところにいる！
はりつめた目をした少女は、街角の誰彼かまわずに、つかまえてはたずねつづけた。
「女の子みたいにかわいい顔なの！　名前は涼よ！　もう4日も行方がしれないの……お願

い、何か知ってたら教えてちょうだい!!」

――ナサニエル・ゴードンの屋敷を事業家のナルダン氏がたずねていた。

「オヤ、どうされました？　ミスター・ゴードン……顔色がどうもお悪いが」

現れた彼を見て、ナルダンが声をあげた。

若き富豪、ナサニエル・ゴードン氏はなぜか血色が冴えず、憔悴したような気配が顔にただよっていた。日当たりのよい客用の応接室では、かえって目立つようだ。

「おかまいなく……べつになんでもないのですから」

その応対もどこかいつもとは違う。

ナルダンをあれほど苛立たせた冷静さが、どこか奥のほうで崩れかけていた……さりげなくふるまおうと必死だが、ピリピリした緊張感に、今この瞬間も苦しめられているらしい。

小憎らしい若造め、何があったやら……ふとナルダンは工場のせいかもしれないと思った。この男の工場内はファレルがひどく荒らしている。

――フフ、そうか、さすがに焦りはじめたわけだな。

ナルダンの話題は、あいかわらずフェスティバルについてだった。

案の定、ゴードンは反対しはじめた。

「まさか、今、この市街の状況ではとても無理でしょう⁉　あなたにもおわかりのはずだ、現在のネオ・ナリタの状態を……失礼だが無謀すぎる！　中止……いや、せめて延期にするべきではありませんか？　こんなとき、フェスティバルなどやってどうなります⁉」

ナルダンは友愛のかたまりのように手を広げて、

「いやいや、こんなときだからこそやるのですよ！　ミスター・ゴードン、私は信じていますぞ。楽しいフェスティバルがきっと人々の心をなごませてくれるはずです。考えてもごらんなさい、ハハハ、みな大喜びでつめかけることでしょうね？」

ナイトハンドはひそかに車椅子の肘かけを握りしめた。今日のナルダンはどこかが違う。なぜかこれまでよりいっそう満足した邪悪な気配が感じられた。血で肥えたダニのような不快な笑顔だった。

ふいに、たまらない焦りがこみあげてくる。

――アルディーン、どこへいったのだ？

闇の皇子が消えて数日、何があいつに起きたのか？　旧市街の倉庫には、青ざめた顔の小娘がいるだけだった。罠にかかったのは間違いない……だがもしそうなら、仕掛けた悪党どもから意気揚々とした噂が流れるはずではないか？

目につくところに、死体が晒されないのは、なぜだ？

何があった……もう何百回となく同じ質問をくりかえしたのだ。

苛立ちでやつれた表情をナルダンがのぞいているのに気づいて、懸命に考えを集中しようとした……。

「いいですか、ミスター・ナルダン。その人出が危険だと申しあげるのです！　安全の保障のできない現在の状態で、旧市街に人を集めるのは、落とし穴の上を行進させるも同然ではありませんか⁉　何千という人々のいる場所で、もし何かあれば、今は大惨事にもなりかねません！」

「それだけたくさんの人が、祭りを楽しみにしているのですぞ……」

愛想のよい口調のままで、ナルダンは言う。

「ここで急にとりやめたと聞けば、こちらはさぞ恨まれることでしょうなあ……暴動も覚悟のうえですかな？」

底に明らかな脅しをふくんで、やんわりとゴードンの返事を待つかまえを見せた。なんという幸運だ！　今日はこの青年はふだんの半分も手ごわくない。

――もうじきだ……私は勝ち、お前は負ける。

彼の無残な死こそが、勝利の最後のつめとなってくれるのだ。

一瞬、憎しみを隠しきれない視線とあった。罠にかかったのはわかっていても、それが何だか見当がつかぬのだろう。青ざめた若い顔が、心地よい興奮を数倍にしてくれるようだ。

……やがて彼は押し殺した声でナルダンの言葉をみとめた。

「やはり予定どおりにおこなうほうがいいでしょう……」
「それが賢明ですとも！」
おぞましい満足感を隠そうともせずに、ナルダンが手をたたく……。
ナイトハンドが心で叫んでいた。
――アルディーン……どこにいるのだ!?

闇の皇子は氷の地獄にいた。
もうどのくらいたったのだろう……はてしなく続く苦痛のなかで、すでに何百時間もすぎたようだ。
冷気はたえまなく刺す針のように、一時も涼を休ませてはくれない。
手足の金具は、どんなに力をこめてもがいても微塵も緩まなかった。今ではもうその力も残っていない……凍てついた金属が触れる箇所は、焼きごてをあてられたように痛いのだ。
力を失った手足に、苦痛だけがそそぎこまれている。
「ひどい……いやだ……」
時折意識がうすれだすと、脇腹にささったカテーテル（管）が作動する。生かしておくための機能が無理やりはたらいて、左腕の傷から新しい生血がしたたる……。

記憶に重い膜がかかったように、自分が誰かもわからなくなってきた。
なぜこんな目にあうのかがわからない。自分をこんなところに閉じこめた者たちが憎かった……。一瞬、瞳が赤くなり、魔獣の妖光をおびる。
——ここに自分を閉じこめた人間どもが憎い！
〝顔をご覧になってはいかがか？〟
やつらの一人がそう言っていた……あのときはここまで来なかったが、いつかまた見にくるかもしれない。赤い空想が心を閉ざす。
——もう一度来い……そのときは……。
どんよりと濁った赤い瞳が、遠い扉を獣の執念で見つめていた。
次にあの扉が開いたら、なんとしてもこのそばまで引きよせよう。力が届くほどよってきたら、飛びかかり牙をたて、生気を吸いつくしてやる……。
それが誰でもいい。甘い血の流れる人間ならば、きっと逃がさない。
いくらでも根こそぎ奪いとって、この罠がやぶれるほど力をつけ、そうしたら次は……きゃしゃな身体に眠っていた獰猛な妖気が目覚める。
——次は外の奴ら……。
……猫のような舌なめずりの音が低くひびく。
〝はやく来い、待ちきれないぞ〟。夢うつつのように頭が重くなる……彼はやがて幻を見は

じめたようだ。

獲物が恐怖の悲鳴をあげるさまを、何度も何度も夢に見た。この牙の下で温かい身体が、ミイラのようにボロボロになる。自由になった身体で街を駆けよう。月があり、闇があり、血の香気をのせて風が吹くだろう……。

そのとき、稲妻のように別の夢がよみがえった。

勝ち気な目をした少女の笑顔だ。

〝涼、あんたどうして帰らないのさ？　まだ追いだしていないわよ！〟

――真夜子……真夜子ッ！

ガクンと身体じゅうが大きく動いた。

突きぬけるような風が思いきり強く顔をたたく……目をあげた少年は、まっすぐに遠くを見ていた。

――妖魔に身体を明け渡すところだった……。

意識が確かになると、新たな苦痛がはじまる。

だが涼は歯を食いしばって耐えしのんだ。心でただ一人の面影を見つめ、明るい声、夏の空のような笑顔を思いだすために……。

――優しい真夜子、愛している。何があっても忘れはしないよ、君の声、君の笑顔も！

それだけでもう胸が暖かい……負けるものか、僕はきっとあの街へ戻る！



〝真夜子、待っていて、お願いだから〟

それからの長い長い時間、たえまない苦痛と、涼は勇敢に闘った。愛する真夜子のもとに戻りたいなら、人の資格を失ってはならない。誇りも勇気も捨ててはならない。

――きっと、きっと守ってみせる！

うなだれて血を流していても、くちびるはかすかに微笑んでいた。

そして、どれほどの時が過ぎたのだろう？

ライトのむこうから、ふたたび人の声がした……誰か来て、虜を見ている。

「……近くによって見てもいいかね？」

誰かがとめたが、相手はたいして聞かなかった。

すぐにあの扉が開いて、一人の男が中に入ってきた。背をかがめ、老人らしい足どりで……それでもスタスタと達者に歩いてくる。

――指先一つ動かさないが、本当に生きているのだろうか……。

それだけを確かめるつもりできた彼は、近よって思わず目を見はった。

――まさか、こんなッ！

……つながれた少年は身動きもせずに弱い息を続けていた。冷気が黒髪に霜を積もらせ、あどけない頬には涙のあとがいく筋も凍りついていた。

目前に人が立った気配に、涼はゆっくりと顔をあげた。見たことのない相手……だが、と

ぎれとぎれの言葉で必死にささやいた。
「お願いです……助けてください」
この罠から出してください……相手はひどく驚いたようだった。

さて、美しい梨花は、ここ数日屋敷にこもっていた。
しょんぼりと灯火の下で物思いにふけっている。
――あの方は、私が嫌で街を出ていってしまったのではないかしら？
はしたない姿を見せてしまったと思う。〝気に入らないならいっそ殺せ〟だなんて……梨花の基準では、かどわかしより見下げたふるまいだ。
アルディーンもきっとあきれたことだろう。たしなみのない女は嫌われて当然……あれ以来、外に出ようともしないで、ずっとしょげかえっているのだ。
「奥様、お客人がおいでですが……」
遠慮がちにノックがあり、部下のショーンの声がたずねた。たたきだしておしまい……と顔もあげずに梨花が答える。
あつかましくも花など贈ってくるファレルと思ったからだ。本当は誰だか聞かされて、はじめて梨花の表情が変わった……。

「梨花娘々！　あいかわらずお美しいのう……」
「老虎！　おお、うれしい！」
懐かしいわ、うれしいわ……梨花はいそいそと客の前に点心を運ばせ、手ずから茶をいれた。
もう70を過ぎた老人で、蝉のぬけがらのように折れ曲がった腰をしてるが、眼光は鋭い。
梨花夫人とは、暗黒街の古い馴染みであった。
「かまわない姿でお恥ずかしいわ、ここのところこもっていたから……」
ここしばらく、おめかしもしていない姿を恥ずかしがってあやまると、
「いやいや女菩薩、また女っぷりがあがったようじゃな。狼大もあの世でじだんだを踏んで惜しがっているじゃろうて」
梨花がほんのりと頬を染めた。それから、
「何年ぶりかしら、この街に来ていたなんて、ちっとも知らなかった」
「難しい秘密の仕事じゃったのでなァ……」
老虎は小声でつぶやいた。
仕事？　ひざかけをすすめていた梨花の目がキラリと光った。
――そうだわ、この老虎はトラップの名人だった。
仕掛けや罠にかけては、並ぶ者ない闇の天才だ。

もしも……彼ならば、あの憎らしいナイトハンドを始末できないだろうか？　梨花の瞳がぜん輝きはじめた。〝あの悪魔めに身の毛もよだつような死にざまを！〟

あえてきちんと威儀をただすと、

「そういえば、頼みたい仕事があるのだけど……」

ところが老人はなぜかひどく首を振って、けわしい顔で眉をしかめた。

「いや、梨花……悪いが、わしはもう仕事はしない。今度という今度は、つくづくこの稼業が嫌になったよ！」

「まあ老虎……嫌ね、どうなさったの？」

梨花夫人の甘い声もききめはなかった。老人はしだいに前かがみになり、頭をかかえこんでうめくように言いはじめたのだ。

「私もこの年齢まで何十年と、依頼に応じて仕掛けを作る仕事を続けてきた……それが近ごろ少々気が弱くなってな。そろそろ隠居の潮時だと、思いはじめてはいたのだよ」

最後にあと一つ、仕事をしようと思っていた老虎のもとに、かなり珍しい依頼が入った。

「人じゃない化け物を捕まえるというから、二つ返事で承知したのさ。金に糸目はつけないというし、仕掛けもぞんぶんに工夫しておもしろい仕事じゃった……数日ほど前、敵が網にかかったと知らせがあってな。依頼主もたいそう満足で、契約よりよけいに支払うとまで言っておった」

そこで老人の心にはじめて好奇心が生まれた。
これまでになく頑丈な仕掛けをし、５００年はビクともしない罠を作ったのだ。
「そこまでする怪物はどんなものかと見にいったんじゃ……それが、ああどうだ！」
黒衣の少年があの罠にかかり、息もたえだえで苦しんでいた……ほっそりとした優しげな小柄な子で、わずかに見える顔だちはまだひどく幼かった。
老虎が思いだして身震いする。
「零下何十度のところで生きていられるのだから、確かに人ではないのじゃろう。だが怪物などとはとても信じられん！　おとなしい……まだ子供だった……」
澄んだ清らかな声音で、〝助けてください〟と必死に頼むのだ。その声、そのようすは悪夢のようだった。自分の罠……考えつくかぎりのむごい工夫を凝らしたあの罠に！
どうすることもできずに自分は逃げだした。あの少年は今も、あそこでつながれている。
「……きっとこれから毎晩夢に見るじゃろうて」
老人がポツリとつぶやいて顔をあげる。
はりさけんばかりに目を見はった梨花が、胸をおさえて叫んでいた。
「老虎、それはッ……それはどこなの⁉」

——真夜子は深夜の旧市街をさまよっていた。
あてもなく涼を探しつづけて、もう何日にもなる。涼はまるで街に呑みこまれてしまったように、手がかり一つ見つからないのだ。おもしろ半分で嘘を知らせる奴らも、はじめはいた……だが今では火のような真夜子の目を見て、その気をなくしてしまうらしい。
——もう、誰も何も言わなくなってしまった……。
ゾッとする気持ちがつのるばかりだ。もう何ができるのかわからない。
そして最後に真夜子が助けを求めたのは、ほかならぬ闇の皇子だった。
——アルディーン……そうよ、あの人なら！
アルディーンは真夜子にとって、いつでも最高のヒーローだった。
彼はどこからか閃光のごとく現れ、邪教の支配をなぎはらった。
深い闇をのぞくように神秘的で美しい人。なぜか……自分に特別に好意をよせてくれる。
風のように現れ、消えてしまうけれど、助けてと思うときには、いつもその場所に来てくれたのだ……真夜子の瞳がはじめて輝いた。
アルディーンならきっと助けてくれる。七賢人を倒したあの人なら、できないことなどないはずだもの！
——そうよ、涼、待ってなさい！　アルディーンを探してお願いするわ！
……だが、どれほど呼んでもアルディーンは現れなかった。

真夜子は、ふたたび街じゅうを探し歩いた。昼となく夜となく、それでもめぐりあえなかった……なぜかここしばらくのあいだ、彼の姿を見かけた者は、誰一人としていないのだ。

「……アルディーン、どこにいるの⁉　お願い、出てきてほしいの！」

悲しい声がひびいても、風すら答えを返さなかった。

その夜はフェスティバルの前日で、街はざわめいているのだ。だが遠くから聞こえるうわついた物音は、疲れはてた真夜子の耳には聞こえていない。

――いつのまにか、そこは危険地域だった。

旧市街の夜には真夜子でさえ、足を踏みいれない場所がある。いちばん凶悪な浮浪者や、狂った麻薬患者の吹きだまり。ネオ・ナリタのもっとも暗い場所。

ふだんならば、正気の人間が来るところではないのだ……だが今は真夜子は、そんなことは考えもしなかった。何かにとり憑かれたようにただ探しつづける。

とある狭い裏道に入ったとき、前方から恐ろしい人間の悲鳴が聞こえた。

「畜生！　この悪魔めッ‼」

つづけて数発の銃声がこだました、逃げようとした真夜子の背に寒気のするような声が言った。

「一歩でも動けば撃つぞ」

ピタリととまった足を、声はゆっくりと振りむかせた。
「手をあげろ……そうだ、静かにこちらを向くんだ」
声の主と真夜子が正面から向かいあう……切れかけた街灯の下に黒衣の男がいた。
鈍く光る銀色のレーザー、ナイトハンドだった。
真夜子が低く息を呑んだ……ナイトハンドは恐ろしかったのだ。
この男はアルディーンとは違う、復讐のためにただ殺すだけの悪魔だった。やり方も冷酷でむごい。今もそら、見るがいい……足もとには何かの罪を犯したらしい男たちが、死んで倒れている。
吐きそうになるほどの血の匂いがする。真夜子の膝にガクガクとふるえが走っていた。
――こ……こんなにたくさん、虫けらのように殺せるなんて……。
ナイトハンドは無言のまま、レーザーをおろしていた。
――この娘は知っている……アルディーンと一緒に暮らしている娘だ。
痩せた青い顔は、あちこちに汚れがついてうす汚く、目ばかり飢えたように光っていた。
たった今、ナイトハンドは明日の混雑をねらって強盗をたくらんでいたチンピラを殺したばかりだった。フェスティバルの人を利用しようとする、こんな手合いはあとをたたない。少しでも多く根を絶っておかねばならないのだ。
アルディーンがいなくなった今、ネオ・ナリタで狩りをするのは彼一人となってしまっ

た。

敵に対する憎しみは、奇妙なほど増していた……もはや誰一人にも情けをかける気持ちはない。逃げようとし、命乞いをする者でさえ許すつもりはなかったのだ。

ナイトハンドは、ただ背を向けて〝行け〟と指図した。

こんな小娘になど興味はなかったのだ……だがそれきりで立ち去ろうとした彼は、思いがけなく張りつめた声に呼びとめられた。

「ま……待って!!」

振りかえったナイトハンドの目に、スラム街の少女の緊張した顔がうつっていた。

「何か用か……？」

「え、ええ、アルディーンに会いたいのよ。大切な用なの！　お願い、彼が今どこにいるかわからない!?」

背の高い影の男は、数秒間ジッと黙って立っていた。それから、低い声で〝彼にどんな用なのだ？〟とつぶやいた。真夜子は必死に両手を握りしめて、

「う、うちの居候がいなくなったの、名前は涼よ！　まだチビで、すごく弱い子なの、家に帰ってこないはずないのに、もうずっと帰らないのよ！」

叫ぶうちに涙があふれてきた。

〝何日も何日も探しているのに、街じゅうたずねて歩いたのに！〟

旧市街は危険な場所ほど迷路のように入り組んでいて、人ひとり隠してしまうのは簡単なことだ。強盗も殺人犯も、どんどん奥へ逃げれば警察でさえ容易に発見できなくなる。

「でも臆病な涼が自分からそんなところにいくはずはないのよ。きっと悪い奴に捕まっているに違いないと思うの、でも、もうどうすればいいかわからない！　アルディーンならきっと助けられるわ……お願い、彼の居場所を教えて！」

影の男がどう考えたのか、真夜子にはわからなかった。ただ彼はわずかに首を振り、

「ムダだ……アルディーンなら、今はいない」

――いない……ですって？

真夜子はうつろな声でくりかえした。急に力が抜けてヨロヨロと倒れかかる。

「いつ……いつ、戻ってきてくれるの⁉」

「ダメだな。もう戻らないかもしれないんだ……」

背を向けた彼は、いきなり狂ったようにしがみつかれていた。

――どうして……どうしてよ⁉

「どうしてッ……だって涼は何も悪いことなんかしちゃいないのよ！　なんで行方不明になんかならなきゃいけないの⁉」

狂気のように長いマントをつかみながら、必死の目で相手を見あげていた。

「それなら、お願いッ……お願いだわ！　あなたはとても強いんでしょう⁉　涼はね……ダ

メなの、チビだしすぐ泣くのよ。でも優しくていい子なのよ！　悪いことなんか、何もしやしなかったわ！　だのに、強くないから勝手にされていいなんて……この街だってそんなのないはずでしょう⁉」

振りはらおうとしたナイトハンドの手がとまった。

「……あの子ね、怖がりだから自分から危ないところにいくはずはないのよ。いつもウンと脅かしてやってるし、頭だってそんなに悪くないはずなの。だから安全と思っていたけど、一つだけあたし忘れてたんだわ。あの子ちょっと変なのよ！　人間が……悪いことできるって、どうしても思わないみたいなの‼　本当に怖いんだって信じないのよ！」

——何度も何度も注意したのに、わかったわかったって……言うだけなのね。すこしもわかっちゃいなかったのよ！　目を離したあたしが悪かったの‼

もう自分にできることは何もないと、心の奥底で絶望的にわかっていた。でも、このままではあの弱虫は死んでしまう！　恐怖に追いたてられるような声が叫んでいた。

「探してやらなきゃ殺されちゃうッ……お願い、涼を助けてよ！　あなた強いんでしょう⁉お願い……お願いよ……」

「もう帰れ、ここにはいない」

なぜかそれは、本当に知っているように聞こえた。

思わず顔をあげた真夜子の指をすばやくもぎ離して、ナイトハンドは闇に消えてしまっ



た。

「待って……どうしてなの⁉」

〝いないと言ったのだ！　帰れ‼〟恐ろしい声がそう叫ぶと、あとはいくら呼びかけても返事はなかった。

……ナイトハンドはごく近くのビルの窓から、少女が立ち去るまで見守った。

目を閉じて重い吐息をつく。そのとき、後ろから肩に手がかけられた。

とっさに銃を抜き、振りかえるとそこには梨花の部下、ショーンが低い姿勢でうずくまるように構えていた。

「奥様からのご伝言です。アルディーンさまの行方が知れましたが、助けがほしいと……」

……仕掛けや依頼主についての秘密を漏らすことは、この世界では破滅を意味する。

仕掛け人・老虎は罠の場所について答えるのを、なかなか潔しとしなかったが、ついに最後には承知した。

それは〝答えなければ拷問にかける〟と言ったナイトハンドの声のまぎれもない調子と、梨花夫人がひたいを床までつけ、涙ながらに娘格の礼をくり返したためであった。

「では場所を言えッ、ネオ・ナリタか⁉」

老人はそうだとうなずいた。地図を持ってこさせ、一点にしるしをつけた。ナイトハンドの記憶によれば、かなり前に捨てられた無人の邸宅だった場所だ。いかなるときも守れるようにとの注文で、老虎はそこを少人数でも守りやすく、攻めにくい、きわめて堅固な要塞に改造した。

梨花夫人がナイトハンドの手を借りる決意をしたのは、じつにこのためである。

「仕掛けの場所さえわかっていれば、どうということはない……」

ナイトハンドは確実にやぶってみせるという。老虎はあらゆるトラップの場所と性質を明かした。いざというときのために、庭にもいくつか仕掛けを注文されたらしい。

「我ながら、これはかなりやっかいな代物だ。おまけに地雷や爆薬の扱いは、わしでなくてもできるから、正面から入るのは避けたほうが利口じゃよ」

ではヘリを使おう……ナイトハンドはこともなげにつぶやき、それから恐ろしい声音で依頼主の名前をたずねた。

「わしが会ったのはまだ若い男だ。ファレルと言っていたが……」

その名を聞いて、目を異様に光らせたのはナイトハンドばかりではなかった。

「ファレル！　それではあの男なの⁉」

梨花、知っているのか……ナイトハンドが振りむいた。

美しい梨花は夜叉のようにくちびるをかむ。

あの男がアルディーンを狙う計画を立てていると、知っていたのに聞き流して気にもとめなかった。狙われていると旦那様に伝えただけで、すっかりいい気になっていたのだ。

――ああ、なんてこと！　バカな梨花、まさかあの、にやけたファレルにこれほどの悪巧みができようとは思ってもいなかった！

ナイトハンドは老虎にたずねた。

「そいつは今夜もそこにいるだろうか？」

「おそらくいない……今はわずかな見張り役だけだろう」

ゆっくりと梨花がつぶやく。

「あの男はたしか……フェスティバルの日に旧市街で会合を開くはずよ。今、この街にいるシンジケートのすべてを集めてね」

闇の皇子の始末など、どうせ無理だと思っていたから、会合の場所などくわしく聞きはしなかった。

「でも、こうなれば話は別。ファレルはかならず明日、旧市街に現れるつもりでしょうね。ロイコやアイヒマンたちの前で自分を認めさせるために……」

一瞬、ナイトハンドの目が、心底血に飢えたようにギラついていた。

老虎が最後に、仕掛けられた最終装置について話をした。

「あの部屋は……もし事があれば誰も生かしては出さぬようにと注文されていた。たしかな

方法として、わしは毒を選んだ」

非常に性能のよい物を、むこうが用意してくれたとも言った。

〝この罠をなんとかしないと、あの部屋に入る者はもろともに死ぬぞ〟

それから底光りのする眼で彼らを見て、

「うまく避けることだ、そして出来るかぎりあちらの人間は殺してきてもらいたいな。わしは今夜じゅうに香港へ高飛びするつもりだよ。死人に口はないのだし、今回わしが裏切ったことは、誰にも知られたくはないからな……」

〝あの屋敷にいる敵は一人残らずみな殺しにする〟黒衣の男が冷ややかにそう誓った。

それからわずか1時間後……突然現れた一機のヘリコプターが、秘密のあるその屋敷を瞬く間に制圧した。

「誰だ……グアッ!!」

荒々しい物音にあわてて出てきた男は、ドアを開けた瞬間、顔面を撃たれてのけぞった。

急を知らせようとした男は、送信機に手をかけたところで、頭蓋骨を一撃にされて死んだようだ。ことごとく死に絶えた室内に立って、背の高い黒い影があたりを見まわす……ひと隅にぶ厚いガラスで作られた、地下への監視窓があった。

……闇の皇子の頭上から、銃声が聞こえていた。

数人の断末魔の悲鳴がして、ライトの向こうから激しい声がこちらに叫んだ。

「アルディーン！　貴様、そこか!?」

その声はまさか！　心臓が思わず大きく鳴った。

――ナイトハンド、君なのか!?

急いで、かなたの扉に目をやる……そのとき、奇妙なきらめく何かに気づいた。粉雪のようなものが上から降ってくる。目にはとらえられないほど細かい、銀色のそれは、恐ろしい猛毒であった。

登録された人間以外で、この部屋の扉に手をかける者があれば、それは自動的に作動する。ひと呼吸で、喉が焼けただれるように感じた。

――この部屋の仕掛けだ！　苦しい、目がくらむ……。

ハッと涼が扉に目を向けて絶叫した。ナイトハンドがここに来れば!?

「いけない、ナイトハンド！　ガスだッ……入っちゃダメだ!!」

とどろくような爆発音とともに、ナイトハンドらしき人影が中に入ってきた。彼は手早くレーザーで涼の金具を焼ききってくれる……ぼんやりとした目に、マスクを装着しているのがわかった。

〝ナイトハンド……目が……よく見えない〟少年はそう言ってから一度、気を失った。

ふたたび意識が回復したのは、ヘリコプターの機上である。
見えるか……ナイトハンドの低い声に、アルディーンはうなずいた。
乗りこんでいた梨花夫人がホッと息をつく。ガスの話を老虎から聞かされたとき、ナイトハンドはアルディーンの生命力を信じて扉を破るしかないと言ったのだ。
理屈ではわかっている、ほかに道はない。だが胸が不安でたまらなかった。
ナイトハンドですら、最後の瞬間には、不安でこわばった顔をしているようだった……。
「よかった、旦那様……梨花がおわかりになる？」
かがみこんだ彼女と逆に、黒衣の男は下に目をやった。
例の屋敷は、外観はいままでと何の変わりもなく見えていた。だが中では……そう、爆風とともに全館に吹き飛んだガスが、建物じゅうの人間を殺しつくしたはずだ。
まだ息のある者がいたとしても、とうてい助からなかっただろう。
〝ちょうどいい、明日まではアルディーンが自由になったとは知れるまい〟
それで、こんどはこちらが追う番だ……満足げにくちびるをゆがめた瞬間、梨花夫人の悲鳴があがった。
「アルディーン、しっかりして！」
急いで目をやると、闇の皇子が梨花の腕のなかで血を吐いていた。
苦しげにせきこむごとに、多量の血がくちびるからあふれていく……。

「ああ、どうしましょう、旦那様ッ……こんなに血が！」

蒼白に変わったナイトハンドが、梨花夫人をつきとばして状態を調べた。

――くそッ、あのガスだ……。

常人なら一呼吸で悶死するほどのガスだと老虎が言っていた。可能なかぎりすばやく連れだしたのだが、それでも肺を冒されてしまっていた。

――畜生、どうすればいい!?

不意にアルディーンの肩が痙攣したかと思うと身体の力が抜けていく。

「いやっ……息をしていないわ！」

……あふれる血が気管をふさいでしまい、吐きだす力がもうないのだ。

ゾッとするほど静かになったひたいのうえに、みるみる青い死の影がひろがる。

一瞬、ナイトハンドの手が動かなくなる。硬直した彼から梨花夫人が涼を奪いかえして、喉にたまった血を口うつしで除こうとした。

わずかな時間が1000年にも感じられた。だがやがて、アルディーンの喉から不規則な音が聞こえはじめた。すぐに呼吸も復活した。

助かったか……ナイトハンドがひそかに汗をぬぐう。けれども梨花は、まだ涼をしっかりと抱いてふるえていた。

「こ……これ以上、彼を動かせないわ！」

〝すぐ降ろして、下は私の屋敷がある場所だわ！〟ナイトハンドは当然許さなかった。

「貴様はここで降ろすが、アルディーンは私が引きうける。あたりまえだろう？　さあそいつを放すんだ……いいから、安心しろ！　即死でなければ、死ぬような奴ではない」

闇の皇子は目を閉じたまま、身動きひとつしない。あれほど激しかった発作はウソのように静まっていた。だが喉から胸一面は、ベッタリと血に染まり、顔色はまだ死人のようだ。

梨花夫人はヒステリックな声音で、

「この悪魔ッ、こんなに苦しんでいるのが見えないの!?　いいからショーン、機を降ろして！　降ろさなければ許さないよ!!」

操縦席のショーンに命じて、強引に機体を降ろさせた。

――しくじった、奴に操縦をあずけたのは失敗だ。

ナイトハンドは舌打ちした。自分の屋敷に連れ帰ったほうが、設備もあり、ずっとよい手当てができるはずなのだ。

だが彼自身、今夜これ以上、アルディーンに無理をさせることには不安があった。

――やむをえんか……今夜は。

静かな部屋に運んで、血で汚れた衣服を着替えさせた。左腕の傷に包帯を巻いていると、梨花が静かに入ってきた。

アルディーンさえ無事で戻れば、こんな獣はもう見るのも嫌だった。

「さあ、そろそろ出ておくれでないかい？　あとは私にまかせることね」

ナイトハンドは不承不承に立ちあがった。アルディーンを残していくのは気にいらないが、この夜が明ける前にしておかねばならぬことがある。

――そうそう、さっさと出ておいき！

くちびるに妖しい微笑みをたたえて見おくる梨花を、いきなり振りむいた視線が鋭く射ぬいた。思わず身をすくめた美女を、ドアに手をかけたままの男がジッと見ている。

そして、どこか奇妙なひびきのある声で、低くつぶやいた。

「梨花、頼むからそいつにむごいことをしないでやってくれ」

どういう意味!?　毒づく相手に、彼はただ〝わかっているはずだ〟と答えた。

「貴様にもよくわかっているはずだぞ。それが本当に好きな娘は別にいるんだ。汚い手をつかってものにしようとするのは、よせ！　悪くすれば……こいつの一生の傷になるんだぞ」

〝お前ならできるのかもしれんが、頼む……やめてくれ〟

それだけを言うと、マントをひるがえして去っていった。

残された梨花は、ややしばらくそのあとを見ていた。

――あの男が頼むと言った……。

冷酷で血の一滴も流れていない男だと思っていたが、はじめて何かを心配する声を聞いた。彼の黒衣は両親の喪のしるしだという噂である。

あれは悪魔のように強く、情けを知らない復讐鬼だ。人らしい感情などかけらもあるまい。

だがアルディーンだけは奴の素顔も知っていた……もしかすると、なにもかも知られた唯一の相手だろうか？　彼にとってはすべてを明かし、心を許せるただ一人の友人。

寂しい人なのね……と、ふと思ったが、すぐに心からあざ笑った。

〝フン、自業自得じゃないのさ！〟

そして、あらためて横たわるアルディーンに目を戻した。愛しい人……とろけるような視線で、見ているだけではやはり満足できない。手をのばしてソッと頬にふれてみた。

――まあ、なんてすべやかな……。

しだいに梨花が考えはじめる。やはり……この夜はムダに捨てられないのではなかろうか？　あの畜生の言ったとおり、旧市街の小娘のせいで、アルディーンはなかなか自分に迷わない。

「ウフ……ここはひと思いに、覚悟をさせたほうがいいはずだわね？」

悩ましいしぐさで髪をかきあげると、微笑みながらにじりよった。今夜というのは問題があるけど、それでももう死にそうには思えないし、ちょっとした既成事実くらいは……。

――でも、本当にお苦しそうね？

息をするたびに、喉でまだ音がひびいた。ときどき、指で胸をかきむしるようにもする。

冷たい手の甲でおさえてやると、すこし痛みが薄らぐようだ。

くちびるがわずかに動いて、うわごとが聞こえる。

「……苦しい、真……」

梨花夫人の目が光った。息のかかるほど身体をよせて耳をとぎすませている。

——ここであの小娘の名を呼ぶなら、もう容赦はしないわ！　苦しかろうとなんだろうと、ひどい目にあわせてあげるから！

……涼は胸苦しさにあえぎながら、おぼろげに気配を感じていた。

——すごく苦しい……でも誰かそばにいてくれる。

ひんやりとした冷たい手がふれると、胸がとても楽になるのだ。誰だろうか……甘い花のような香りは真夜子と違うのだ。誰だろう？　ああ、そうだ……。

梨花夫人はかすかな声も聞きもらさなかった。

「苦しい、たすけて……お母さん」

……ゆっくりと身体を起こした彼女は、手を伸ばすと鈴でその部下を呼んだ。

「奥様、ご用で？」

「ええそう、ショーン。氷と冷たいタオルをたくさん持ってきておくれ！　早くだよ、この胸を冷やしてさしあげるのだから……それからすこしでいいから酸素はないのかしら？」

これほど甘く優しい表情の首領は見たことがないと、ショーンがギョッと細目を見はっ

た。

あくる朝、アルディーンはナイトハンドの低い声で目をさました。

「起きろ、アルディーン。フェスティバルの朝だ」

その朝……ネオ・ナリタは奇妙なほど美しい朝靄につつまれていた。街はまだ不思議に静かで、人々は眠りからさめようとしていた。あと数時間でフェスティバルが始まる。

横たわる少年の手がすこしずつ動き、意識が目覚めはじめている。

「アルディーン、起きろ。ファレルの計画がわかったぞ」

漆黒の瞳がはっきりとひらいた。

――ファレル！

ナイトハンドはうなずいた。昨夜、彼は一晩じゅう、街で狩りを続けてたのだ。梨花夫人がもらした情報をもとに、ファレルが集会を開く場所を追いもとめた。今朝までに知らなければ意味がない……そしてついに、一人の不幸な悪党からその場所を聞きだした。

「まちがいなく、その席でファレルはネオ・ナリタのドンになる気でいたのだ」

ナイトハンドは笑いながら言う。

闇の皇子抹殺をめぐって、各組織とそんな取り決めをむすんでいたとは知らなかった。

「奴がケミカル・ブルーの合成法を発見したのも、おそらく本当のことに違いないな……」

ケミカル・ブルーは複雑な化合物で、これまでは誰も合成に成功した者などいなかった。

――梨花の言い草では小悪党に聞こえたが、アルディーンへの罠を見れば……そう、恐ろしく頭がいい。

魔力の源を封じることのできないアルディーンである。冷酷だが適切な手段だと思った。

自分も奴の行動を追いながら、〝逃げ足は早いが、頭のいい相手でない〟と、どこか軽んじていたが、それがそもそも間違いだったようだ。

わざとそう見せかけていたのかもしれない……ともあれ、奴の真の狙いはネオ・ナリタのキングで、ファレルという悪党はそれに足るだけの恐ろしい敵だったのだ。

そこで彼は、筋書きをどう進ませるつもりなのだろうか？

ファレルは、ゴードンの工場にも何かたくらんだ動きをしていたはずだった。

〝旧市街、工場、ケミカル・ブルー〟ナイトハンドの心の中でそれらが一直線に並んだ。

「奴は旧市街を乗っとって、ケミカル・ブルーの大がかりな製造拠点とするつもりだったのだ。市内でただ一つの工場は、そのために狙われた」

「いずれ……麻薬工場に変えるつもりだと言うんだね？」

「そうだ。思いだしてみろ、アルディーン……だからこそ、我々があれほどくまなく調べて

も、ケミカル・ブルーの製造場をつきとめられなかったのだ。大がかりな場所など、まだなかったのだからな！」

アルディーンが、ふと不安げな表情をした。

「今は、あまり時間がないのだ……わかるな？」

ナイトハンドはかたわらで眠る梨花を気にして短くささやいた。涼にはわかったようだ。彼はあと数時間でフェスティバルの開幕に立ちあわねばならない……ナサニエル・ゴードン氏として。

「だが終わりしだい、ファレルの会合とやらを訪問するつもりでいる」

ナイトハンドはニヤリと笑ったが、アルディーンがその腕を強くつかんだ。

「ナイトハンド、なんだかすごく心配だ！　君は……」

なぜだか胸騒ぎがしてならなかった。懸命に言葉を続けようとするのだが、うまくいかない……やっとの思いで涼がつぶやいた。

「もし……ファレルの目的がそうなら、君は生命を狙われるかもしれない。そうだろう？」

いくらファレルが組織に旧市街の覇権を認められても、ナサニエル・ゴードン氏が無事でいるかぎり、その工場を好き勝手にできるとは思えない。

日ごろ、表に現れない人嫌いのゴードン氏だが、今日のフェスティバルの式典にはかならず出席するとわかっている……暗殺には最適の場所だ！

「……大丈夫だ、アルディーン。何も心配はいらない。気をつけねばならないのは、遠くからの狙撃だけだが、今この街で使いものになる狙撃手はアイヒマンのかかえる5人のスナイパーしかいないのだ……ところが全員、この前のナリタ署との激戦で、死ぬか重傷を負っている。どんな刺客でも接近戦で来るなら、危険など私にありはしない」

自信のあるようすを見ても、不安は消えなかった。涼が無理やり身体を起こし、

——やっぱり待って！　何か……。

ナイトハンドはその手首を無造作にとらえて、上にひねりあげた。

「この手がはずせるなら、やってみろ」

必死に振りほどこうとしたが、できなかった。肩で息をしている涼に恐ろしい口調で、

「どうだ？　弱っているのは自分でもわかるはずだな。アルディーン、くやしいだろうがファレルの始末はまかせることだ。けっして逃がしはしない、たっぷりと手間をかけて殺してやる」

瞳に地獄の炎が浮かんだ。

——あの男には私自身、いろいろと貸しがあるからな……。

ふたたび、影のごとくに立ち去ってしまった。

窓が開き、閉まる音で梨花が目をさましたようだ。〝そこにいるのは誰？〟

「まあ……アルディーン、目がさめたのね」

少年がすでに起きあがっているのを見て、うれしげに声をあげた。
「え……ええ、梨花……ずっと看ていてくれたのですか？」
ありがとう……その手をとって子供のように頬ずりした。梨花が花のような笑顔になる。
……しかし、涼の心にはなぜか奇妙な胸騒ぎが生まれていた。
それは、ナイトハンドの話のどこかではじまり、刻々と強まっていた。
――何かが変だ。
「……さあ旦那様。いけません、もうすこし横になっていなくては」
梨花夫人の手を無意識に払って、理由もなく立ちあがろうとする。
〝アルディーン！〟軽くふらついただけだが、梨花はあわててささえた。そのすぐそばの卓上の花束を見て、少年がアッと叫んだ。
「梨花夫人、この花はッ？」
とうに忘れられていたバラの花束……カードに書いた贈り手の名は、〝ファレル〟。
梨花がやや顔色を変えた。
「アッ、違うの！　それは贈られてきただけのものなのよ！」
だが涼の瞳は食いいるように、添えられたカードを見つめていた。
カードと、その紋章を。
――この紋章はどこかで見ている！　そうだ、ナイトハンドのところに来たサーベルの紋

章だった！

涼は必死に記憶をたぐった。そう……確かに同じ文様だ！

帝政ロシアの貴族のものらしい……ナイトハンドはそう言っていた。

「梨花夫人……前に言っていましたよね？　ファレルはどこかの貴族の末裔だと」

〝それは白系ロシアでしたか⁉〟異様に緊張した声に、梨花が目を見はってうなずいた。

……ファレルの紋章のついたサーベルを贈ったのは、事業家のナルダンだった。ナイトハンドはひどく彼を嫌っていた。

残忍な悪の気配がするのだと、ザ・タワーのオフィスまで調べようとしたのだ。

——ではファレルとナルダンには、つながりがあるというのだろうか⁉

「偶然か……いや偶然じゃない……」

めまぐるしく動く頭がそれを否定した。なぜならば、あの罠にかかった晩に自分が聞いた声は二人だった。ファレルと……そして、それよりも恐ろしい声だった。

——あれがナルダンだとすれば、どうだろうか？

そういえば自分はたった一度だけ、テープでナルダンの声を聞いていた。

ザ・タワーの夜に、ナルダンのオフィスで聞いたテープだが……そのとき彼は確か、〝ネオ・ナリタ復興計画〟について秘書に話していた。

記憶の奥から呼びおこしてみたが、一度聞いたばかりのテープと反響のひどい声ではとて

も比較ができなかった。

涼はそれでも、くりかえして記憶を巻き戻し……ほとんど完璧にまで思いだしていた。

〝フェスティバルの計画は十分に練ってくれ！　一つでも手落ちがあってはならん、我々のネオ・ナリタ復興計画はそこから始まるのだ。今は最悪の犯罪都市だが、二つの汚点をとりのぞけば可能性は十分にある。憎いのは、まずあの旧市街の環境と治安の悪さ、そして……〟

あるいは、

〝闇の皇子……アルディーン……ようするに危険な怪物だ。もと何者だったかは知らない、だがアルディーンに憑かれた日からは、もう人間じゃない。存在していることすら私には許せない。醜い、あってはならない汚点だよ……〟

口調はまぎれもなく、よく似ていた。

梨花夫人によれば、ファレルはさほど切れ者ではないという。彼女は香港での彼を知っている。だがあの罠を仕掛け、ケミカル・ブルーを持つ者が無能だなんてありえない！

〝気をつけて！　ファレルの裏で糸を引く誰かがいるのかも〟

それがじつはナルダンだとすれば……罠の考案者が彼だとすれば？

――そう、それならば、つじつまが合うんだ！

ファレルはナルダンの配下にすぎず、忠誠のあかしに貴重なサーベルを贈ったのだ。ナルダンはさらにゴードンにそれを贈り、歓心を買おうとした。

なぜか？　いずれは工場を乗っとって、麻薬の製造にあてるため……。

「いいや、違う！　それはおかしい！」

アルディーンはくちびるを強くかんだ。どこか変だ……ナイトハンドの描いた図では、どこかはずれてしまう部分がある。ぴったりあわないパズルの一枚は……。

――ナルダンのオフィスにあった、ネオ・ナリタだ！

オフィスの奥の、さらに壁のなかに隠されていたあれこそが、ナルダンの夢なのだと信じている。美しく整備された理想の都市。

ファレルを操り、旧市街で恐ろしい麻薬を作りつづける。確かにそれは悪魔の所業だ。だが、そんなことをすればネオ・ナリタは今よりもっと荒廃する……あの美しい街はどこへ消えるのだ!?

――ファレルだけならばいい。だが、ナルダンの野望ならスラムは望まない……清潔で完全な、そう、あの模型のような街に君臨することが、彼の望みであるはずだ!!

まず彼の目的を、あの美しい街の実現だと、仮定してみようか？

邪魔になるものは、かなり多い……涼が皮肉に微笑んだ。

現在の旧市街の治安の悪さがあるだろう、迷路のような街並みの汚さがあるだろう……そこで背筋がふと寒くなった。

それは、ナルダン自身の言葉の中にもあったのではないか？

〝憎いのは二つの汚点。あの旧市街そのものの環境と治安の悪さ、そして……〟

――もしかして……もう一つは僕だったのか⁉

闇の皇子の存在は、ネオ・ナリタを魔界に変える。異様な可能性が頭にひらめいた。

〝君は醜い怪物にすぎず、あってはならない汚点なのだ〟どこか放心したような声音で、梨花夫人にたずねていた。

「梨花……僕が閉じこめられていた屋敷の、正確な場所はわかりますか……？」

「え？　ええ」

梨花は不安げにうなずいて、昨夜老虎がしるしをつけた地図を持ってきた。屋敷を示す赤い点を見て、アルディーンの瞳がカッと見開かれた。

それはザ・タワーから見て、東南のはずれ。ナルダンのオフィスで見た模型の街で、いずれはタワーの対になるべきビルが建つ重要な地点だった。

――もはやこれは偶然じゃない！　ナルダン、貴様は何をたくらんでいる⁉

あの街の計画は、やはりまだ生きている！　間違いなく、彼はそこにもいつか高いビルを建てるつもりだった。地下深くにネオ・ナリタの妖魔を生きて封じたまま、美しい街を見おろすナルダンの二つめのタワーだ。

「ねえアルディーン、どうしてそんな青い顔を……」

「急がなきゃ……考えなきゃいけない。ナイトハンドはオトリの計画にかかっているのかも

しれないんだ」

——もし、何もかもが罠だとしたら⁉

ファレルにまつわることがらは、たぶんすべてオトリだった。

だから話を聞くうちに、あれほどの違和感をおぼえたのだ。ケミカル・ブルーの製造拠点に工場が必要か？　違う……薬はすでに、街じゅうに出まわっているじゃないか！　しかも、思うさま大量に‼

——そもそも新種の合成法なんて、なかったのじゃあるまいか？

だから、どれほど街を探しても製造場は見つからなかった。ナリタ署も僕らも、ファレルでさえだまされて踊らされていたのだとしたら⁉

本当の罠はどこに仕掛けられているのか……こぶしを握りしめていた涼の目が、窓の外に向いた。〝そうだ、フェスティバルに何かがある！〟

ナルダンが最初から強く主張してきたのは、今日のフェスティバルだった。

「霧が出ている……」

なにげなくつぶやいた彼は、今度こそはね起きて窓に駆けよった。

——霧‼

梨花夫人は不思議そうに同意した。

「ええ、そうね。アルディーン、でもそれがどうしたと言うの……この街ではめずらしくも

ないことでしょう？」

「梨花、あなたは知らないんだ！　ネオ・ナリタはもともと、霧が出る街ではなかった」

霧や靄がたちはじめたのは、ごく最近だ。

思いだしてみれば、それはザ・タワーが建ちはじめたころではなかったか？

人々は漠然と工場の熱が呼ぶのだろうと言っていた。

――でも工場は今日、完全に休みのはずじゃないかッ！

恐ろしい胸の鼓動が、耐えがたいまでに高まっていく……さりげなく現れた白い朝靄はしだいに濃くなり、霧になりそうな気配である。

自然じゃない……それでいて原因もさだかでない霧が、もうすぐ街に流れるだろう。その霧が何か恐ろしいもののように思えるのはなぜだ？

ナルダンはファレルを操り、旧市街のどこかに主な組織を集めさせてしまっている。フェスティバルによって、この街の住人の多くを、やはり集合させた。

ナルダンの憎むもう一つの汚点が、なぜかこの式典にかかわっている。

彼はむごい……とてもむごいことを、平然と計画する男だ。もし、霧の中に何かが……毒があれば……？　たとえばきらめく銀色の毒!?

――いけない！　旧市街に住む人はみんな死ぬ!!

旧市街の人口の大半が、今おそらく一カ所に集まっている。穏やかな霧の形をとったガス

がそこへ忍びより……そうだ、みな殺しにする！

ずっと前から練られてきた計画だ。何度も霧を出し、どうすればどの場所に溜まるかもみんな実験ずみなのだ。何か月もかけて霧に慣らされた人々は、間際まで疑いもするまい。

シンジケートの凶悪な犯罪者も、それは同じことだ。

フェスティバルにいかない人々は、自分たちの家で死ぬ。老人や病気の者が多いかもしれない。すきま風のはいるアパートでは、彼らに防ぎようもないはずだ。

ほぼ死に絶えた旧市街は廃墟になり、彼はそのあとを受け継ぐだろう。

〝ネオ・ナリタ復興計画〟。治安の悪さも劣悪な環境も、一度に解決する悪魔の名案だ！

――はじめに目がくらんで見えなくなるんだ……そうしたら、誰も逃げられない！

一度、みずからでその猛威を知った涼がゾッとして震えだした。

「梨花、逃げなさい！　一刻も早く旧市街から離れるんだッ……」

「アルディーン、どうしたというの⁉」

少年が震える手で梨花の肩をつかんだ。

「逃げるんですッ……すぐに恐ろしい毒がくるから！　できるかぎり早く、風下を通って……港か空港へ出るといい！」

あわただしい説明を聞くと、梨花がサッと青ざめた。アルディーンの罠をこしらえた老虎は、最後の仕掛けに使った毒は依頼主から手に入れたと言っていたのだ。

〝非常に性能のよいものを、むこうが用意してくれた〟と……だが、なぜそんなものが依頼主の手近にあったのだろうか？

「でもアルディーン、あなたはどうするつもりなの⁉」

「すぐにフェスティバルに向かいます……なんとかしなくては！」

それなら私も一緒に……言いかけた梨花は思いもかけず、はげしく頬を打たれた。

「ダメだ！　なぜわからない……あなたに何かあれば、僕はッ」

言うなり、梨花はせつないほどの力で抱きしめられていた。

――おお、アルディーン……今なんておっしゃって？

「あなただけには助かってほしいのです」

優しくて真剣な声が、その耳もとでささやいていた。

「梨花夫人、あなたはとてもきれいで……会ったときから本当は忘れられませんでした」

「もう一度……もう一度、おっしゃって！」

「……ずっと憧れてきた人に会ったようでした。そんなことはないはずなのに、ずっと前にも会ってたような……懐かしくて、なぜかまた会いたく思えて。なぜだかやっとわかったんです、あなたはとても大切な人だからだって！」

――アルディーン、ああやっと……。

夢かと思う幸福に酔いかけた梨花の耳に、涼の最後の言葉がひびいた。

「美しい梨花。あなたは僕のお母さんのようだ！」
強く抱きしめて手を離した彼は、澄みきった明るい目で梨花を見つめた。
「さあ、早く逃げてくださいね！」
凍りついたような彼女を残して、止めるまもなく表に飛び出していってしまった……。

そのころ……フェスティバルは、今まさに始まろうとしていた。
霧が出てきそうな気配はあるが、予定どおり人々は集まり、予定どおりの時間に準備も整った。本当に明るい顔はめったになかったかもしれないが、みな華やかな色彩や音楽をもとめてもいた。人波に押されて、来たくない者までが広場に押しこまれているくらいだった。
——残された時間はあまりない。
ナルダンの〝霧〟は、あのドームのなかに仕掛けられていたのだ。
開催式が終わるころには、バルブがすでにタイマーで作動しており、ドームの扉を開けたとたん、会場の人々の上に毒が襲いかかるようになっているのだ。
人々が死んだあともきらめく霧はとまらない……ひたひたとそこから流れつづけて、瞬く間に旧市街にあふれるだろう。

……予定どおりフェスティバルの代表者となったナサニエル・ゴードン氏が車で現れた。誰かが開催式の合図をしようとしたときである。

「その式、待った！　フェスティバルは終わりだ！」

いっせいに視線を上に向けた人々は、広場の樹の高い枝の上に、黒衣の少年の姿を見た。アルディーン……ネオ・ナリタの人々にさえ、その姿はひどくまがまがしく映っていた。

――アルディーンだ、何をしにきた!?

妖しい反響をともなう少年の声が、恐ろしい事実を人々に告げる……。

「フェスティバルなどやめてしまえ！　みんな罠だったんだ。すぐに逃げろ……もうすぐ、ここに死の霧が流れてくる！　いいか、ここにいる者たちは、みんな死ぬんだぞ！」

〝まさか……そんなバカな!!〟

とうてい信じられない人々がざわめきだす。

――アルディーン、まさかあの罠から出てくるとは！

ナルダンの秘書が一人、そこにいて形相を変えていた。予定どおり計画が進行するよう、開催式が終わる直前までは、その場でひっそりと監視するように言われていたのだ。

昨夜、アルディーンが罠から助けだされたことは、まだ誰も知っていなかった……。

――こんなところで、計画をくずされてはならない！

「待てよ、変じゃないか！　おかしいぞ、みんなよく考えてみろ……毒の霧だと？　ハ、こ

んなに大勢の人間が集まっている場所で、どうして騒ぎを起こそうとする？　ケガ人が出ると決まっているのに……ひょっとして、〝彼〟はもう、悪魔になっているんじゃないのか!?」

たったひと声の叫びが、ざわめきの質を大きく変えた。

――バ……バカな!?　何を言いだすんだ!?

だが怪しいぞ、アルディーン……そのときは誰もが心からそう感じていた。ナルダンの秘書が適切にそれをあおっている。〝違う……みんななぜ聞いてくれないんだ!?〟

人々の呪う声が最高潮に達したなか、ただ一人の少女だけは叫んでいた。

「アルディーン、戻ってきてくれたのね！」

――真夜子!!

旧市街の人波に押されて、いつのまにか、真夜子もこの場所に迷いこんでいたのだ。

真夜子……涼は思わず少女のほうに手を伸ばしていた。

「逃げろ！　頼むから信じて逃げてくれ！　この街に住む君なら知っているはずだろう？　ここ数か月までは霧などなかったじゃないか……そして今日は工場も閉まっているのに、いったいどうしてだと思うのかい!?　逃げろッ、人間ならアッというまに死んでしまうんだ！」

真夜子が息をのむほど激しい口調だった。なぜかためらう彼女を、叱りつけるようにして約束をさせた。

「もう時間がない、約束して！　すぐに逃げると僕に誓うんだ！」

魂からの叫びが、何かを伝えないはずはなかった。

妖魔の少年の声は不思議に澄み、それほど心底からの恐怖にあふれていたのだ。

このときはじめて人々が動きだした……アルディーンの必死の声が重なる。秘書の男がこのようすを見て、いよいよ最後だと考えたようだ。

〝もういけない、こうなったら……〟彼はすばやくドームに駆けより、扉に手をかけた。この封印を開けば、ガスはどのみち時間どおりに旧市街に流れるのだ。

一度、開いてしまえば閉じなおすことはできない仕掛けなのだ。

人々が走ったところで、すぐに追いついてしまうだろう。

ドームさえ開けたら、自分には車があり脱出できる……そう考えていた彼は、どうやら興奮して時間の経過を忘れていたらしい。式典の開始時刻からは、すでにかなりの時間がたっており、ガスはすでにドームに満ちていたのだ。

……恐ろしい苦悶の声で、人々の目が彼に向けられた。

喉をかきむしりながら、狂ったようにもがいている男の姿があった。口もとから血を吐きながら、ゾッとするような声音で叫んだものだ。

「ハハハハハ、もう遅いぞ、アルディーン。フェスティバルのはじまりだ！　ひと息でも吸えばもう終わりさ……畜生ッ！　だがお前たちもどうせ、みな死ぬんだ!!」

たった今、開けられたばかりの扉からは、きらめく霧が外にあふれようとしている。
「き……霧だあッ！」
どよめくように、人波があとに下がる。
アルディーンの瞳が深紅に燃えあがった。
一陣の激しい突風が、黒衣をはためかせてわきおこり、光る霧を扉のなかへと押さえこんだ。
——逃げろッ……逃げろ、みんな！
樹々を揺らすほどの風とともに、妖魔の少年の声がこだまする。
「だが……どこへいけというんだよ⁉」
絶望的な声が、どこからかあがった……どこへ逃げればいいのか、ギラギラした目の男たちは、我先に広場の出口に向けて走りだそうとしている。
なんとかしなければならない、恐怖にかられた人々は、おたがいに先を争って、殺しあいもしかねないのだ。だが、死の霧を全力で押さえているアルディーンには、叫ぶことしかできなかった。
「あわてないでッ、冷静に避難するんだ！」
どこへ……その答えを与えてやらねば、大惨事になるのだ。このまま野獣のように逃げても、けっして助からないだろう。

――誰か……誰か彼らに手を貸してくれ!!

そのとき、よくとおる強い声が、荒れ狂う人の群れを抑えこんだ。

「……落ちつけ!!　生命が惜しければ私の話を聞くんだ！」

中央の式壇の上に、いつのまにか車椅子の青年が上がっていた。彼には左頬に特徴あるアザがあった。

誰も見たことはないはずだが、その青年こそ彼だと誰にもわかったようだ。

――あれが、もしかしてナサニエル・ゴードンか!?

若くして巨額な財をなした大富豪だ。奇妙な支配力があたりにひろがった。一瞬、誰もが彼に注意を集中する。若く力強い声が、すかさず人々の耳を打った。

「落ちついて、避難する場所なら考えがある！　港へいけ……そうすれば、工場の船がある。私の工場で使う輸送船をすべて集めれば、旧市街の全員を一時、海上に避難させることも可能なことだ！」

……闇の皇子がすでに〝やりすぎて〟いることを、彼はよく知っていた。

――今朝あれほどに弱っていた者が、いつまでもあの妖力を使えるはずがない！

おそらく、歯を食いしばっているに違いない……ついさっきコントロールを離れかけた風が、アルディーン自身の頬をかすめて切ったのも見ていたのだ。

アルディーンの言葉を聞いて、誰よりも愕然としているのは彼であった。これがフェス

ティバルの正体だった……自分はすっかりだまされていたとは！

かつてないほどの怒りが燃えあがっていた。アルディーンがくずれれば、この場にいる者たちは一瞬で死ぬ。

――そんなことは、この私がさせるものか！

すくなくとも彼はそのとき、人々に顔を見られることも、自分の真の気性を知られる危険も考えてはいなかった。この悪魔の計画だけは、絶対に遂げさせてはならない。

「いいか、落ちつくんだ！　君たちは助かる。この私がきっと約束する!!」

謎につつまれたゴードンという男は、このときはっきりと衆目にその姿を晒していた。

――この場所の人々が助かったところで、旧市街の中にはまだ人が残っているはずだ。

彼は車椅子をギリギリまで壇の端によせると、人々の顔をのぞきこむようにしながら呼びかけたのだ……。

「このなかにゴードンズ・ガードのメンバーはいないか!?　いないのか!?　それなら、もとのメンバーでもいいんだ！」

もとの……と言われたところで、青白い顔の青年が、ようやく一人立ちあがった。まるで別人のようにみえるネフ・ブラウンだった。

車椅子のゴードン氏はかすかに一度、息をのんだかもしれない。しかし、今、人々を救えるのは、誰でもないこの男だとわかっていた。彼がいたのは天の助けだ……協力を要請した

いと大声で叫んだ。
　ネフ・ブラウンは目を閉じて首を振った。
　ゴードンはあきらめたようすもなく、彼に呼びかけた。
「君はネフ・ブラウンだろう？　私はある人から君のことを聞いて、知っていた……誰かはわかるだろう？　私はその人物から、君の願いも聞いていた。君は私に、もっと人中に姿を見せてほしいと言ったそうではないか？　街を落ちつかせるためにも、それが必要だと！　だから私は今日、この場所に来たのだ！　君の夢の手助けがしたかったからだ。いい夢だったぞ、ネフ……それをもうあきらめてしまったのか⁉」
　魅いられたような視線と、はじめて目があった。
　ネフ・ブラウンがはじめて見たナサニエル・ゴードンは、見たこともないほど激しい輝きのある目をしていた。
「君はガードの仲間を集めて、病院や居住地の動けない人々を連れ、港まで連れてきてもらいたい！　私はすぐに船の手配をして、港で待っている。君たち以外には、できないことなんだ！　頼む、ネフ！　今度は君が力を貸してくれる番じゃないのか⁉」
〝君たちならできるはずだろう⁉〟
　――ゴードンズ・ガードのリーダーが、力強くうなずいていた。
「闇の皇子！　広場から人々が逃げ終わるまで、その霧を押さえておくことができるか⁉」

あんがい元気な涼の声が、まかせてくれと叫んでいた。

——みんな、助かるかもしれないのだ！

地獄の前で希望を差しだされた人々は、震える手を握りながら避難を始めた。

最後の一人が広場を出るとき、ドームの前で倒れているただ一人の死者を、闇の皇子が高らかにあざ笑っていた……。

それからわずかのあいだに、旧市街全体を巻きこんで、異常な避難が始まった。

ナサニエル・ゴードンは工場のトラックすべてを人々の輸送に使わせた。街角ではめちゃくちゃな雑踏のところどころで、たがいに連絡をとるガードのホイッスルが聞こえていた。ラジオすらめったにない旧市街である。非常事態を知らせるために、ヘリコプターが上空を飛びはじめた。

そして港へ緊急の命令を出したあと、ナサニエル・ゴードン氏は、どこかにいなくなってしまった。

不思議にも、それからすぐに黒衣の背の高い男が旧市街に戻ってきた……ナイトハンドと呼ばれる男だ。

傷つけられた誇りと、悪事のつぐないを求めるために……彼が目指しているのはあの場

所、ザ・タワーである。
最上階ではナルダンがただ一人で、勝利の喜びを味わっていた。美しい模型の街を前に、静かに手を組んで立っているのだ……。
――もうすぐだ、あとわずかな月日でこの街が実現する！
彼がなによりも執着していたのは、この街を現実に自分のものとすることであった。
かなり前に……一人の若い設計家が、ナルダンのもとにこれを持ちこんできたのだ。
非常に優秀な男だった。ナルダンはひと目見て、幻に魅せられてしまった。
ただし、彼はその実現については笑っていた。
〝もちろんこれは夢ですよ。現実にこれを作ろうと思ったら、現在どこの都市でもスペースは足りません。仮に荒野からはじめるとしたら、１００年……いや２００年はかかるでしょう〟
――バカめ！　それでは生きているうちに、私が称賛されることにならない！
なんとしても、みずからの手でこれを完成させ、自分だけの栄誉を受けたかった。
ナルダンが何をするつもりか知ると、設計家は顔色を変え、逃亡しようとしたものだ。
とあるハイウェイの上で、待ち伏せされて彼は死んだ……ナルダンはすべての設計図を、設計者を殺して手に入れたのだ。
さて……オフィスの窓のブラインドは降りていた。

自分は教養ある人格者だと考えていた……人が大量に死ぬさまなどは、あえて見たいとは思わない。

だがたった今、この下では旧市街の住人がバタバタと死んでいることだろう。

誰も理由すらわからぬまま、死んでいくのだ。

——旧市街の人口はそう……75パーセントまでが死に絶える計算だったな。

その後は、かんたんにすべてを取り壊せる。何も面倒なことはない……それどころか、自分は恩人と言われるだろう。

まずはあの場所……アルディーンの罠のある上に、第二のタワーを建てるのだ。

ネオ・ナリタの妖魔、アルディーン。彼こそは、存在そのものがすでに汚点なのだ。新しく美しいナルダンの都市に、旧市街の妖魔を生かしておけるわけがない！

しかも、彼にだけは〝霧〟も通用しないかも知れなかった。仮に息の根をとめられたとしても、7年か17年後には妖力が野放しにされてしまう……。

——本当にやっかいな相手だった。だが、私は最高の手で封じこめてやったのだ。

そのために、あのファレルを使ったのだ。

ファレルか……あの男は今ごろ各シンジケートの者たちを連れて、旧市街で最後の会合を開いているはずだった。〝最後の会合か！〟残忍な笑い声が壁にひびいた。

——ククク、愚かな男だった。ケミカル・ブルーの合成法など、どこにもありはしなかっ

たのにな！

それはただ、組織の人間を食いつかせる罠にすぎない。ファレルの――つまり自分の――望む日に、望む時に、旧市街に集まらせなければならなかったのだ。

彼に渡した薬はすべて、従来どおりの方法で製造済みの品を密輸してきたのだった。

フェスティバルの資材は、よい隠れ蓑になってくれた。

たいへんな金がかかってしまったが、マア、しかたのないことだろう。

この街に巣くう犯罪者たちは、霧で一掃せねばならぬ。

とりわけ凶悪な者たちは、さらに確実に集めておかねば！　旧市街にいる者は、もはや誰も逃げられないのだ……ただしこの部屋だけは別である。

使用するガスは重くよどむ。地上はるかなこのオフィスはまったく安全だとわかっている。

……あの若造、ナサニエル・ゴードンの運命を思って薄く笑った。車椅子のあの男には、万に一つも生きのびるすべはないはずだ。

「だが死んだあとだ、ゴードン君が本当に悲惨なのはな！」

満足げな笑みが深くなったようだ。

自分の手で仕掛けたガスが、旧市街の生きとし生ける者を殺し尽くす。

数千の人々が死ぬのである。もちろん、当局の厳しい調査がはじまる……原因がつきとめ

られるまでは、けっして追及は終わらないだろう。

――だがこれは、ナサニエル・ゴードンの工場の事故ということになるのだ。

死の霧が消えしだい、自分のわずかな腹心の秘書たちが、無人となった工場に入って状況を作りあげる。警察はゴードンの工場が、じつは密輸の兵器工場であり、ずさんな毒物の管理をしていた事実に驚愕することであろう。

死人は口をきかず、〝証拠〟はすでにちゃんと整っている。

――なぜか謎の多い男で、もともと暗黒街などとのつながりを取り沙汰されていたのだ。これほど身代わりに適した人間もいなかった。ナルダンがうれしげに笑う。

工場の評判もファレルが熱心に堕としてくれた。死んでからも、晴らせぬ汚辱にまみれるゴードンを思うと、胸がスッとするようだ。

――霧が晴れたとき、この街は別世界への一歩を踏みだすだろう。

美しい未来のネオ・ナリタに乾杯したかった。

もうすぐ現実のものになる。選ばれた人間だけを住まわせる理想の都市だ。

私もまた、そこで最高の地位を得て、理想的に君臨するのだ！

「私の生涯最後の夢は、かなうのだ……」

……身震いするほど素晴らしかった。

そのときである。聞き慣れたエレベーターの電子音がナルダンを飛びあがらせた。

――誰だ!?　この最上階にあがってこられるのは、パスワードを知る秘書だけのはず……。

振りむいた彼の目の前に、黒衣の男が立っていた。

はじめて目にする相手だったが、ナルダンにも誰だかわかっていた。

ネオ・ナリタのもう一人の悪の狩人、ナイトハンドだった。

――ナ……ナイトハンド!

彼は手を握りしめ、忙しく考えをめぐらせた。

この男もまた、旧市街のどこかで霧にまかれることと考えていた。もし生き延びても、この後の計画は完全に合法的になるのだから、恐れることはない……ところが彼はもうすべて知っていると言って、ナルダンをあざ笑うのだ。

「人殺しのナルダン！　貴様の計画は失敗したのだ。ブラインドを開けて見るがいい、みんなとっくに避難をはじめているぞ！」

窓の外、眼下の光景はナルダンを愕然とさせた。

フェスティバルの会場には人ひとりいない！　街の上空をナリタ署のヘリコプターが飛びまわり、まだいるかもしれない住民に避難を呼びかけていた……なぜかは知らぬが、ザ・タワーの最上階くらいまで高度をあげていれば大丈夫だと聞かされている。

〝どうだ、ナルダン?〟ナイトハンドが仮面の下で笑いながら、レーザーの照準をあわせた。ナルダンが叫ぶ。

「……待ってくれッ！」

生死のかかる貴重な一瞬である。彼は懸命に相手の気をそらそうとした。

この男には買収はきかない……だがすこしでも時間をかせげば、秘書たちが来るはずだった。

「おや、誰を待っている……お前の秘書たちなら、みんな死んでいるぞ？」

心を見すかしたように処刑人がつぶやいた。ナルダンはがっくりと肩を落とした。

「そうか……しかたがない。たしかに私がやった計画だ。だが未然に終わって、いま心からホッとしている。もともとこれは私の意志ではなかったのだ！」

〝すべてある人物に、脅されてやっていたことだった！〟

誰なのだ!? ナイトハンドが尋ねると、ナルダンはそこにチャンスを見いだしていた。

――慎重に答えろ、うまくいけば注意がそれるかもしれない。そうしたら……。

「……あの男、ナサニエル・ゴードンだ」

「な……なんと言った？」

相手が大きく動揺した気配がする。ナルダンは必死でまくしたてた。

「本当だッ、嘘ではない！　彼は恐ろしい男なんだ！　事業家に見せかけているが、裏では暗黒街とつながっている……計画もすべて彼が立てたものだった！」

ふとナルダンは、相手がなぜかおもしろがっている気配を感じて黙ってしまった。

黒衣の青年はくちびるに不思議な微笑(ほほえ)みを浮かべていた。
片手を頭にまわし、仮面をはずそうとしているのだ……。
「私が敵の前でこれをはずすなどありえないことだが、貴様には特別だ。見せてやろう、私の素顔を……」
現れた顔を見て、ナルダンの目が極限まで見開かれる。アザこそ消えているが、その顔はすでに何度も見ていたのだ。
ただ指さして、意味にならないうめき声をあげているナルダンに、青年は親しげに笑いかけてこう言った。
「見てのとおり、私はゴードン氏ととても親しいのだ。ナサニエル・ゴードンは言っているぞ……そんなことはすこしも知らないとなッ！」
〝死ね、下司(げす)めが!!〟ところかまわずレーザーでうち抜かれたナルダンの死体は、奇しくもよろめきながら、隠し部屋の模型の上に倒れた。
彼の生涯の夢の最期だ。

……涼(りょう)は旧市街を、ひたすら走っていた。
最後の一人が広場から出て……ようやく持ちこたえていた〝霧〟を放したのだ。

今はただ、自分も港にいきつかねばならない。
だが、それは突然に訪れたのだ。
「……アッ!?」
いきなりひざから力が抜けたかと思うと、身体が路上に倒れていた。
そしてそれからはもう、どうしても指一本動かせなかった。そうか……おかしいほどはっきりと理由がわかっていた。
――僕はもう、使い果たしてしまったのだな……。
〝すべての力と妖力を〟
かろうじて目をあげて、自分が駆けてきた方向を見つめた……きらめく霧ははるか遠くで線になっている。動きはかなり遅い。計画どおりのスピードとは、とても思えなかった。
――たぶん、はじめに僕が気流を乱したせいだろう。
だが、いずれはここまで来るはずだ……アルディーンはゾッと身震いした。
またあの苦しみを味わうのか？　おそらく、こんどこそとどめになる……。
涙がひとすじだけ、頬を伝って流れたが、すぐに口もとに微笑みが浮かんだ。
――真夜子……君はもう港にいるね？
きらめく霧が、すこし近くなった。今、涼がしたいただ一つのことは、ゴーグルをはずし、上着を脱ぐことだ。

……闇の皇子の姿のままで、死んでゆきたくはなかったのだ。

〝アルディーン〟だったことはすこしも恥とは思わないが、もしも黒衣のまま発見されたら、ナリタ署はどこか特別な場所に、身体を収容してしまうかもしれない。

――それでは真夜子に、永久に行方がわからなくなってしまうからね。

僕が見つかれば、真夜子はさぞ怒るだろう。

〝バカ、間抜けッ……あんた一人じゃないの！　モタモタして霧にまかれるなんてッ！〟

――それからたぶん……泣いてくれるかなァ？

優しい真夜子は、ときどきは弱虫の居候を思いだしてくれるだろう。無意識に投げとばしたゴーグルが、何かの空き缶にぶつかって音をたてたようだ。

真夜子にもう一度会いたかった……。

そう思って目を閉じた瞬間、熱い手が自分を抱きしめて、叫ぶ声が聞こえた。

「涼！　涼ッ、目を開けて、あんたなのね!?」

目を開くと、赤いジャンパーの少女がそこにいた……。

「真夜子ッ……どうしてここに!?　君は港にいったはずじゃなかったのか！」

アルディーンの声で彼女に言ったはずだ。〝一刻も早く、港へ逃げろ！〟と……真夜子がうなずくのを確かに見たのに!?

実際に真夜子は一度、港に走ったのだ。だが、途中で引き返してきてしまった。

どうしても涼のことが捨てられなかったからだ……〝あの人〟との約束にそむいても、あのチビをもう一度だけ、探してみるのよ！

霧に避難する人波にさからって、真夜子は旧市街に戻ってきた。

〝涼！　涼!!〟しかし、いまさら見つかるはずもなかった。

あきらめかけたとき、路地のむこうで小さな物音がしたのだ。何か投げられたものが、缶にでもあたる音……奇妙なほど胸が高なったのだ。

「急いで来たら、あんた、まだいるじゃないのッ！　どうしたの、いったい、どこにいたのよ!?」

〝あ……僕、ずっと捕まっていたんだ〟

――どうせそんなことだろうと思っていたわ！　バカバカッ、でもよかった！

「……よかったわァ！　最後でも見つかったんですものねッ、さあ早く、逃げるのよ！」

すぐにも立ちあがり駆けだそうとした真夜子だが、腕に抱いた居候は動こうとしなかった。

不思議なくらい穏やかな目で自分を見あげて、

「真夜子、ごめんね。僕はもう動けないんだ……」

「……なんですって!?」

でも真夜子は一人でも逃げるんだよ……怒ったような表情で少女の目が大きくなった。

「なに、言ってるの⁉　起きるのよ……こら、起きなさいってば‼」
半狂乱で叫ぶのだが、すぐにそれが事実だとわかったようだ。
涼はまるで、人形のようにグッタリして、自分ではもう起きることもできないのだ。
——だって、そんな！　もう〝霧〟がそこまで来ているのにッ！
ゾッとして振りかえると、光る霧は通りのはずれに見えるほどになっている。
〝それなのに、涼はここで動けないと言うなんて！〟
怖さに泣きそうになって口もとをゆがめると、優しい手がゆっくりと髪にさわった。
「真夜子……泣かないで、早く逃げないといけないしね。僕はね……大丈夫だよ、きっとあとで追いかけるから。でも来てくれて、スゴクうれしかった……真夜子が大好きだよ！」
〝港はすぐそこだろう？　真夜子の足ならきっと逃げきれるからね！〟
だが、こんな奴の下手な嘘なんかで、だまされる真夜子さまではないのだ。
——あとからなんて無理なのに、ド下手なウソ！　信じるとでも思っているわけ⁉
でもそれならどうすればいいのだろう？　霧は休みもせず、刻々と近づいてくるのだ。
このまま残れば殺される……広場で死んだ男の血まみれの最期を思いだして、真夜子は震えあがった。
——涼……涼、あたし……あたし……。
ついに真夜子は決心して叫んでいた……。

「あたし、あんたとここにいるわよ!!」

真夜子、ダメッ……少女はきつくきつく涼を抱きしめて、涙を流していた。

「いいわね、涼……怖くなんかないのよ！　あたしがついているから、何も心配しなくていいのッ。あ……あれはすこしも苦しくないものなのよ、夢でも見てるように楽になれるの！　本当よ、涼ッ、あたし見たんだから！」

……必死に叫んでいれば、自分にもそう信じられるかもしれない。

ガタガタふるえながらも、真夜子は涼を離さなかった。

この弱虫の怖がりやを、一人で残していくことはもう無理だったのだ。たった一人になった涼は、どんなに恐ろしい思いをするだろう……冷たい路上に置きざりにされて、死の霧が来るまで震えながら泣くのだろう。

――あたしがいてやるわよ！　意気地なし！　……でもいいわよ、二人でいようね。あたしだってあんたのこと……すこしは好きだったんだわ！

いつのまにか、二人のくちびるがあっていた。

強く抱きあってキスをかわす……そのときだけ恐怖が薄れるかもしれない気持ちだった。

「……涼、あたし怖いわ」

「大丈夫……大丈夫だからね、真夜子」

夢うつつのようにつぶやく涼は、何か不思議な力が身体にあふれるのを感じていた。



アルディーンの妖力とは違う、かぎりなく暖かい何かが、あとからあとから流れこんでくるようだった……ただ一人じゃないというだけで、こんなに強い火が内側に燃えてくる。アルディーンより激しい力が、まだ僕にはあったのかもしれない！

彼はよろめきながらも、そばの壁に手をかけて立っていた。

「真夜子……ああ！　動けるみたいだ！」

〝やったわ、涼！　死んでもそのまま歩くのよッ〟

すぐに真夜子は涼に肩を貸し、目を輝かせて立ちあがった。霧は、もうすぐそばまで来ているのだ。だが彼らはわき目もふらずに港へと向かっていた……。

最後に……誰もいなくなった街を、ナイトハンドが歩いていた。

「……もうそろそろ、私もいかなければな」

街角で一つの死体を見おろしていた彼が、つぶやいて顔をあげた。死人は若い金髪の男で、非常に大勢の手でメッタ刺しにされて死んだらしい。

胸ポケットからハンカチを引きだして、紋章も確認した。

不運なファレルに間違いないのだ。

何も知らずに最後の会合とやらを開いた彼は、そのままでもガスで死ぬはずだったのだ

が、避難を呼びかけるナリタ署のヘリコプターが、その場の者たちに真実を告げたのだ。
〝畜生、罠だったんだな!?〟
ファレル自身がオトリであったことも、怒り狂った彼らにとっては問題ではない。
――その結果がこれか……。
ナイトハンドはあらためてあたりを見まわした。死骸がそこいら中に転がっている。これはロイコ……これはアイヒマンの組織だな。
霧にふくまれた毒を吸って、みな恐ろしい形相で死んだらしい。
マスクをかけたナイトハンドにしても、もはやここには何の用もない。足を踏みだす際に一人を蹴ってしまった。死体の右手から45口径がカラカラと音をたてた。
殺しあい、死んだ光景というのはなんとあさましいものなのだろう？
はじめてのように、そう思った。
なんて愚かな姿か……死ぬまで、食い裂きあうことしか知らなかった犬のようだ。
――そして、復讐しか心にない自分というものは……？
あてもなく郊外に近い場所まで来たときに、意外な人間を見つけてひどく驚いた。
「威梨花!?　なぜ貴様、まだこんな場所にいる？　霧はすぐこの場所にも来るのだぞ！」
萎れた花のような風情で、梨花は動かなかった。
「うるさいね！　放っておいてちょうだい……どうせ私など、もうどうでもいい女なの

よ！」

不意に頬を涙が伝い落ちたと思うと、さめざめと泣きはじめた。

なんだ、こいつ……あっけにとられたナイトハンドがつい見つめていると、

——もうダメ……もう終わりよ、梨花の一生の恋はかなわなかった。

自分は香港の威梨花なのだ。これと思っておとせない男など、今まで一人もいなかった。たとえ先に恋人がいても、またたくまに梨花に夢中にさせた。ましてあの小娘など、ものの数ではなかったのだ。

〝そうよ、泣こうがわめこうがおとして見せるわ！〟だけどただ一つ、これだけは梨花の力でもどうにもできない……。

「……いくら梨花でも、お母さん呼ばわりされたら、もうおしまいよ！」

あの少年の澄んだ瞳いっぱいに、母に似た面影への愛情があふれていた。

あの賢い子が何度も妖しい手にのるはずだ……何度でも誘いにのりたくなるはずなのだ！

——もうどうにもならないわ！　いっそ死んでしまいたい!!

悲痛な声をあげた瞬間、ナイトハンドがこらえきれず爆笑した。ウッ……と言ったかと思うと、腹をかかえて笑いころげたのだ。

〝畜生、何がおかしいッ？　梨花夫人の言葉にもどこか力がない。ナイトハンドは物も言わずに、ひょいと彼女を抱きあげて走りだした。

霧の迫る場所からアッというまに抜けて港に着くと、かなり乱暴に放りだす。はじめは抵抗していた梨花も、このころにはかなりおとなしくなっていた。

「さあ、ここでいい。あとは貴様の部下がいるしな」

そう言うと、つくづく彼女の顔をのぞきこんでたずねた。生命を助けてやった代償には、これくらい聞いてもバチはあたるまい。

「貴様な……本当のところ、今いくつなんだ？」

「二十……二よ」

……このごにおよんで梨花は、まだ四つもサバを読んだ。

「フン、まだたいした年齢でもないではないか！　顔だってふためと見られないほどでもない。なにも好きこのんで、六つも年下の男を追いまわすことはあるまいが？」

〝さっさと逃げろ、毒虫め！　次、この街に現れたら生命をもらうからな！〟

そう言いすてて、振りむきもせず消えてしまった。

呆然としている梨花夫人を、ようやく部下のショーンが探しあてた。

〝奥様、参りましょう。クルーザーを用意いたしました〟そう言って手を引いたのだが、夢を見ているように動こうともしなかった。

はじめて見たナイトハンドの表情を、いつまでも思いかえしているのだ……。

――あれがきっと、アルディーンが好きだといっていた笑い方ね。

不思議なことだが、笑っているときのナイトハンドには、まるで別人のような面影がだぶるときがあった。それはおおらかで明るい笑顔の青年だ……笑い上戸ですらあるようだ。

もし運命が、あれほどまでに彼を傷つけなければ、なれたのかもしれない別の姿だ。

――おかしいわ……私はいままであの男の何を見ていたのかしら？

たくましい腕を思いだすと、指先までカッと熱くなった。

そもそもあれほど強く美しい身体の男が、かつて自分の前にいただろうか？

「お……奥様？」

なぜか泣いている梨花を見て、ショーンが恐る恐る声をかけた。

「ああ、変ね……どうしてかしら？　自分でもおかしいくらい泣いているわね？」

――とにかく、胸の奥が急に痛くなったのだ。

血が燃えるように熱くなって、強く押さえていなければ心臓がどうにかなってしまいそうだ。あんなにも軽々と自分を抱いた腕を思いだすと、胸の鼓動はいっそう激しくなる。

いまや彼のなにもかもが懐かしく、恋しかった。

――まあ不思議、こんなことがあるのかしら？　でも、もしかして……もしかして。

「……もしかして、あの人こそ運命の相手だということがあるかしら？」

「ハア？　奥様？」

――まるで人間ではありえぬほどに、強い男だったのだわ！

アルディーンとは比較にならない荒々しさ、男らしさ！
それでいながら孤独な者なのだ。愛する者には去られ、あるいは裏切られて、もう誰を求めようともしない。からっぽの腕には何もなくて、このままただ一人、闇のなかで……？
いきなり、胸がつぶれるほどつらくなった。
――いいえ、いいえ！　梨花がいる!!
美しい梨花はすっくと立ちあがると、ショーンに命令した。
「ショーン、香港へ帰るよ！　帰ってあの男に罠を張るんだ……けっして逃がさないように念入りにね！　星に誓ってもいい、今度こそ梨花は、生涯愛する人を見つけたわ!!」

……きらめく霧はやがて街をおおいつくし、翌朝になるまで消えなかった。
旧市街の人々はみな、海からそれを見守った。

エピローグ

それからすでに半月もたった。旧市街はようやく平和になっている。

ナルダンは死に、一味もほぼ捕らえられたようだ。

ナサニエル・ゴードン氏はその後も何度かネフ・ブラウンに会い、小さな育児院をつくったもようだ。ネフは恋人のマリアとともに、そこで子供たちの世話をしている。

さて……ある日の昼のこと。

旧市街の狭い裏通りを小柄な少年が歩いていた。いつものおつかいの帰り道である。

二つの紙袋と箱をかかえ、箱の中身は缶詰だった。

やたらに持ちにくい荷物に、涼はさっきから悪戦苦闘している。

彼にとっては重さはじつは問題でないのだが、腕の長さはいかんともしがたく、あちらを押さえればこちらから何かが落ちる。

アルディーンの力でいっしょくたに浮かせて運ぶ手が使えれば、こんな楽なことはないのだが……おや、すきまからまた缶詰が落ちた。

「えい、この……えい、もうッ」
「持ってやるよ！」
そう言って後ろから手をのばした男がいた。
お礼を言おうと振りむいた涼の目が大きくなる。それはすこし前まで「赤鍋亭」で、毎日のように涼をからかいつづけた客の一人だった。
真夜子と大乱闘を演じた、あの若い工員だ。
――ウワァ、どうしようか⁉
彼は涼に何を言うまもあたえず、二つの紙袋を取りあげると黙って運びだした。
大柄な若い男の後ろから、まだ少女のような小柄な少年が、どことなく不安そうな顔で箱一つを持ってついていく……。
黙りこくったままで長いこと歩いてきたが、赤鍋亭の近くまで来るとはじめて彼は、涼の顔を見て、口を開いた。
ひどく気まずそうにせきばらいをいく度もしたあとで、
「あのなァ……おれ、ゴードンズ・ガードに入ったんだぜ」
そう言って、シャツのバッジを見せたのだ。
だがべつに、そのことが伝えたかったわけではない。
「それでさ……この前はその、悪かったと思ってさ。怒っているだろうけど、もう勘弁して

もらえないかなあ？　昼はやっぱりあの店がいちばん安くてうまいんだし……」

見つめていた瞳が見るまにうれしげに輝きはじめた。

にっこりうなずくと、ペコリとおじぎをして〝毎度ありがとうございます！〟と言った。

若い工員はそれを見てひどく感心したように唸り、

「……ウーン、やっぱり女の子みたいだな！」

あわてて涼があとずさると、ゲラゲラと大きな声で笑う。

〝でもおれもガキのころはずいぶんチビだったほうだからな！〟

「18あたりから急に伸びだしたもんだったっけ。お前さんもすぐにそうなるだろうさ」

「それ、本当ですか⁉」

飛びあがった涼に、工員は重々しくうなずいてみせた。

〝なんていい人だろう！〟という目で、見あげられて困ったようすだ。

……赤鍋亭の前には真夜子が来ていて、彼の姿を見ると飛びあがって、ファイティングポーズをとった。

ウワッ……と口の中で言った工員は、荷物を置くとあわててもとの道を逃げだした。

「お客さん、どうもありがとう！　明日、また来てくださいね！」

涼が元気に手を振っている。

見ていた真夜子が脇腹を軽くこづくと、

「なによ！　もう友達になっちゃったわけ？　変な子ねえ！」

この前の霧のとき、街角で動けなかった涼は、〝足がすくんで立てなくなった大弱虫〟として、すでに徹底的に見下げられていた。

たしかに衰弱しきっていて、港の船にあげられてからは三日三晩眠りつづけたことなどは、真夜子はすこしも思いだしてくれないのだ。

――それでもまあ、いいわ……それにこの新しい花壇、なかなかいいじゃない？

この前のお休みの日、一日使って、この子は住み処と赤鍋亭の前に小さい花壇を作ってしまったのだ。

〝バーカ、何考えてるの？　トンチキ、旧市街に花壇ですって⁉〟

真夜子はさんざんいじめたり、邪魔をしたりしたが、いざできてみるとコロリと態度を変えてしまった。

安い球根だけだったが、ちゃんと芽が出てつぼみが咲きはじめると、まるで自分のことのように得意げである。

「フンフン、また一つ咲いたわね？　ねえ涼、こうして見るとあんたの思いつきもなかなか悪かないみたいだわ！」

〝お手柄よ、今度だけは！〟。赤鍋亭の前の店でも、マネをする気配があった。

しばらくすると、旧市街のこの通りには花壇がふえるかもしれない……。

かがんであれこれと花びらにさわって、じつは花をいためている少女を、涼は心から愛しい気持ちで見つめていた。

——大好きな真夜子、待っていて。もうじき僕は背も伸びて大人になるからね！

背もきっと高くなる。誰よりもかっこよく男らしくなってやる。

そのときは真夜子にもわかるだろう、すべてを打ちあけるつもりなのだ。

そうとも、胸を張って打ちあけよう！

自分こそ闇の皇子であり、アルディーンなのだと！

——ネオ・ナリタを守るのも、誰より愛している君のためだよ！

誰よりも愛する君のために、ずっとこの街を守ってきたと、力強い男として言える日はすぐに来るはずだ。

いつか来るその日を夢みて、ネオ・ナリタの守護者は微笑んだ。

それまでは……大切な真夜子のいるこの街に。

〝どんな嵐もこの僕が許さない！〟

……しかしてこれが、闇の皇子第二の冒険の始まりと終わりであった。

あとがき——瀬口恵子さんのことネ♪

読者のみなさま、こんにちは。
エヘヘヘヘ、井上ほのかです。
いつもはげましのおたよりなど、本当にありがとうございます！
おもしろかったと言ってくれる人がいると、よし次はもっとこんな話にしたいぞ！　とファイトがわいてきてうれしいです。
さて……アルディーンのイラストを描いてくれるのは、まんが家の瀬口恵子先生です。
ほのかとはデビュー以来のおつきあい、頼りにしてまっせ！
なにしろほのかの描く話は、みんなほら……アレだから、
「かわいい女の子を描いてね！　それから首なし死体もよろしくねッ！」
どんなにか難儀じゃろうと、いつも（思うだけは）思うのです。ハイ。
でも、いつか生物兵器をやってみたいのよ……ウフフ、見捨てないでね♡
いただくお手紙の中にも、「絵がスゴクよかった」と正直な感想があったりして、そんな

ときは自分じゃないけど、けっこううれしいです。
住んでいる場所はちょっと遠いのですが、お友達なわけなのですよ。
……はじめてお会いしたのは、たしか夏だったはずです。
一緒に軽井沢へ行こう……と計画をたてて、渋谷で待ちあわせをしました。
ヤー、あのときはびっくりしたなあ。予想とぜんぜん違うんだもんね！
ケーコさんは描く絵とどっか似ているはずだと、思いこんでいたのですね。ちなみに背が高くてキリリとしていて、スポーティー・ワイルドというイメージよ。
違いました……ええ、みごっとに！
かわいいの、小さいの、リスみたいなんだもんねえ（声がまたかわいい）。
まあ勝手なイメージを作ったほうが悪いけど、そう思っていたのはほのかだけじゃなくて、恵子さんのコミックスのあとにもやっぱりそんなことが書いてあった（『幻影学園』参照ね）。
ほのかは恵子さんの見かけと絵柄のギャップには、きっと何か隠された神秘の謎があると思う。いろいろ、身の毛もよだつような推理も進めています。
ワハハ、いつかきっと解いてみせるもんね！
（そんなことより仕事しろ！　・担当注）
……好きな色は赤、花ならひまわりかチューリップで、たしか星座は射手座の生まれ。

担当さまとともに、いつも本当にありがとうです。
そして、読者のみなさまにも。
それでもって、このところいそがしいので遊んでやれず、噛みつき猫になってしまった我が家のM君には愛を!!

井上ほのか

早くも人気爆発の新シリーズ「都市戦記・妖魔アルディーン」の第2弾は、いかがでしたか？ぜひ、感想をお寄せください！
♡ファンレターのあて先♡
〒112-01　東京都文京区音羽2―12―21　講談社　文芸図書第三出版部気付「井上ほのか」係

いつもすてきなイラストで大人気の瀬口恵子先生。KCフレンド「幻影学園Ⅱ」も好評です。応援のおたよりを、どしどしお寄せください。
♡ファンレターのあて先♡
〒112-01　東京都文京区音羽2―12―21　講談社　少女フレンド編集部気付「瀬口恵子」係

井上ほのか(いのうえ・ほのか)

講談社X文庫

1970年1月5日、東京生まれ。やぎ座、血液型B型。「アイドルは名探偵」で衝撃デビューを飾った。克樹と真名子のわがままコンビが活躍する、この「アイドルは名探偵」シリーズをはじめ、読みごたえ抜群の本格推理「少年探偵セディ・エロル」シリーズも好評です。そして、初のSFアクション「都市戦記・妖魔アルディーン」シリーズも絶好調。好きなものは、リバー・フェニックス、ハンコ集め、映画に読書、それからローラースケートと、いちばんはなんたって東山紀之。
応援よろしくッ♡

TEEN'S HEART

都市戦記・妖魔(ようま)アルディーン2
井上ほのか
●
1991年4月5日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 編集部 03-5395-3506
販売部 03-5395-3626
製作部 03-5395-3615
本文印刷—豊国印刷株式会社
製本———株式会社 堅省堂
カバー印刷—双美印刷株式会社
デザイン—山口 馨
©井上ほのか 1991 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。

ISBN4-06-198519-1

(文3)

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

一冊一冊読み終えるたびに、素敵少女に大変身!! (愛知・矢吹有樹子さん)

いつか夢の野原を出てーアキラさんの放課後ー 相原夏希
大切な靴の盗難から始まった事件の結末は!? (絵・湖東美朋)

夏の扉の向こうがわーアキラさんの放課後ー 相原夏希
ナツコのひとことが、せつない事件の始まり。 (絵・湖東美朋)

天使を殺さないでーアキラさんの放課後ー 相原夏希
マンガ家アシスタント殺人事件の謎を解け!! (絵・湖東美朋)

だからお願いティンカーベル 青山えりか
魔法の杖を振っておくれ、ティンカーベル!! (絵・早坂いあん)

ネバーランドに連れてって 青山えりか
カリンと海、美蓉と空の恋のゆくえは……? (絵・早坂いあん)

みんなだれかに恋してる 青山えりか
わたし、見てるだけの恋しかできない……。 (絵・長嶋めぐみ)

男のコにはわからない 青山えりか
わたしの気持ち、なんにもわかってない……。 (絵・長嶋めぐみ)

どう思ってくれてるの? 青山えりか
「つき合って」って、ほんとの気持ちなの? (絵・長嶋めぐみ)

素直じゃないよね 青山えりか
このまま素直になれずに、卒業していいの? (絵・長嶋めぐみ)

ラヴリーをあげるね 青山えりか
親友と同じ人を好きになったら、どうする? (絵・さとう智子)

小麦色のバレンタイン 青山えりか
ユート、引退しちゃうってホントなの……!? (絵・さとう智子)

好きから始まる夏物語 5人の恋ストーリー 青山えりか
5つの恋の物語。あなたの恋はどれですか? (絵・長嶋めぐみ)

彼には手を出さないで 青山えりか
お願い、今さら彼を連れていかないで……。 (絵・長嶋めぐみ)

夕暮れ時につかまえて 秋野ひとみ
クラスメイトの、殺人の濡れぎぬをはらせ!! (絵・赤羽みちえ)

星降る夜につかまえて 秋野ひとみ
夏の軽井沢の別荘で起きた怪事件の結末は!? (絵・赤羽みちえ)

朝陽の中でつかまえて 秋野ひとみ
第3の事件は、赤頭巾ちゃん殺人事件……!? (絵・赤羽みちえ)

夢みるうちにつかまえて 秋野ひとみ
第4の事件は、クリスマス青い鳥盗難事件! (絵・赤羽みちえ)

素顔のままでつかまえて 秋野ひとみ
小林クン!! あなたの気持ちは、誰のもの!? (絵・赤羽みちえ)

苺畑でつかまえて 秋野ひとみ
魔法のおまじないがひき起こした事件とは!? (絵・赤羽みちえ)

ペーパームーンでつかまえて(上) 秋野ひとみ
あたしたちの『不思議の国のアリス』事件!! (絵・赤羽みちえ)

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

大切な瞬間を心の奥に一コマずつ刻んでいきたいの!!（宮城・渡辺一実さん）

ペーパームーンでつかまえて㊦ 秋野ひとみ
遊園地の迷路にまつわる怪事件の結末は……!?（絵・赤羽みちえ）

眠りの森でつかまえて 秋野ひとみ
謹慎中に起こった『眠り姫殺人事件』とは!?（絵・赤羽みちえ）

ダンスのあとでつかまえて 秋野ひとみ
サキ。お見合いするって、本当なの……!?（絵・赤羽みちえ）

真夏の海辺でつかまえて 秋野ひとみ
小林クンぬきでも、事件は解決できるのよ!!（絵・赤羽みちえ）

ティファニーでつかまえて㊤ 秋野ひとみ
ニューヨークの"ピーターパン事件"とは!?（絵・赤羽みちえ）

ティファニーでつかまえて㊦ 秋野ひとみ
あたしたち、ダイヤ狂の男に復讐されるの!?（絵・赤羽みちえ）

最後はキスでつかまえて 秋野ひとみ
今回は、あたし、藍沢左記子が主人公なんだ!!（絵・赤羽みちえ）

ミモザの庭でつかまえて 秋野ひとみ
"毛糸の粉屋の鍵"って、どんな意味なの!?（絵・赤羽みちえ）

ななみ・海岸物語―空と海の輝きのあいだで― 秋野ひとみ
温室の扉を開けると、なにかが起こる……!?（絵・赤羽みちえ）

ななみ・東京物語―雨上がりの夜空に― 秋野ひとみ
匿名の手紙で始まった奇妙な事件の真相は!?（絵・赤羽みちえ）

ななみ・高原物語―粉雪の降る日まで― 秋野ひとみ
時を越える恋の行方は……!? 3部作完結編。（絵・赤羽みちえ）

ななみ・早春物語―セピア色の思い出を探して― 秋野ひとみ
新しい遠い旅の始まり…。ななみ・番外編!!（絵・赤羽みちえ）

バンパイア・シティ 秋野ひとみ
時を止めたいと思ったことがありますか!?（絵・赤羽みちえ）

さよならは、いわないで―バンパイア・シティー 秋野ひとみ
こよみと龍之介の、"星の散歩"物語。（絵・赤羽みちえ）

あの日を忘れないで―バンパイア・シティー 秋野ひとみ
好きといってから、すべてがはじまる……!!（絵・赤羽みちえ）

幽霊たちのセレナーデ―バンパイア・シティー 秋野ひとみ
お化けが出るという合宿所で起きた大事件!!（絵・赤羽みちえ）

金の冬 銀の雪 あきば麦子
美しい歌の調べに、不思議な恋の秘密が……。（絵・あきば麦子）

心の扉―あいつに愛をこめて― あきば麦子
菜子は蓮に恋してる。でも、彼、年下なの!!（絵・あきば麦子）

素顔の君に 麻生ゆう
理央、17歳の春。せつない恋をしました。（絵・麻生ゆう）

嘘でもいいから 麻生ゆう
生意気な女たらし。彼に夢中になるなんて。（絵・麻生ゆう）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

夢の話にリボンをかけて、あなたの心に届けます(神奈川・河野依梨子さん)

明日は好きといえる　麻生ゆう
兄キみたいだった彼が、転校先の教師……!?　(絵・麻生ゆう)

ほらね、きっと言える　雨宮沙織
わたしは、あなたにとって、ただの妹なの?(絵・石井まゆみ)

でもね、あなたが気になるの　雨宮沙織
初めから、わかってた。望みのない恋だって。(絵・石井まゆみ)

クラスメイト　雨宮沙織
ただの〝クラスメイト〟のはずなのに……。(絵・石井まゆみ)

☆片想いのジュリエット　雨宮沙織
演劇祭に出ることになってしまった渡は……。(絵・石井まゆみ)

☆ハートブレイクバスターズ　池田裕幾
ショーコのバイト先は、失恋退治屋サンなの。(絵・かずはしとも)

16ビートで恋したい　井出千昌
歌って愛した、ロックな気分の星くず伝説!!　(絵・高田祐子)

花言葉を知ってから　井出千昌
意外な花言葉から、美帆の初恋が始まった。　(絵・高田祐子)

アイドルは名探偵　井上ほのか
狙われた主役候補!?　最年少18歳作家、登場。(絵・瀬口恵子)

アイドルはそれはKISSから始まった　井上ほのか
名探偵2　宝石探し、暗号、ギャング。真名子大活躍!　(絵・瀬口恵子)

アイドルは愛してるっていわせたい　井上ほのか
名探偵3　依頼人は、17歳の未亡人!?　真名子大ピンチ。(絵・瀬口恵子)

アイドルはいつまでもそばにいて　井上ほのか
名探偵4　愛していないと、解けないミステリーがあるの!　(絵・瀬口恵子)

名探偵を起こさないで　井上ほのか
ミステリー好きの眉子に、難事件の招待状が。(絵・瀬口恵子)

スコットランド古城殺人事件　井上ほのか
呪いの人魚がよみがえる。眉子たちの大活躍。(絵・瀬口恵子)

ニューヨーク摩天楼殺人事件　井上ほのか
今度の事件の依頼人は、暗黒街のボスだって!?(絵・瀬口恵子)

都市戦記・妖魔アルディーン　井上ほのか
凶悪都市の黒幕は誰?　天才少年・涼の活躍!(絵・瀬口恵子)

☆都市戦記・妖魔アルディーン2　井上ほのか
闘いはじめた涼に、妖艶な美女の危険な罠が!(絵・瀬口恵子)

敗者復活ラブモーション　岩橋久梨江
姉は野性児、妹はお嬢様。恋の勝者はどっち!?　(絵・河村美久)

初恋色のページ　岩橋久梨江
友達は美人ばかり。小巻の恋は絶望的!?　(絵・河村美久)

追いかけてサザンウインド　岩橋久梨江
彼は天才ランナー!?　私だけが気づいてる。　(絵・河村美久)

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

ききめバッチリ、恋薬は、ティーンズハート♡（鳥取・竹内ひとみさん）

おまじない電撃フレンド 岩橋久梨江
憧れのスターにテレポートした私。快感!?（絵・愛本みずほ）

私のハートに一票を！ 岩橋久梨江
生徒会長が大好きです。これって校則違反!?（絵・愛本みずほ）

魔ジックリングのわすれもの 岩橋久梨江
恋の宝物、きっとあなたのそばにあるはず。（絵・愛本みずほ）

クリスタル恋愛事件 岩橋久梨江
水晶のパワーが、あたしの恋を見つけてくれる。（絵・愛本みずほ）

誘惑のセイント・ナイト―クリスタル恋愛事件― 岩橋久梨江
ダイヤモンドはハートを誘惑する悪魔なの?（絵・愛本みずほ）

BU・SU 内館牧子
ステキな恋とボーイフレンド、できるかナ?（絵・そうだふみえ）

猫街ふあんたじい 浦根絵夢
猫になったトモキくんの、楽しい夢物語。（絵・くりた陸）

URASHIMAめるへん 浦根絵夢
乙姫さまが、アブナイ!! 龍宮城へ急げ。（絵・文月今日子）

夢の中のパセリへ 浦根絵夢
青山ばせり、14歳。不思議な恋をしたの!?（絵・楠瀬敦子）

チョコレート・フェアリー 浦根絵夢
片想い少女の美夜に、チョコの妖精が接近。（絵・くりた陸）

さよならカトリーヌ 浦根絵夢
異空間の美少女、カトリーヌとムツミの恋!?（絵・楠瀬敦子）

宇宙タペストリー[1] 影の娘ルナ〈月の夢〉 大江小夜
月の魔力がルナに宿り、不思議な力が……!?（絵・印度更紗）

宇宙タペストリー[2] 時の魔術師テラ〈大地の力〉 大江小夜
魔術師テラがルナに仕掛けた「時の罠」とは!?（絵・印度更紗）

宇宙タペストリー[3] 水の守護神マール〈海の囁き〉 大江小夜
ポンポン船マールが〝変身〟して空を飛んだ!?（絵・印度更紗）

アイドル♡殺人事件 大島暁美
親友の人気No.1歌手を殺した犯人はアイツ!（絵・原田清美）

グルーピー♡殺人事件 大島暁美
ロックの会場には、殺人事件が待っていた!（絵・竹原悠理）

ヘビィメタル♡殺人事件 大島暁美
おもしろいBFができて探偵までしちゃった。（絵・悠紀冴子）

レディースルームにご用心 大島暁美
アイドルと恋をしたら退学になるなんて。（絵・悠紀冴子）

恋は星の砂 織田加絵
由麻の気持ちは、二人の男の間で揺れる……。（絵・さこう栄）

ティーンズハートに乾杯 織田加絵
高橋クン♡ あたしの気持ちに気づいてネ!!（絵・巻野路子）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

「あら新刊？」「ちょっと母さん、夕食は？」（秋田・菅千陽さん）

潮風のウエディングベル 織田加絵
隆志さん。あたしのこと、どう思ってるの!?（絵・巻野路子）

恋は季節風―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
美里の最初の事件は、死んだはずの母親捜し!?（絵・さこう栄）

南の国からきた少女―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
あゆみちゃんのお姉さん、絶対に捜します!!（絵・さこう栄）

ジングルベルは眠らない―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
正一くん。ママの疑いを、はらしてあげる！（絵・さこう栄）

初恋泥棒を探せ―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
あたし、順子ちゃんの初恋の人、探します!!（絵・さこう栄）

恋人記念日―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
和也！　あたしの気持ちを裏切らないでネ!!（絵・さこう栄）

追いかけてスキャンダル―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
ペルシャ猫の誘拐から、事件発生でーす!!（絵・さこう栄）

恋の罠に気をつけて―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
こずえちゃん！　真犯人探しは、まかせて!!（絵・さこう栄）

狙われた初恋―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
あたし、早紀ちゃんの初恋を、実らせます!!（絵・さこう栄）

ハートに♡キスして―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
ミリと和也の、〝ファースト・キス物語〟!!（絵・さこう栄）

翔べないエンジェル―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
殺人予告のハガキから始まった事件の謎は!?（絵・さこう栄）

死ぬほど恋したい―こちらバラ組探偵局― 織田加絵
マンションからの連続飛び降り事件の謎は!?（絵・さこう栄）

恋少女は名探偵 織田加絵
あたしたちが発見した死体が、消えちゃったの!!（絵・垣野内成美）

アイラブユーは聴こえない―恋少女は名探偵― 織田加絵
ファッションショー会場で、殺人事件発生!!（絵・垣野内成美）

メフィストとワルツ！ 小野不由美
「好きだよ」、それは悪魔のささやき!!（絵・中村幸緒）

悪霊なんかこわくない 小野不由美
恐怖館からSOS！　壁に消えた少年は誰？（絵・中村幸緒）

悪霊がいっぱい!? 小野不由美
旧校舎に霊能力者が大集合。怪事件の正体は!?（絵・中村幸緒）

悪霊がホントにいっぱい！ 小野不由美
古い洋館で、不気味にほほえむ人形の正体は!?（絵・中村幸緒）

悪霊がいっぱいで眠れない 小野不由美
天井から女がズルズルと出現。こわさ200%！（絵・中村幸緒）

悪霊はひとりぼっち 小野不由美
人魂とびかうホラー学園に、麻衣が挑戦！（絵・中村幸緒）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

読み出したら全力疾走! ただいま、君のハートに夢を配達中（神奈川・伊藤千春さん）

悪霊になりたくない! 小野不由美
行方不明者続出。人を食べてしまう恐怖の館。(絵・中村幸絵)

夢みるように、愛したい 折原みと
天使に恋を!? 桜子、16歳の、不思議LOVE。(絵・折原みと)

天使の降る夜 折原みと
愛里が天使のリョウくんに恋を。桜子は……。(絵・折原みと)

エンジェル・ティアーが聴こえる 折原みと
天使のシンくんと美紅。春の雪は天使の涙!? (絵・折原みと)

ティーンエイジ・ブルー 折原みと
秋生に「輝くBLUE」を見た、奈智の恋。(絵・折原みと)

彼の背中を抱きしめたい 折原みと
スタントマンを愛した美樹の、せつない恋。(絵・折原みと)

桜の下で逢いましょう 折原みと
美生、16歳。生まれかわりの不思議な恋を!? (絵・折原みと)

真夜中を駆けぬける 折原みと
心の闇に負けないで。輝く朝の光を歌おう!! (絵・折原みと)

2100年の人魚姫 折原みと
2100年の世界から来たルウが、可憐な恋を!? (絵・折原みと)

アナトゥール星伝 金の砂漠王（バーディア） 折原みと
結奈、16歳。星の宿命で砂漠の国の王女に!? (絵・折原みと)

時の輝き 折原みと
看護婦志望の由花、命の輝きを心で見つめて。(絵・折原みと)

真っ赤な扉（とびら） 覚和歌子
α次元の9つの扉に挑戦。新感覚ファンタジー。(絵・ふくやまけいこ)

清里幽霊事件 風見 潤
麻衣子と千尋クンのソ——ッとする夏休み。(絵・かやまゆみ)

スキー場幽霊事件 風見 潤
吹雪のなか、リフトに乗った犯人が消えた!? (絵・かやまゆみ)

ミナト神戸幽霊事件 風見 潤
神戸で殺された女の人が、そのとき横浜に!? (絵・かやまゆみ)

冬の京都幽霊事件 風見 潤
雪の密室からこつぜんと消えたのは鬼の腕!? (絵・かやまゆみ)

長崎異人館幽霊事件 風見 潤
麻衣子たちと笑顔で別れた女の子が殺された!? (絵・かやまゆみ)

原宿幽霊事件 風見 潤
東京のまん中で消えた麻衣子の同級生。なぜ!? (絵・かやまゆみ)

北海道幽霊事件 風見 潤
えーっ! 私も美奈子も殺されちゃった!? (絵・かやまゆみ)

東京ベイエリア幽霊事件 風見 潤
春のベイエリアは危険なかおりでいっぱい! (絵・かやまゆみ)

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

大好きです♡ でも、ほんとはちょっとつらいのです(埼玉・佐藤はるみさん)

2年極上ガールズ組　金子晴美
美少女誘拐犯を追って奇怪な危険な大冒険！（絵・大橋 薫）

2年極上ガールズ組② 美少年の巻　金子晴美
ふしぎな美少年と体験するドキドキ大事件！（絵・大橋 薫）

2年極上ガールズ組③ 呪われた宝石の巻　金子晴美
呪われた宝石がまきおこす奇怪な事件と謎！（絵・大橋 薫）

2年極上ガールズ組④ 妖怪大決戦!?の巻　金子晴美
壺で眠っていた妖怪が続々町にやってきた！（絵・大橋 薫）

あなたを追いかけて…　鎌田絵里
ユタカ！　あたしのことを、待っててネ!!（絵・竹原悠理）

ツーショットはあなたと…　鎌田絵里
マスミ。あたし、あなたを信じていいの…!?（絵・竹原悠理）

やさしさに ふれたくて…　鎌田絵里
お義兄さんとしてでなく、あなたが好きです。（絵・桐嶋ひろみ）

せつなくて片想い　鎌田絵里
金ボタンにこめられた、私の初恋の行方は!?（絵・桐嶋ひろみ）

私だけを、見つめてて　鎌田絵里
高校は違っても、あたしたち、大丈夫よね!?（絵・桐嶋ひろみ）

ホントの恋を知りたくて　鎌田絵里
あたし、好きな人を、なんとか見つけたい!!（絵・桐嶋ひろみ）

夏色のアルバム　鎌田絵里
死んだと思ってたママが、生きていたの…!!（絵・桐嶋ひろみ）

あなたの背中がやさしくて　鎌田絵里
あたし、あなたへの想いで、ハチ切れそう!!（絵・桐嶋ひろみ）

素直なあたしで恋したい　鎌田絵里
人を好きになる気持ち、止められますか…!?（絵・桐嶋ひろみ）

世界で一番のバレンタイン　鎌田絵里
女の子は恋を重ねてキレイになっていくの!!（絵・桐嶋ひろみ）

☆あなたを誰にもわたさない　鎌田絵里
双子の姉妹が、同じ人に恋しちゃったら…!?（絵・進上真樹）

天使のクリスマス　川名香津美
あたし、あなただけの天使になりたい！（絵・飯塚修子）

CATCH ME!! 幽霊くん　神崎あおい
ユーレイに恋してもいい、よネ？（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語　神崎あおい
彼となら、妖魔だってこわくない！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語2―カラドリウスの罠　神崎あおい
指輪に選ばれたあたしと邪悪な妖魔の戦い！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語3―緑のノクターン　神崎あおい
炎のアインに宿られた桜木大和VS.ヨコ指一家。（絵・高橋千鶴）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

自分(ワタシ)の想い、見つけたい （神奈川・清水文子さん）

ヨコハマ指輪物語4－哀しみのキマイラ　神崎あおい
ライオンと山羊の頭、蛇の尾の妖魔が出現！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語5－嘆きのキマイラ　神崎あおい
キマイラにとりつかれたミクモを救って！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語6－水魔プロケルの怒り　神崎あおい
指輪の秘密を探っていると、新妖魔が出た！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語7－水魔プロケルと第二の指輪－　神崎あおい
妖魔を倒す青い指輪の一つは、ここにあった！（絵・高橋千鶴）

8月5日 ときめき座　神崎あおい
きいてきた恋の魔法。どきどきときめき座。（絵・高橋千鶴）

11月8日 きらめき座　神崎あおい
いじワル美少女とわたし、彼の心は誰に？（絵・高橋千鶴）

青の迷宮（ラビリンス）　神崎あおい
愛の恐怖！　スイミングスクール殺人事件。（絵・高橋千鶴）

夢色の迷宮（ラビリンス）　神崎あおい
美形の彼が生き霊にあやつられてる！（絵・高橋千鶴）

抱きしめて!!　スターライト　神崎あおい
クリスマスの殺人！　彼と犯人を追います！（絵・高橋千鶴）

ささやいて!!　ホラーナイト　神崎あおい
霊気と妖気がただよう、恐怖の恋の物語！（絵・高橋千鶴）

リフレイン　KAORI 1987　神戸あやか
カオリ。ツッパリの高3。あたしの色を、読んで！（絵・三浦実子）

レフト・ビハインド　15歳KAORI　神戸あやか
逃げないで！　サトルからほんとの強さを知った。（絵・三浦実子）

シュガー・ベイビー　神戸あやか
シュガーちゃん、こと佐藤美子が、スターに!!（絵・三浦実子）

麦わら帽子のシンデレラ　神戸あやか
17歳のしのぶは、スターのヒコさんに夢中!?（絵・清水佳子）

彼女はベビーフェイス　神戸あやか
お待たせ!!　女子プロレスの元気印小説。（絵・楠瀬敦子）

ラジオ・プリンセス　神戸あやか
人気DJ「ぶっつんオイネ」は恋してる!?（絵・清水佳子）

ルーレット　KAORI FOR '88　神戸あやか
賭けるのは、あたしの未来。熱い恋の想い。（絵・三浦実子）

ラスト・ラブ・ソング　KAORI IN N.Y.　神戸あやか
好きなタツミと、ニューヨークふたり暮し。（絵・三浦実子）

うさぎのバレンタイン　神戸あやか
花の高2、さやかの標的は、32歳の渋い男!?（絵・三浦実子）

君の白い羽根　神戸あやか
夢を捨てない有美と祐樹が、ふたりで翔んだ!!（絵・清水佳子）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

本棚はティーンズでいっぱい！心はハートでいっぱい！（広島・岡本彩子さん）

カナリヤ・ガール 神戸あやか
モデルの卵、砂絵の悩みは、名古屋弁だがや!?（絵・三浦実子）

C 神戸あやか
圭、19歳。童貞なのに「14歳で経験」と公言。（絵・三浦実子）

瞳、輝くとき。 神戸あやか
青い瞳の夢子が、真実もとめて、アメリカへ。（絵・楠瀬敦子）

るんたった♪香港日記 神戸あやか
カンペとみうらの香港おもしろツアーライブ。（絵・三浦実子）

ホームズ君は恋探偵 北原なおみ
恋探偵の第1の事件は、〝キス泥棒を探せ〟!!（絵・成田ばお）

緋色のリップスティック―ホームズ君は恋探偵― 北原なおみ
ルージュの緋文字がまきおこす事件の謎は!!（絵・成田ばお）

4年目のラブサイン―ホームズ君は恋探偵― 北原なおみ
誕生日に届く、匿名プレゼントの謎は……!?（絵・成田ばお）

消えた卒業写真―ホームズ君は恋探偵― 北原なおみ
なぜ、卒業アルバム写真が盗まれたの……!?（絵・成田ばお）

秘密のラブメッセージ―ホームズ君は恋探偵― 北原なおみ
男子の制服を借りるのが、『好き』の表明!?（絵・成田ばお）

秋桜（コスモス）スキャンダル 樹山まみ
アイドルが狙われた！ 半熟探偵団、出動!!（絵・樹山まみ）

ガラスのアンブレラ 桐野まゆみ
先輩の傘に入れてもらって、恋がめばえた。（絵・かわちさおり）

ガラスの星座 桐野まゆみ
美香、16歳。幸生に美しい魂の輝きを見た。（絵・かわちさおり）

ガラスの天使 桐野まゆみ
片想い少女だった佳奈が本当の恋を知った!?（絵・かわちさおり）

スウィート・リトル・ダーリン―AZとカオル― 倉橋燿子
あずが愛したカオルは暴力団組長の息子!?（絵・小沢真理）

悲しみは雪のように―AZとカオル― 倉橋燿子
ママを救え!! あずとカオルが行動開始。（絵・小沢真理）

オン・ザ・ロード―AZとカオル― 倉橋燿子
カオルのいとこ、杏子の出現に、あずは……。（絵・小沢真理）

ロマンス・ブルー―AZとカオル― 倉橋燿子
カオル！ あたし、あなただけを愛してる!!（絵・小沢真理）

風を道しるべに…① MAO 14歳・春 倉橋燿子
麻央、14歳。両親が事故死して、運命暗転!!（絵・小野佳苗）

風を道しるべに…② MAO 15歳・夏 倉橋燿子
北海道の牧場ですごす、麻央の最初の夏は…。（絵・小野佳苗）

風を道しるべに…③ MAO 16歳・春 倉橋燿子
北海道にきて1年。麻央の高校生活開始！（絵・小野佳苗）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

今の乙女はティーンズハートを読んで大人になるの♡ （兵庫・沢田亜紀さん）

風を道しるべに…④ MAO16歳・秋 倉橋燿子
健太郎、あたしの心を裏切らないでネ……。（絵・小野佳苗）

風を道しるべに…⑤ MAO17歳・春 倉橋燿子
麻央の17歳の誕生日にわかる秘密とは……!?（絵・小野佳苗）

風を道しるべに…⑥ MAO17歳・夏 倉橋燿子
双子の兄とすごす、麻央のロンドンの夏休み。（絵・小野佳苗）

風を道しるべに…⑦ MAO17歳・冬 倉橋燿子
健太郎！ あたしたち、もう終わりなの…!?（絵・小野佳苗）

風を道しるべに…⑧ MAO18歳・春 倉橋燿子
最後はやっぱり、自分ひとり、なの……!?（絵・小野佳苗）

風を道しるべに…⑨ MAO18歳・夏 倉橋燿子
あたしたち、またここからスタートね……。（絵・小野佳苗）

風を道しるべに…⑩ MAO18歳・秋 倉橋燿子
あたし、もうひとつの旅立ちを、始めます!!（絵・小野佳苗）

きざみパセリのボーイズハート 倉橋燿子
オレ、男女の哲子でも、やっぱり好きだヨ!!（絵・川原由美子）

マッシュポテトのガールズハート 倉橋燿子
あたし、ユリオの助けがないと、ダメみたい。（絵・川原由美子）

2 BYE片想い 倉橋燿子
センバイ。テキな思い出、ありがとう!!（絵・西村しのぶ）

2 BYEバレンタイン 倉橋燿子
あなたに、私の初めての真心を、贈ります。（絵・西村しのぶ）

夏色の天使 (上) 倉橋燿子
天涯孤独となった、堀江野々香の将来は……!?（絵・沖野ヨーコ）

夏色の天使 (下) 倉橋燿子
あたしを捨てた父になんか、会いたくない!!（絵・沖野ヨーコ）

さようなら こんにちは① 倉橋燿子
あたしは、いったい、どこの誰なの……!?（絵・沖野ヨーコ）

さようなら こんにちは② 倉橋燿子
あたしなんか、いなくなったほうがいいんだ。（絵・沖野ヨーコ）

さようなら こんにちは③ 倉橋燿子
あの人を見ると、どうして涙がでるの……!?（絵・沖野ヨーコ）

さようなら こんにちは④ 倉橋燿子
あたし、絵里香の身代わりになってもいい!!（絵・沖野ヨーコ）

さようなら こんにちは⑤ 絵里香・初恋編 倉橋燿子
アキラは、あたしが初めて、恋した人なの!!（絵・沖野ヨーコ）

さようなら こんにちは⑥ 倉橋燿子
お帰りなさい、ママ！ 退院、おめでとう!!（絵・沖野ヨーコ）

さようなら こんにちは⑦ 倉橋燿子
覚悟はしていたけれど、とうとうその時が…!!（絵・沖野ヨーコ）

☆……今月の新刊

大人気ティーンズハート



▶真夜子



VOL.1

連邦暦211年。魔都ネオ・ナリタで、天才少年・涼は、愛する真夜子と出会った。だがやがて、恐怖の妖魔にとり憑かれてしまう。すさまじい妖魔の呪力に負けると、血に飢えた殺人鬼になるのだ——。

売切続出！
大迫力に話題集中

妖魔アルディーン

井上ほのかの

闘え！アルディーン！
愛する者のために！
これが噂の最強新シリーズ!!

VOL.2

ネオ・ナリタの闇の支配者を倒し、街の救世主となった涼に、新たな敵が！　妖艶な美女・梨花が甘く危険な罠へと、涼を誘いこむ。だがその裏で、本当の〝悪〟が、狂気の計画を進めていたのだ――。

NOW PRINTING!



◀涼・雨宮（闇の皇子アルディーン）

愛と闇の新たなる伝説――

都市戦記

大人気ティーンズハート

アイドルは名探偵・シリーズ



アイドルは名探偵

イラスト/瀬口恵子

真名子&克樹のわがまま・アイドル名探偵コンビが、さっそうとデビューしたのが、この本です。スタジオを舞台に連続殺人が！　事件を追う真名子も追いつめられて……!?　超・話題の1作です！



アイドルは名探偵2
それはKISSから始まった

イラスト/瀬口恵子

ロケ地・ハワイで、真名子と克樹の大活躍！　ギャングたちの暗号を手に入れたふたりですが、おかげで、マネージャーのマキさんが誘拐されてしまい……!?　またまた人気沸騰の〝ドル探〟です。



アイドルは名探偵3
愛してるっていわせたい

イラスト/瀬口恵子

真名子、ごきげんナナメで始まる第3弾。今度の依頼人は、17歳で日舞のお師匠、流し目得意の着物美人。謎の死をとげた彼女の婚約者が克樹にそっくりだとしても……克樹にくっつきすぎよッ！



井上ほのかの

アイドルは名探偵4

いつまでもそばにいて

イラスト／瀬口恵子

抜群のルックスとウソばっかしの口説き文句で、女の子を次々に狂わせてしまう清史郎。この芸能界一の問題児と共演することになった真名子。ホントに大丈夫!?　ところが、その清史郎の秘密に真名子が気づいたときには、恐怖の殺人計画は進められていたのです……。

大人気ティーンズハート



『少年探偵セディ』シリーズ

1 名探偵を起こさないで

本のなかの主人公になりきっちゃうほど、想像力が豊かすぎる人、いませんか？　眉子も、そう。『少年探偵セディ』になって、大人顔負けの名推理を始めるのです。恋人のダンをはじめ、S79号、ゴーバル博士たちも、この本で初めてお目見え。難事件なら、セディにおまかせ！



＊すてきにクラシック。本格ミステリの楽しさがいっぱいです！